広島県三次市文化財調査報告書　第８集

門田敦盛第２・３・４号古墳
発掘調査報告書

2015 年６月

特定非営利活動法人 広島文化財センター

調査区全景（南上空から）

巻頭図版２

1. 第４号古墳石室（南から）

2. 第４号古墳石室３Ｄモデル

1．第３号古墳出土 素環頭大刀（左：環頭部　右：筒金具）

2．第４号古墳出土 柄香炉形土製品

門田敦盛第２・３・４号古墳
発掘調査報告書

2015年6月

特定非営利活動法人　広島文化財センター

例　言

1．本書は，三次市農業交流連携拠点施設整備造成工事に伴い，三次市の委託を受け，三次市教育委員会の監理，監督のもとで，特定非営利活動法人広島文化財センターが実施した門田敦盛第２・３・４号古墳の発掘調査報告書である。

2．発掘調査時は，門田敦盛第４号古墳・第５号古墳・第６号古墳として調査を実施したが，本報告において，第４号古墳を第２号古墳，第５号古墳を第３号古墳，第６号古墳を第４号古墳と改める。但し，遺物の注記や原図・写真のキャプション等は発掘調査時の古墳名称を記入している。

3．発掘調査は平成 26（2014）年５月７日～９月 12 日にかけて実施し，出土遺物の整理および報告書作成は平成 26(2014)年９月 16 日～平成 27(2015)年６月 30 日にかけて実施した。

4．発掘調査は，広島文化財センター 濵岡大輔が担当し，特定非営利活動法人 人類学研究機構 松下真実が補佐した。事務に関する業務は，広島文化財センター事務局 重森正樹が行い，整理作業及び遺物実測・写真撮影・編集等の報告書作成に関する作業は，濵岡が行った。

5．基準点の設置，航空写真撮影・写真測量を有限会社ウイング，石室の３Ｄ測量を株式会社計測リサーチコンサルタント，鉄製品のＸ線撮影を関西エックス線株式会社に委託した。

6．発掘調査および報告書作成にあたり，下記の方々・機関より御指導，御教示を賜り，調査にあたり便宜を図っていただいた。記して謝意を表したい。（敬称略）

安間拓巳　伊藤　実　稲垣寿彦　植野浩三　梅本健治　大上裕士　奥井智子　尾崎光伸　加藤　謙
加藤光臣　河村靖宏　桑原隆博　重見　泰　新川　隆　新祖隆太郎(故人)　杉原弥生　辻　満久
辻村哲農　津田真琴　中畑和彦　中村芳昭　中山　学　濱口和弘　藤原好二　船井向洋　松下正司
松下孝幸　山田繁樹　株式会社加藤組 倉敷埋蔵文化財センター 公益財団法人奥田元宋・小由女美術館
公益財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室　広島県立歴史民俗資料館

7．本書で使用した土層および土器の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色標監修)による。

8．本文中に用いた方位は，第１図が平面直角座標Ⅲ系北を示し，他は磁北である。

9．本書に掲載した第１図は，国土地理院発行の 25,000 分１の地形図（三次）を使用し，第２図は三次市の三次圏都市計画図(平成 11 年作成，2,500 分の１)を使用した。

10．本文で使用した土器の器種・器形は奈良国立文化財研究所の『平城宮発掘調査報告　Ⅶ』(1976 年)や『飛鳥・藤原宮発掘調査報告書　Ⅱ』(1978 年)，須恵器の型式名は『須恵器大成』(田辺昭三　1981 年)で使用されているものを準用した。

11．発掘調査に伴う図面，写真などの記録類，出土遺物は三次市教育委員会が保管する。

目　　次

Ⅰ　はじめに……1

Ⅱ　位置と環境……2

Ⅲ　調査の概要……6

Ⅳ　遺構・遺物……9

Ⅴ　まとめ……39

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図……3
第２図　周辺地形図及び調査区位置図……6
第３図　調査前地形測量図……7
第４図　埋葬施設調査後地形測量図及び遺構配置図……8
第５図　第２号古墳平面図・墳丘土層断面図……10
第６図　第２号古墳埋葬施設平面図・断面図……11
第７図　第２号古墳出土遺物……11
第８図　第３号古墳平面図……13
第９図　第３号古墳墳丘土層断面図……14
第10図　第３号古墳埋葬施設平面図・断面図……15
第11図　第３号古墳出土遺物……15
第12図　第３号古墳墳丘南側遺物出土状況……16
第13図　第３号古墳墳丘南側出土遺物……17
第14図　第４号古墳平面図……19
第15図　第４号古墳墳丘主軸土層断面図……20
第16図　第４号古墳周溝土層断面図……20
第17図　第４号古墳外護列石土層断面図……20
第18図　第４号古墳石室立面図……21
第19図　第４号古墳墳丘土層断面図……21
第20図　第４号古墳石室平面図……23
第21図　第４号古墳前庭部及び閉塞石平面図
　　・土層断面図……23
第22図　第４号古墳石室展開図……24
第23図　第４号古墳石室構築状況……25
第24図　第４号古墳石室内遺物出土状況……26
第25図　第４号古墳石室内木棺推定位置図……26
第26図　第４号古墳石室内鉄釘出土状況……26
第27図　第４号古墳石室内土器出土状況……28
第28図　第４号古墳出土遺物①……30
第29図　第４号古墳出土遺物②……32
第30図　第４号古墳出土遺物③……33
第31図　溝ＳＤ１土層断面図……34
第32図　第４号古墳土器型式分布図……35
第33図　柄香炉模倣品……42

表　目　次

第１表　出土遺物一覧（土器）……36
第２表　出土遺物一覧（鉄製品①）……36
第３表　出土遺物一覧（鉄製品②）……37・38
第４表　広島県内出土素環頭大刀計測表……38
第５表　広島県内鉄剣出土古墳一覧……40

図 版 目 次

巻頭図版１　調査区全景(南上空から)
巻頭図版２
１．第４号古墳石室（南から）
２．第４号古墳石室３Ｄモデル
巻頭図版３
１．第３号古墳出土素環頭大刀
２．第４号古墳出土柄香炉形土製品

図版１
１．調査区全景(調査前・南上空から)
２．調査区全景(南上空から)
図版２
１．調査区全景(調査前・西上空から)
２．調査区全景（西上空から）
図版３
１．第２号古墳（上空東より）
２．第２号古墳（南西より）
３．第２号古墳周溝内遺物出土状況（北から）
図版４
１．第２号古墳墓坑検出状況（西から）
２．第２号古墳墓坑土層断面（南から）
３．第２号古墳墓坑遺物出土状況（南から）
図版５
１．第２号古墳墓坑完堀状況（西から）
２．第２号古墳墳丘土層断面（南西から）
３．第２号古墳北側周溝土層断面（西から）
図版６
１．第３号古墳（上空東から）
２．第３号古墳（南から）
３．第３号古墳周溝土層断面（北東から）
図版７
１．第３号古墳（南東から）
２．第３号古墳（南西から）
３．第３号古墳墳丘土層断面（東から）
図版８
１．第３号古墳素環頭大刀出土状況（北西から）
２．第３号古墳棺跡検出状況（南西から）
３．第３号古墳棺跡土層断面（北東から）
４．第３号古墳棺跡土層断面（北から）
図版９
１．第３号古墳周溝北側遺物出土状況（北から）
２．第３号古墳南側遺物出土状況（北から）
３．第３号古墳南側土層断面（北から）
図版 10
１．第４号古墳（南から）
２．第４号古墳周溝北側土層断面（東から）
３．第４号古墳周溝内遺物出土状況（東から）
図版 11
１．第４号古墳墳丘土層断面（南から）
２．第４号古墳墳丘西側土層断面（南から）
３．第４号古墳墳丘東側土層断面（南から）
４．第４号古墳墳丘北側土層断面（西から）
５．第４号古墳墳丘南西側（外護列石部分）土層断面（南から）
図版 12
１．第４号古墳盗掘坑検出状況（北東から）
２．第４号古墳盗掘坑土層断面（南から）
３．第４号古墳盗掘坑内天井石検出状況（南から）
図版13
１．第４号古墳前庭部検出状況(南から)
２．第４号古墳前庭部土層断面(南から)
３．第４号古墳前庭部崩落石検出状況(南から)
４．第４号古墳前庭部完堀状況(南から)
図版14
１．第４号古墳外護列石東側(南西から)
２．第４号古墳外護列石西側(南東から)
３．第４号古墳前庭部外護列石南側遺物出土状況（南から）
図版15
１．第４号古墳石室天井石検出状況(東から)
２．第４号古墳石室天井石(北側)検出状況(南東から)
３．第４号古墳石室天井石(南側)検出状況(東から)
図版16
１．第４号古墳石室天井石検出状況(西から)
２．第４号古墳石室天井石検出状況(南から)
３．第４号古墳天井石(南側２石)除去後(南から)
４．第４号古墳天井石(南側から３石目)除去後(南から)
図版17
１．第４号古墳石室奥壁(南から)
２．第４号古墳石室奥壁西隅(南から)
３．第４号古墳石室奥壁東隅(南から)
４．第４号古墳石室内見通し(南から)
５．第４号古墳石室内見通し(北から)
図版18
１．第４号古墳石室全景(南から)
２．第４号古墳石室西側壁南側(南東から)
３．第４号古墳石室西側壁北側(南東から)
図版19
１．第４号古墳石室東側壁南側(南西から)
２．第４号古墳石室東側壁南側〔積み直し部分〕(東から)
３．第４号古墳石室東側壁北側(南西から)

図版20

1．第４号古墳石室内遺物出土状況〔奥壁側最上層〕
（南西から）

2．第４号古墳石室内遺物出土状況（南から）

図版21

1．第４号古墳石室内遺物出土状況〔奥壁側〕
(南から）

2．第４号古墳石室内遺物出土状況〔東側壁側〕
（西から）

3．第４号古墳東側壁側遺物出土状況（西真横から）

図版22

1．第４号古墳東側壁側遺物出土状況（南真横から）

2．第４号古墳東側壁側遺物出土状況〔坏16の下側〕
（西から）

3．第４号古墳東側壁側遺物出土状況〔坏13の下側〕
（西から）

図版23

1．第４号古墳東側壁側遺物出土状況
〔坏蓋１・５の下側〕（西から）

2．第４号古墳墓坑検出状況（南から）

3．第４号古墳墓坑内壺18破片出土状況（東から）

図版24

1．第４号古墳羨道部側壁の積み替え部分・
崩落石除去後（南から）

2．第４号古墳墓坑西側埋土土層断面（南から）

3．第４号古墳墓坑東側埋土土層断面（南から）

図版25

1．第４号古墳石室基底石（南から）

2．第４号古墳石室基底石（北から）

3．第４号古墳墓坑完堀状況（南から）

図版26

1．溝ＳＤ１（上空南から）

2．溝ＳＤ１土層断面（南から）

3．調査区完堀状況（南から）

図版27　出土遺物１

図版28　出土遺物２

図版29　出土遺物３

図版30　出土遺物４

図版31　出土遺物５

図版32　出土遺物６

図版33　出土遺物７

Ⅰ　はじめに

門田敦盛第２～４号古墳の調査は，三次市農業交流連携拠点施設整備造成工事に伴うものである。農業交流連携拠点施設は，三次市全域を対象に，「農業生産力の強化」，「販売力の強化」を狙い，農林水畜産物等の生産から販売をつなぐ役割を担い，また，三次市内で生産される産品を扱うことで「オール三次産品」の良さを全国に発信していくために整備される施設である。中国横断自動車道尾道松江線の全線開通を活かし，広島三次ワイナリー，奥田元宋・小由女美術館，みよし運動公園，大型遊具などの周辺の既存施設とともに相乗効果を生むことで，魅力ある目的地として選ばれる施設となることをめざしている。

本事業に伴い，三次市（以下「市」という）は，平成 25（2013）年 10 月 21 日に当該事業地内の文化財等の有無及び取扱いについて三次市教育委員会（以下「市教委」という）と協議した。市教委では，これを受けて現地踏査を行い，平成 25 年 10 月 23 日に事業地内において試掘調査が必要なことを回答した。回答を受けて，市から平成 26（2014）年３月 23 日に市教委へ試掘調査の依頼があり，市教委は平成 26 年３月 25 日に試掘調査を実施し，古墳３基を確認した。

市教委は，市に対し平成 26 年４月３日に門田敦盛第２号古墳・第３号古墳・第４号古墳（850㎡）を確認した旨を回答した。その後，市と市教委とで古墳の取り扱いについて協議したが，古墳の現状保存は困難となったため，記録保存を図ることとなった。これを受けて，市より同年４月４日付で埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）が提出され，市教委は事前の発掘調査が必要な旨を同年４月 17 日付けで通知した。

発掘調査は，市より特定非営利活動法人広島文化財センター（以下「文化財センター」という）へ依頼があり，平成 26 年４月 21 日に発掘調査及び整理業務委託契約を締結した。文化財センターは，同年４月 24 日付で埋蔵文化財の発掘調査についての届出（第 92 条第１項の届出）を市教委へ提出し，同年５月７日に慎重に発掘調査を実施する旨の通知を受けた。

発掘調査は，平成 26 年５月７日から同年９月 12 日まで実施し，９月 12 日に市教委に出土文化財保管証を提出，三次警察署に埋蔵文化財（遺物）発見届を提出した。整理作業・報告書作成作業は，同年９月 16 日から平成 27（2015）年６月 30 日まで実施した。

調査期間中の８月 23 日には現地説明会を行い，約 40 人の参加があった。10 月 23 日には三次地方史研究会・芸備友の会主催の「広島県の遺跡は今」報告・講演会にて，門田敦盛古墳群についての調査報告を行った。

また，広島県立歴史民俗資料館の『かぐわしき日本の香り』展に門田敦盛第４号古墳出土の柄香炉形土製品の展示を行い，調査成果をいち早く地元の方々に発表する機会を得ることができた。

発掘調査・報告書作成にあたっては，三次市教育委員会の監理・監督を受けるとともに，広島県教育委員会，三次市文化財保護委員会の指導を受けた。

Ⅱ　位置と環境

門田敦盛第２～４古墳は，広島県三次市東酒屋町敦盛437－１に所在する。東酒屋町周辺の地質[1]は，白亜紀中期の流紋岩類を基盤として岩脇・糸井衝上断層の山々が標高300～350mを形成し，山腹の標高200m前後には，塩町累層・備北層群・浸食段丘が発達している。

調査区は，台地状地形上の標高約233～240m，南北に延びる丘陵から西側へ派生した低丘陵上に位置している。近隣には狭い谷地形が多く，農業用の溜池が多く位置している。

調査区北側には，造山活動が激しくなったときに海に堆積していた備北層群の上層部が地滑りを起こし，他の場所に堆積していた地層が運ばれてきた「海底地滑り褶曲」(広島県天然記念物)があり，事業予定地内にもそれに関連する地層が見受けられる。

三次盆地には数多くの遺跡が確認されているため，調査区周辺の遺跡を中心に時代別に挙げる。

旧石器時代

三次市内で最古と考えられているのは下本谷遺跡配水池地点（第１図53）[2]出土の石器群で，三瓶池田テフラ(49,000～50,000年前)と姶良丹沢火山灰(29,000年前)の間にあたる層から出土している。石器は，流紋岩を多用した粗雑な加工のもので，後期旧石器時代の初頭あるいは中期旧石器時代まで遡る可能性が指摘されている。同じような石器が，松ヶ迫遺跡群(第１図24)[3]，宗祐池遺跡[4]，宮風呂遺跡(四拾貫町)[5]からも出土しており，同様の時期の可能性が指摘されている。

続く後期旧石器時代ナイフ形石器文化前半期と考えられる石器群としてナイフ形石器・台形様石器・尖頭形石器が出土した下本谷遺跡北地点(最高所地点)[2]がある。

縄文時代

縄文時代早期の住居跡が松ヶ迫Ｂ地点遺跡(第１図24)[3]で確認されており，緑岩・松ヶ迫Ａ地点遺跡(第１図17・19)[6]，下本谷遺跡郡衙政庁地点(第１図53)[2]などでは動物を捕獲するための落とし穴が検出されている。

続く前期から中期の遺跡は，三次盆地ではまだ未確認で，それ以降の時期も元国遺跡(粟屋町)[7]から縄文時代後期後半の時期と考えられる粗製深鉢形土器が出土しているが遺構は確認されていない。

弥生時代

高蜂遺跡（第１図20）[6]では縄文時代晩期の突帯文土器と共に弥生時代前期の土器が住居跡から出土しており，中国地方でも最古の弥生土器の１つとされている。

墳墓に関しては，多くの遺跡が確認されている。弥生時代前期の積石を伴う墳墓が検出された高平遺跡（十日市南）[8]，中期後半の土坑墓群が検出された四拾貫小原遺跡（第１図14）[9]，中期

1. 門田敦盛第２・３・４号古墳　2. 門田敦盛第１号古墳　3. 大成古墳群　4. 門田河面古墳　5. 松尾古墳群
6. 松尾徳市遺跡　7. 大坂古墳群　8. 天狗松南古墳群　9. 天狗松北古墳群　10. 善法寺古墳群　11. 黄幡古墳群
12. 宗祐池西古墳群　13. 宗祐池東古墳群　14. 四拾貫小原古墳群　15. 宗祐池西遺跡　16. 宗祐池２号遺跡
17. 緑岩遺跡　18. 緑岩古墳　19. 松ヶ迫Ａ地点遺跡　20. 高峰遺跡　21. 掛原下遺跡　22. 掛原遺跡
23. 宗祐池１号遺跡　24. 松ヶ迫遺跡群　25. 矢谷古墳【史跡】26. 西谷古墳群　27. 金毘羅古墳群　28. 岩倉古墳群
29. 魚切古墳群　30. 泉水古墳　31. ろくろ谷古墳群　32. 嫁ヶ釜古墳群　33. 丸草田古墳群　34. 大原迫古墳群
35. 寄貞城跡　36. 寄貞古墳群　37. 寄貞西古墳群　38. 大久保南古墳　39. 三段田城跡　40. 末元城跡
41. 抜湯古墳群　42. 大久保古墳群　43. 酒屋高塚古墳【県史跡】　44. 植松古墳群　45. 沼山城跡　46. 高平遺跡群
47. 花園古墳群　48. 大樽池古墳群　49. 若宮古墳【県史跡】　50. 花園遺跡【史跡】　51. 日光寺遺跡【県史跡】
52. 日光寺経塚群　53. 下本谷遺跡【県史跡】

第１図　周辺遺跡分布図（１：25,000）

後半の四隅突出型墳丘墓が検出された宗祐池西遺跡（第１図15）[10]，後期を中心とする貼石や溝で区画された墳丘墓をはじめとして未確認のものを含めると全体で400～500基の埋葬墓が存在すると推定される花園遺跡（第１図50）[11]，弥生時代終末期の四隅突出型墳丘墓として国史跡に指定されている矢谷古墳(第１図25)[3]などの墳墓に関する遺跡が存在している。

古墳時代

門田敦盛第１号古墳（第１図２）は，三次市教育委員会により1981年に調査された円墳（径約７ｍ・高さ１ｍ）である。墳頂の標高は236.9ｍで，埋葬施設は長さ179㎝，幅65㎝の木棺直葬が確認されている。副葬品などの出土遺物はなく，時期は不明である。

門田敦盛第１号古墳(北西から)

門田敦盛第１号古墳埋葬施設(南から)

善法寺古墳群（第１図10）[12]は，前期から中期まで続く21基の古墳群で，第９号古墳は全長35ｍの前方後円墳で内行花文鏡などが出土しており，第11号古墳は全長34ｍの前方後方墳である。

若宮古墳(第１図49)[13]は，花園古墳群(25基)の主墳と考えられている全長約38m，後円部径25ｍの前方後円墳で，４世紀後半の築造と推定されている。

大久保古墳群（第１図42）[14]は，古墳時代中期の古墳群で17基で構成されている。いずれも円墳で，第５号古墳からは滑石製の琴柱形石製品や鉄剣が出土している。

大坂古墳群（第１図７）[15]は，５世紀後半から６世紀前半頃の古墳群で，これまで８基が確認されているがそれ以外に低墳丘を有する古墳の存在が推定されている。

酒屋高塚古墳(第１図43)[16]は，全長約46ｍの帆立貝形古墳で２基の竪穴式石室が確認されている。石室からは画文帯神獣鏡や鉄鏃・鉄斧・鉄鍬などが出土しており，古墳時代中期末頃と考えられている。

緑岩古墳(第１図18)[6]は，直径20ｍの円墳である。周溝からは残りの良い馬形埴輪・円筒埴輪や須恵器が出土している。須恵器は，坏の身と蓋が12セット組み合わさった状態で出土しており，祭祀で用いられた状況を良好に表している。

天狗松古墳群(第１図９)[17]は，22基で構成された古墳群で，第１～７号古墳が調査されている。これらの古墳は直径10m前後の円墳ある。第１号古墳は床面砂利敷きの竪穴式石室で須恵器・有孔砥石・鉄鏃が出土している。第４号古墳は床面砂利敷きの長さ5ｍの横穴式石室で須恵器・鉄滓が出土している。第５号古墳は長さ6.2ｍの横穴式石室で，須恵器・暗文のある土師器・耳環・玉類など多くの遺物が出土している。第６号古墳は長さ８ｍの横穴式石室で，床面の奥壁部分に割石が敷かれていた。石室内からは鉄刀・刀装具・須恵器が出土している。

集落跡としては，５世紀後半の高蜂遺跡（第１図20），６世紀代の日光寺遺跡（第１図51）[18]，

6世紀後葉から7世紀前葉の松ヶ迫遺跡群（第1図24）などが調査されている。また松ヶ迫遺跡群では6世紀後半の須恵器窯が2基と工房跡と考えられる竪穴住居状遺構が確認されている。

飛鳥・奈良・平安時代

下本谷遺跡（第1図53）[19]は，標高230mの低丘陵上に位置する古代三次郡の郡衙に推定されている。遺構は4時期に大別され，Ⅰ期は掘立柱建物が丘陵上に散在する時期で，Ⅱ期以降丘陵の南端にコ字状に掘立柱建物を配置するようになる。遺跡一帯からは，須恵器・土師器・緑釉陶器などが出土しており，7世紀後半から10世紀までの年代が考えられている。Ⅰ期の建物群は，郡衙に先行する三次評の評衙とも考えられている。

寺町廃寺（向江田町）[20]は，『日本霊異記』記載の備後国三谷郡の三谷寺に推定されている寺院で，伽藍は南面して東に塔，西に金堂が並列し，北側に講堂が置かれ，それを取り囲むように回廊が廻る法起寺式の伽藍配置である。遺物のうち，軒丸瓦は瓦当の下端に突起をもった，いわゆる「水切り瓦」で，白鳳期から平安時代初期までの8種類が出土している。他に鴟尾や唐三彩の破片，柄香炉（柄の瓶鎮部分）などが出土している。

【註】

（1）卯山善章「自然環境編」『三次市史』Ⅰ　2004年
（2）広島県教育委員会『下本谷遺跡発掘調査概報』～『下本谷遺跡第6次発掘調査概報』　1980～1985年
　戸田正勝・三枝健二「広島県北東部における後期旧石器初頭の石器文化について－下本谷遺跡範囲確認調査資料の再検討から－」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第7集　2009年
（3）広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財調査センター『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告－三次工業団地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査－』　1981年
（4）妹尾周三「三次市南畑敷宗祐池採集の旧石器」『芸備』第12集　芸備友の会　1982年
　三枝健二「三次盆地の地形と歴史－旧石器時代－」『研究紀要』第5集　広島県立歴史民俗資料館　2005年
（5）（財）広島県埋蔵文化財調査センター『宮風呂遺跡』広島県埋蔵文化財調査報告書第120集　1994年
（6）広島県教育委員会『緑岩古墳－三次工業団地第二期造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査』　1983年
（7）妹尾周三「元国遺跡」『三次市史』Ⅱ　2004年
（8）広島県教育委員会『広島県文化財調査報告』第9集　1971年
（9）四拾貫小原発掘調査団『四拾貫小原』　1969年
（10）三次市教育委員会『宗祐池西遺跡』　2000年
（11）三次市教育委員会『史跡 花園遺跡－調査と整備－』　1979年
　三次市教育委員会『史跡 花園遺跡－第二調査と整備－』　1980年
（12）桑原隆博「善法寺古墳群」『三次市史』Ⅱ　2004年
（13）桑原隆博「若宮古墳」『三次市史』Ⅱ　2004年
　三次市教育委員会『松尾徳市遺跡・県史跡若宮古墳』　広島県三次市文化財調査報告書第7集　2014年
（14）広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（二）』　1979年
（15）大坂遺跡発掘調査団『大坂遺跡』　1985年
（16）広島県教育委員会『酒屋高塚遺跡』　1983年
（17）桑原隆博「天狗松古墳群」『三次市史』Ⅱ　2004年
（18）山田繁樹「日光寺遺跡」『三次市史』Ⅱ　2004年
（19）下本谷遺跡発掘調査団『下本谷遺跡－推定備後国三次郡衙跡の発掘調査報告－』　1975年
　広島県教育委員会『下本谷遺跡発掘調査概報』～『下本谷遺跡第6次発掘調査概報』　1980～1985年
（20）三次市教育委員会『備後寺町廃寺－推定三谷寺跡発掘調査概報－』第1次～第3次　1980～1982年

Ⅲ　調査の概要

門田敦盛第２・３・４号古墳は，三次市市街地（JR三次駅）から南西に約3㎞の低丘陵上，三次市東酒屋町敦盛437－１に位置している。

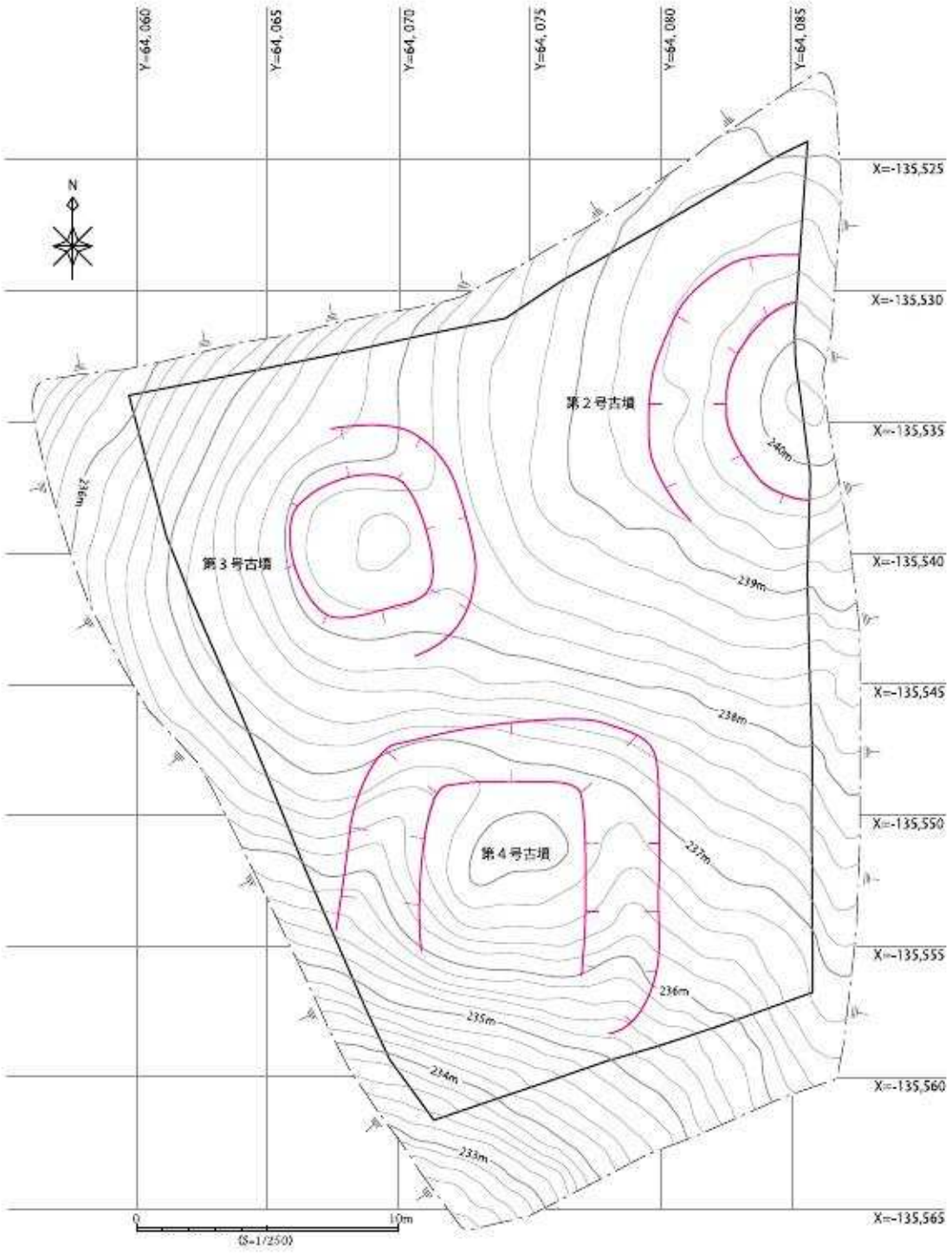
調査区内では樹木の伐採が終わった段階で，第２号古墳は墳丘，第３・４号古墳は墳丘と周溝を地表面で確認することができた。そのため，本調査においては，人力掘削により調査を実施した。

調査区面積は850㎡で，世界測地系に沿って10mごとのグリッドを設定し，各古墳の墳丘上に土層観察用の畦を設定し，人力で表土・包含層の除去を行った。調査途中，第２号古墳の東側，第４号古墳の西側，溝SD1の南側を部分的に拡張した。

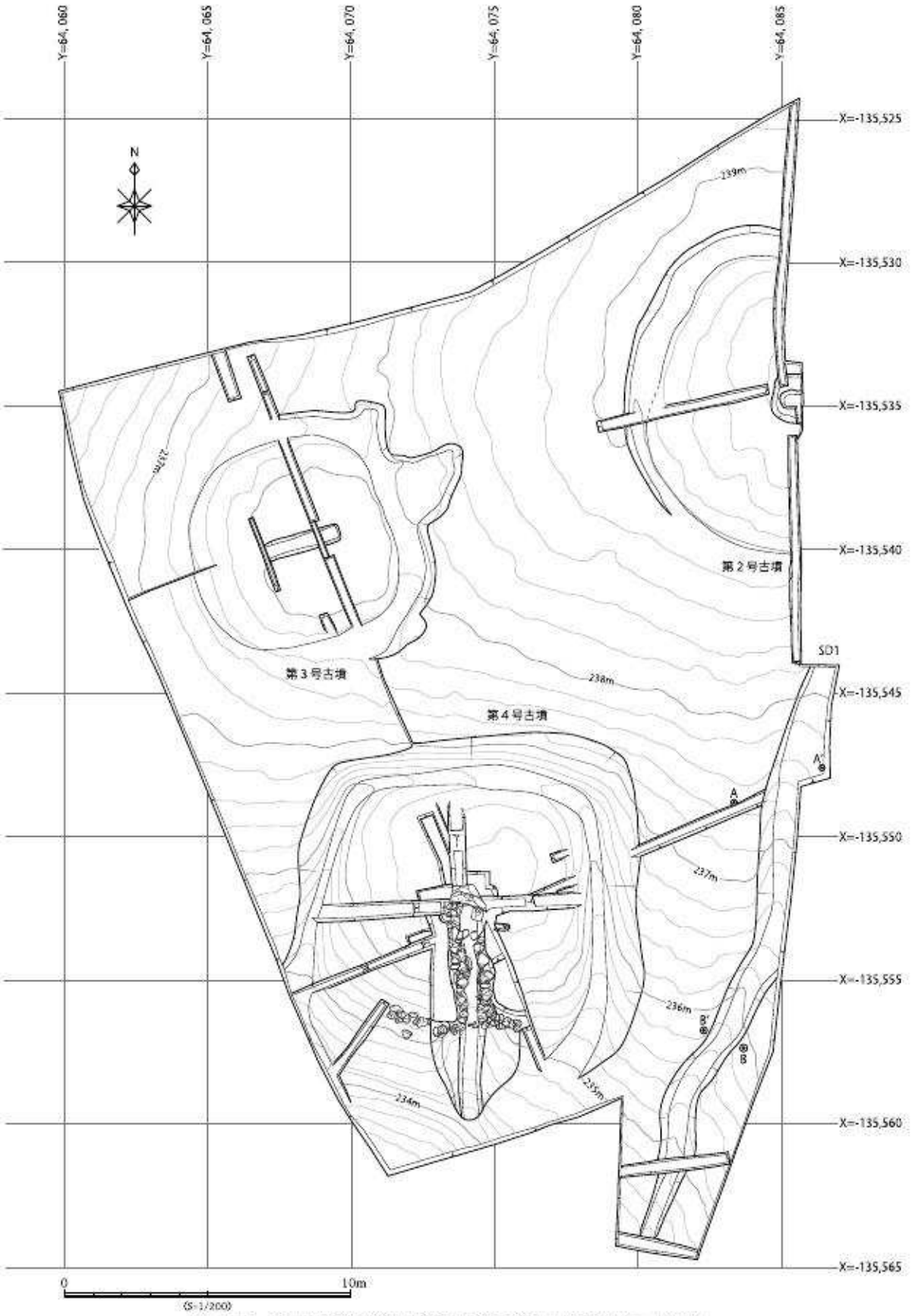
地表面から地山まで約15～20cmの深さで，遺構検出は墳丘以外は地山面上で行った。調査区内で検出した遺構は，第２・３・４号古墳，溝SD １である。

第２号古墳は，周溝を伴う直径約10mの円墳で，墳頂部の埋葬施設から鉄剣・鉄鏃が出土した。第３号古墳は，周溝を伴う直径約８ｍの円墳で，墳頂部の埋葬施設から素環頭大刀と刀子が出土した，墳丘南側からは第４号古墳に関係すると考えられる須恵器が破砕された状態で出土した。第４号古墳は，周溝を伴う一辺9.5mの方墳で，横穴式石室の開口部から外護列石が取りつく。石室内からは須恵器（坏・坏蓋・高坏・壺・柄香炉形土製品），鉄釘が出土した。

第２図　周辺地形図及び調査区位置図（１：5,000）



第３図　調査前地形測量図（１：250）



第４図　埋葬施設調査後地形測量図及び遺構配置図（１：200）

Ⅳ　遺構・遺物

1．門田敦盛第２号古墳

調査区の北東に位置する円墳である。門田敦盛古墳群の中で最高所（標高240ｍ）に位置している。墳丘の東側は，南北に通る道路建設のために削平されており，墳頂部も墳丘削平後の法面保護のコンクリート吹き付け工事のために削平されていた。埋葬施設は，墳頂部に約半分が残存していた。

【遺構】(図版３～５)

墳丘・周溝(第５図)

表土を除去後，南北9.5m，東西5.5m(残存部分)の円墳を検出した。埋葬施設の位置から墳丘の中心は，削平された側にあると考えられるため，墳丘の本来の大きさは直径が約10mなると推定される。古墳は丘陵上の高所にあり，周溝を廻らすことで，墳丘が大きく見えるようになっている。周溝底からの墳丘の高さは1.1mで，地山面から墳頂部までの高さは60cmである。墳頂部は削平を受け，なだらかな平坦面を呈している。構築時の墳丘はさらに高かったと推定される。墳丘は，旧表土と考えられる層(第５図10層)の上に厚さ20～30cmの盛土を行い，築造されている。盛土には，地山土の灰黄色や淡黄色の粘質土が用いられていることから，周溝の掘削土や古墳周辺を削平した土が盛られたと考えられる。周溝は墳丘の北側から南西側を廻り，幅0.8～1.2m，深さが10～20cmである。墳丘南側では，周溝を確認することができなかったため，築造時から周溝が設けられなかったとも考えられる。

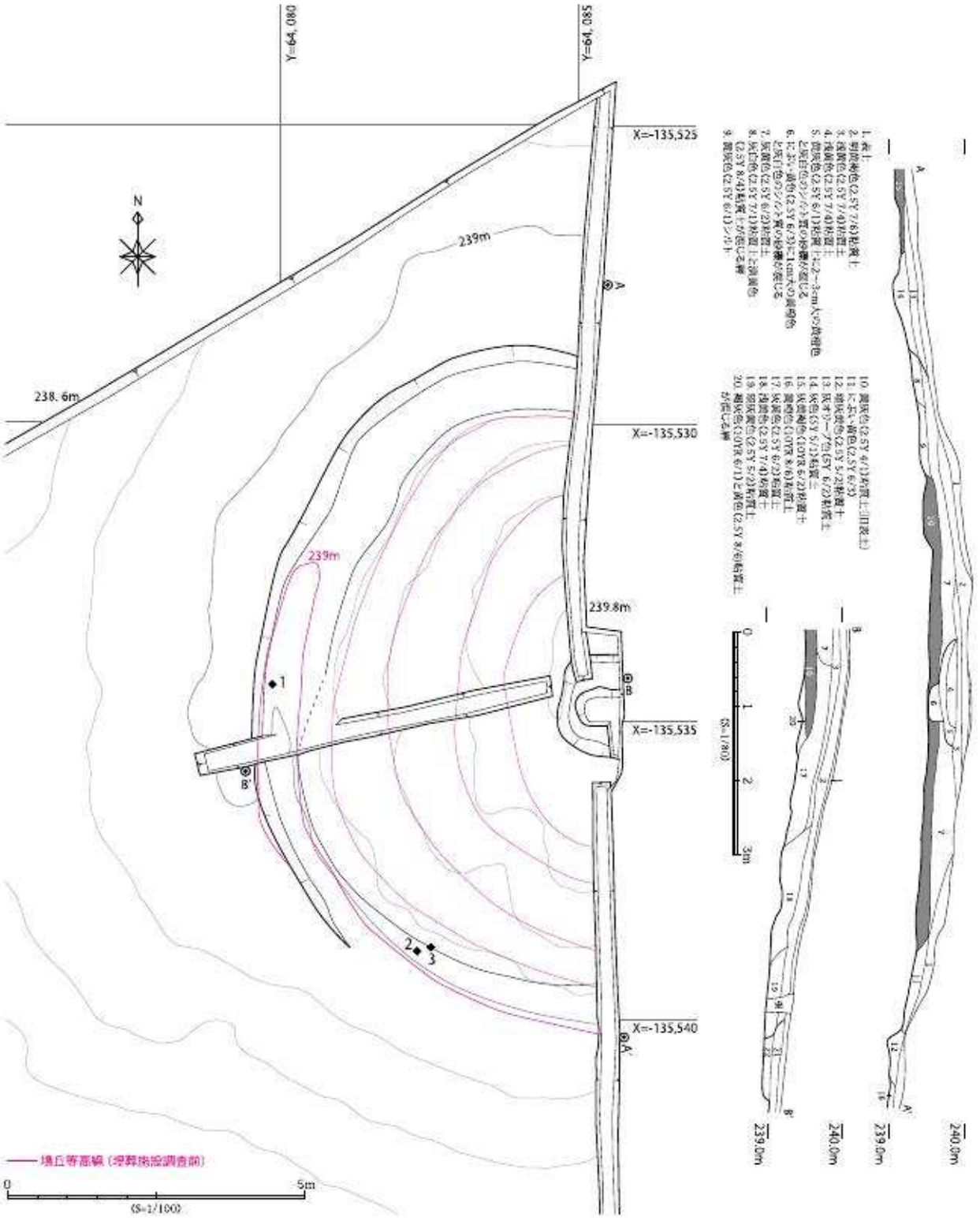
埋葬施設(第６図)

墳頂部において，ほぼ東西方向（N-80°-E）に主軸をもつ埋葬施設を検出した。埋葬施設は墓坑内に木棺を納めた木棺直葬で，墳丘東側が消失しているため墓坑全体の規模は不明である。墓坑は幅1.78m，残存長1.2m，深さ26cmで，中央は木棺を据えるために１段深く（深さ38cm）なる二重墓坑になっており，床面は平らである（標高239.55m)。木棺は，墓坑の形態から幅約40cmと考えられ，鉄釘が出土していないことから，組合式の木棺が納められていたと考えられる。棺内には，鉄剣と鉄鏃が副葬されており，鉄剣は棺のほぼ中央に切先を西側に向けた状態(標高239.58m)で，鉄鏃は棺の西側小口(標高239.60m)の位置でまとまって出土した。副葬品の位置関係から，被葬者は頭部を東側に向けていたと考えられる。

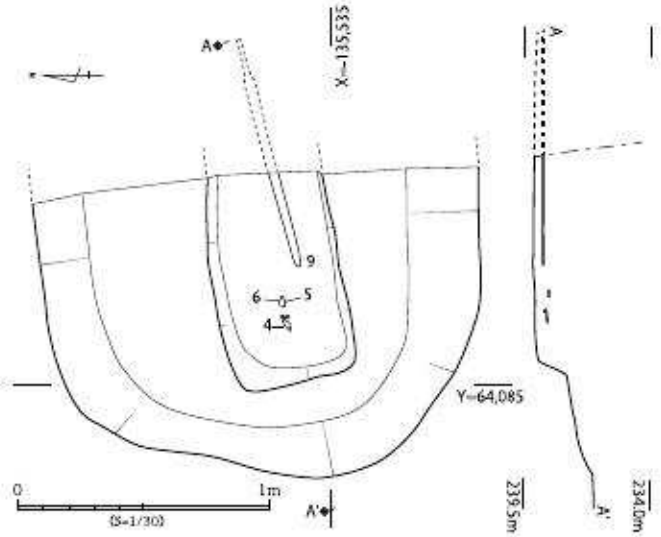
【遺物】(第７図　図版27)

遺物は，須恵器・土師器が墳丘裾及び周溝内から破片の状態で出土しており，鉄製品は墓坑内から出土した。

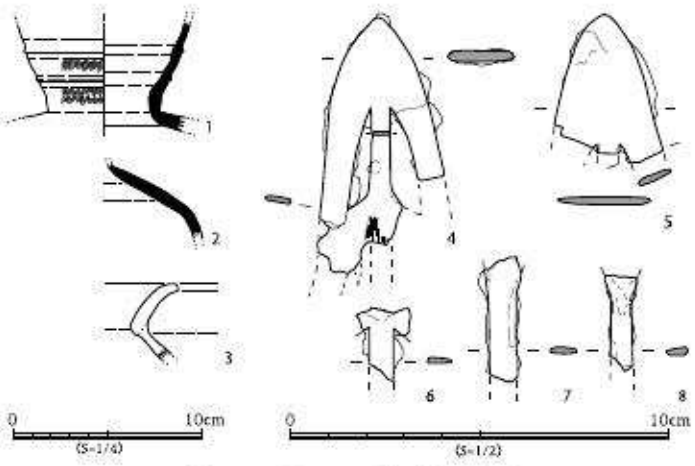
須恵器（１・２）　１は直口壺である。体部から外上方に延びる口頸部にシャープな突帯２条と突帯の間に波状文を施している。２は壺の胴部の一部と考えられる。

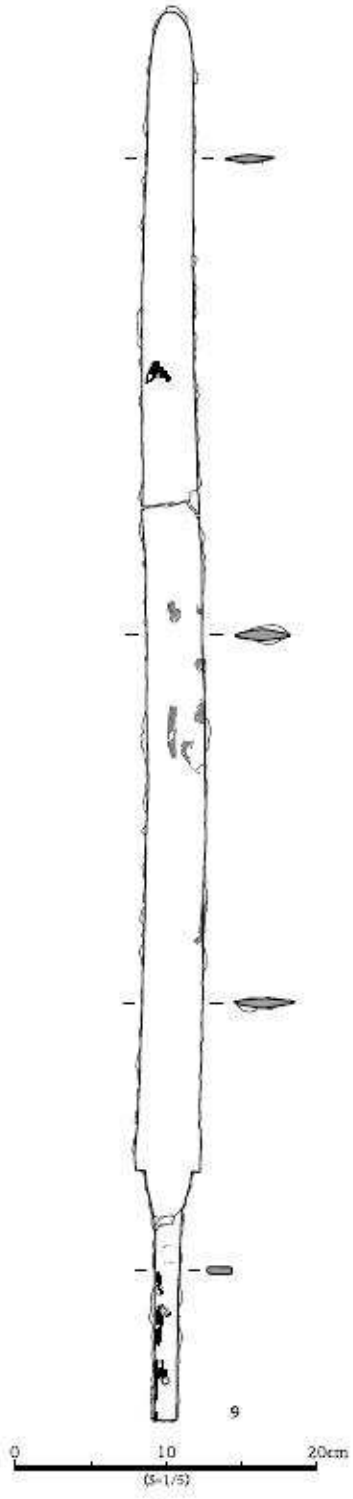


第５図　第２号古墳平面図（１：100）・墳丘土層断面図（１：80）



第６図　第２号古墳埋葬施設平面図・断面図（1：30）





第７図　第２号古墳出土遺物（1～3　1：4，4～8　1：2，9　1：5）

土師器（３）　３は甕の口縁部で，器表面の残存状態が悪く調整は不明である。

鉄鏃（４～８）　４は全長6.75cm，幅3.35cm（残存長），重さ７ｇで，鏃身に相対した三角形の透かし穴があり，逆刺部に浅い逆刺を有する短頸鏃である。欠損した部分を復元すると全長約8.5cmになる。５は全長3.9cm（残存長），幅2.85cm，重さ５ｇの短茎鏃で，６も短茎鏃の一部と考えられる。７・８は長頸鏃の茎部と考えられる。墓坑の上層より出土した。いずれも厚さが0.1～0.2cmと薄い。

鉄剣（９）　全長93.2cm，重さ707ｇである。刃部は長さ76.5cm，関近くの幅が4.3cm，厚さが0.5～0.7cmで，断面がレンズ状となっている。中央から切先にかけてやや曲がっている。茎部は長さ16.7cm，幅1.65cm，厚さ0.45cmで，茎尻の形態は直角となっている。茎部の長さに対し，刀身部の長さが約4.5倍の比率である。直径0.4cmの目釘穴が２ケ所あり，有機質の目釘が用いられたと考えられる。刃部には，僅かながら鞘材と考えられる木質が付着しており，茎尻や目釘穴の周辺にも柄の木質が残存している。

【時期】

周溝内から出土した須恵器直口壺の形態が，TK208型式に比定できることなどから５世紀後葉の時期と考えられる。

２．門田敦盛第３号古墳

調査区の北西に位置する円墳である。墳頂部の標高は238.3ｍで，調査前から墳丘と東半部を廻る周溝が確認されていた。

【遺構】（図版６～９）

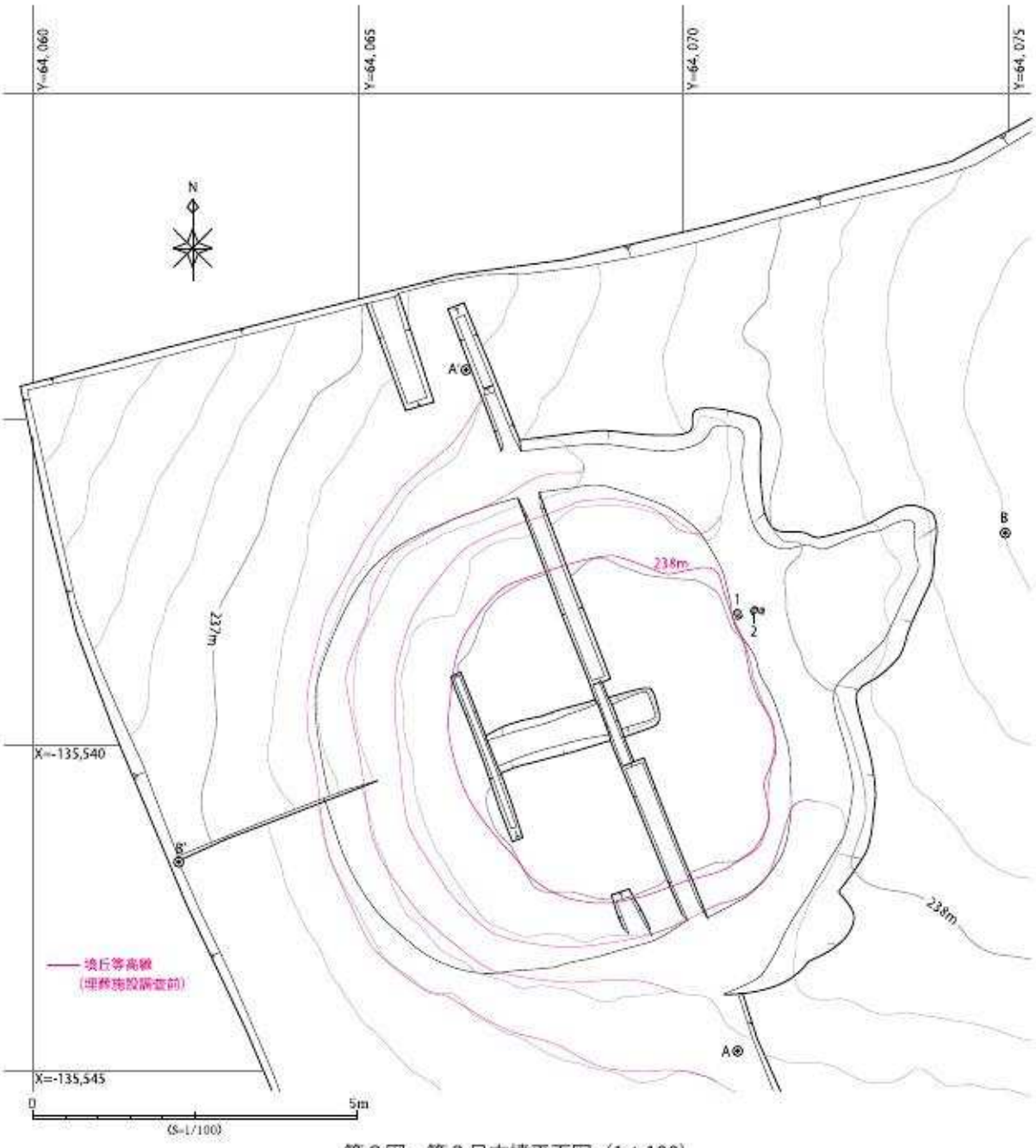
墳丘・周溝（第８・９図）

墳丘は，東から西へ下る斜面（傾斜角度８°）に築かれている。墳形は円墳で，墳丘の規模は直径７m，東側の周溝底からの墳丘の高さは70cmで，墳頂部では地山面から40cmである。墳丘西裾から墳丘の高さは1.1mあり，西側からは高く見える。墳丘は，旧表土と考えられる層（第９図７層）の上に厚さ10～20cmの盛土を行い，構築されている。盛土には，地山土の灰黄色や淡黄色の粘質土が用いられていることから，周溝の掘削土や古墳周辺を削平した土が盛られたと考えられる。墳頂部においては，旧表土から約30cmしか盛土が残存していなかったことから，後世に盛土が流失または削平されたと考えられる。

周溝は，丘陵の高所側（標高237.6m～238m付近）を馬蹄形に掘削しており，北側・南側ともに標高237.6mより低い箇所では認められなかった。溝の幅は0.8～1.3mで，周溝の山側は部分的に溝の肩が崩れている箇所が認められた。周溝のほぼ中央付近（標高237.7m）では須恵器坏身・高坏などの土器（未図化の土師器片含む）がまとまって出土しており，須恵器は口縁部を上側に向けた状態で原位置と考えられることから，埋葬の際に供献された土器の可能性がある。

埋葬施設(第10図)

墳頂部の地表面から約20cm下で,ほぼ東西方向(N-70°-E)に主軸をもつ埋葬施設を検出した。埋葬施設は木棺の痕跡のみで，墓坑の明瞭な掘方を確認することができなかった。木棺跡は，幅0.6m，残存長3.2m，深さ10cmである。木棺跡の西側は不明瞭で，盛土の流失とともに，消失したと考えられる。棺内の埋土と周囲の盛土はほぼ同じ土で，遺物が出土しなければ非常に判別し難い遺構であった。墳丘の土層断面観察から，旧表土(第9図7層)の上に木棺を直接置き，その上から直接盛土を盛り，墳丘を構築したと推測される。



第8図　第3号古墳平面図（1：100）

棺跡の周囲からは，鉄釘が出土していないことから，組合せ式の木棺が納められたと想定でき，素環頭大刀の切先が西側に向いている出土状態から，被葬者の頭部は東側に置かれていたと考えられる。

副葬品として，棺内からは素環頭大刀（標高238.06～238.10m）が環頭部を東側，切先を西側に向け，やや北側に傾いた状態で出土し，棺外からは刀子（標高238.18m）が切先を西側に向けた状態で出土した。

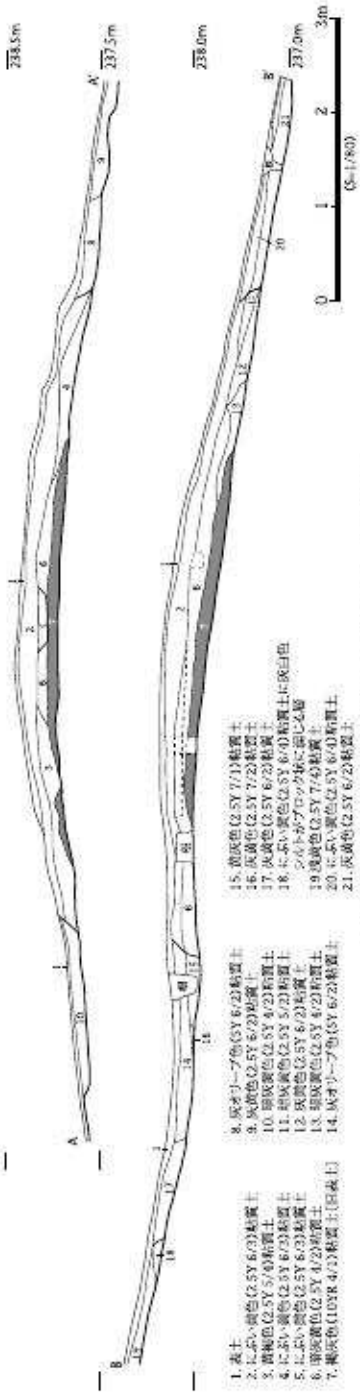
【遺物】(第11図　図版28)

周溝中央からは須恵器坏身(1)・高坏(2)，埋葬施設からは刀子(3)と素環頭大刀(4)が出土した。

須恵器（1・2）　1は坏身で，口縁部（たちあがり）径が10cm，最大径(受け部)12.8cm，器高が4.9cmである。平坦ぎみの底部から外上方へ延び，外反した受け部の端部を丸くおさめる。受け部からやや内傾するように口縁が立ち上がり，端部は内側に面を有する。調整は底部から器高の3分1ほど回転ヘラケズリ，残る箇所は回転ロクロナデが施されている。2は有蓋高坏で，口縁部(たちあがり・かえり)径が10.6cm，最大径(受け部)12.6cm，器高10.1cm(坏部器高5.5cm)，脚部底径9.8cmである。坏部は1よりも坏部の器高が高く，やや体部が丸みを帯びており，底部に脚が付いている。脚部の端部は，強いナデにより突帯が形成されおり，器表面はカキ目を施した後に，ヘラ状工具で台形の透かしが三方に空けられている。

刀子(図3)　全長7.4cmの刀子である。刃部は長さ5.5cm，幅1.5cm，厚さ0.25cmである。茎部は長さ1.9cm，幅0.9cm，厚さ0.3cmである。茎部の関近くには縦方向，下部には横方向と向きの異なる木質がある。縦方向の木質は，柄の材質と考えられ，鉄材に密着している下部の木質は柄を刀子に固定するため茎に巻かれた樹皮のような材質と考えられる。

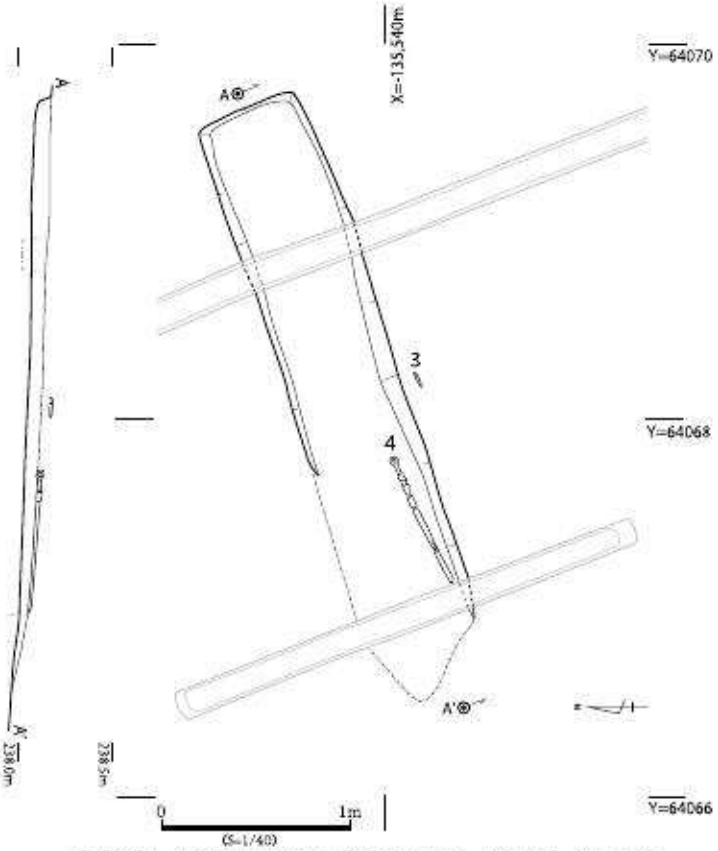
素環頭大刀（4）　素環頭大刀は，把尻に鉄製の円環が付いている全長70.3cm，重さ405 gの大刀で，長さ62.2cmの鉄刀に，長さ10.8cmの柄頭を組み合わせたものである。刀身部は，刀身長が54.1cm，身元幅2.65cm，切先幅2.05cm，背幅0.5～0.6cm，茎長8cm，茎尻幅1.45cmである。環頭部は，全長10.8cm，幅5.4



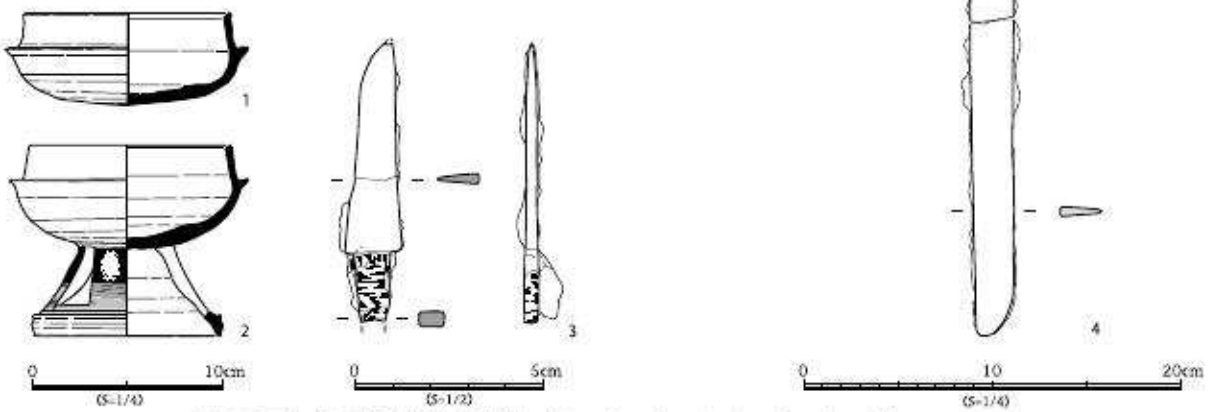
第9図　第3号古墳墳丘土層断面図（1：80）

cm，基部長7.9cm，基部幅1.45cmである。

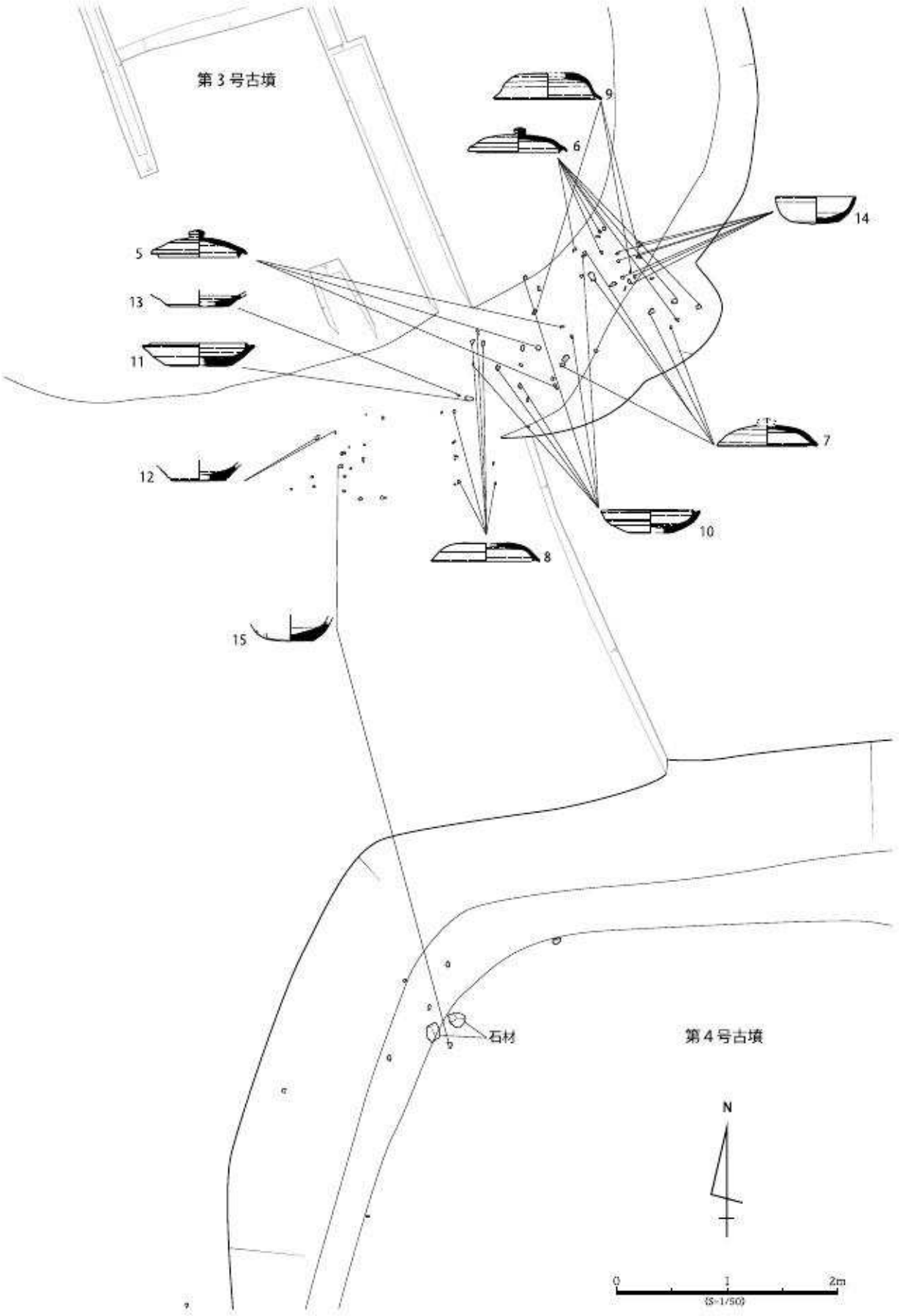
環頭部は，鉄製の円環とそれを挟み込む基部の２つの部材で形成されている。接合部分を観察すると，基部の小口中央を半分に割り，その中に厚さ約１cmの鉄棒を円環状にしたものを挟み込み，鍛接し固定しているように見える[1]。また，環頭部と刀身部も鍛接により接合されている。



第10図　第３号古墳埋葬施設平面図・断面図（1：40）



第11図　第３号古墳出土遺物（1・2・4　1：4，3　1：2）



第 12 図　第３号古墳墳丘南側遺物出土状況（１：50）

刀身部と環頭部との一体感を出すために，環頭部の基部の下端を薄くしており，接合箇所の厚みを抑えている。鍛接後，両部材の接合箇所の中央に径0.45cmの目釘穴が穿たれている。

刀の関周辺には，鞘の筒金具が残存している。筒金具は長さ４cm，厚さ0.1cmの鉄板を筒状に曲げたもので，内部には鞘材の木質が残存している。表面に文様等の装飾は認められない。

【時期】

周溝北側から出土した須恵器坏(１)・有蓋高坏(２)が第３号古墳に伴う遺物である。器形からTK47型式並行期に相当する，５世紀末から６世紀初頭の時期と考えられる。

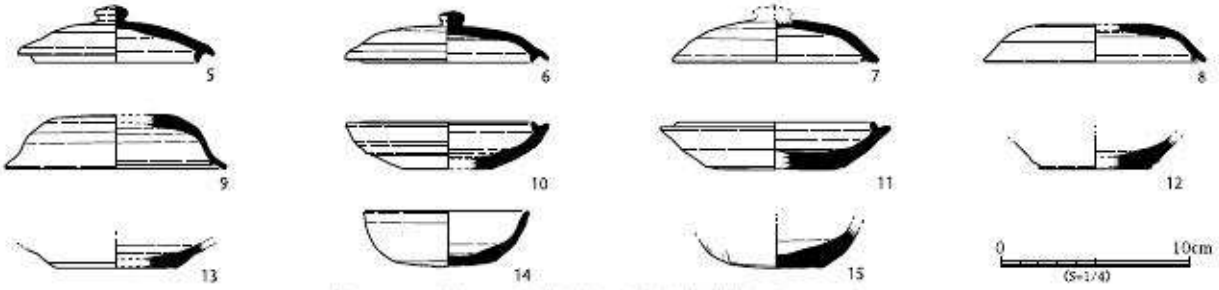
３．門田敦盛第３号古墳墳丘南側出土遺物(第12図・図版９)

第３号古墳の墳丘南側から，第４号古墳の北西側の周溝内にかけて，須恵器の破片を中心に89点以上の土器片が出土した。第３号古墳の墳丘南側から出土した遺物は，地山直上から10cm以内の暗灰黄色粘質土（第９図10層）中から出土し，第４号古墳の周溝から出土した遺物は溝底より10～20cm上の層から出土している。

須恵器(13･15)の破片が，第３号古墳墳丘南側から第４号古墳周溝内に分散している状況から，第４号墳の周溝が完全に埋没する前に，第３号古墳の南側で土器が破砕されたと考えられる。出土した遺物は，須恵器の坏身・坏蓋・壺の破片で，７世紀代の遺物であり，第３号古墳の周溝内より出土した須恵器（第11図１・２）とは時期が大きく異なる。第４号古墳周溝内では土器片と共に15cm大の石材が出土しており，この石材が第４号古墳に関係するものと考えると，第４号古墳の追葬時の片づけ，あるいは盗掘によって持ち出された土器が破砕されたとも考えられる。

【遺物】(第13図　図版29)

須恵器坏蓋(５～９)　５・６は頂部は平坦で，宝珠形のつまみが付き，内面には下方に向くかえりが付く。５はかえり径8.6cm，受け部(最大)径10.4cm，器高3cm，６はかえり径９cm，受け部(最大)径10.8cm，器高2.7cmである。７～８は内面に短く尖る小さなかえりが付き，７にはつまみの痕跡が認められる。７はかえり径9.1cm，受け部(最大)径10.9cm，残存高2.3cm，８はかえり径10.4cm，受け部（最大）径12.2cm，器高2.5cmである。９は体部が屈曲し，内面に小さなかえりが付く。頂部の調整は，５～７は回転ヘラケズリ，８・９はヘラ切りが施されている。つまみの周りと口縁部から内面にかけては，回転ロクロナデが施されている。



第13図　第３号古墳墳丘南側出土遺物（１：４）

須恵器坏身（10 ～ 14） 10・11は，平坦な底部から外上方に体部が延び，受け部に内上方に短く延びるかえりが付く。10はかえり径9.2㎝，受け部（最大）径10.8㎝，器高2.5cm，11は，かえり径10.4㎝，受け部（最大）径12.2㎝，器高2.5cmである。底部の調整は，いずれもヘラ切りが施されており，10はさらに一定方向のナデが施されている。体部には回転ヘラケズリの後に回転ロクロナデが施されている。14は，平坦な底部からやや外向きに体部が立ち上がり，端部は丸く納められている。口径8.7㎝，器高3cmである。底部はヘラ切りの後にナデが施され，体部は回転ロクロナデが施されている。

須恵器壺（15） 15は，底部はヘラ切りの後にナデを施し，体部の底部近くは体部から底部に向けて静止ヘラケズリ，残る体部にはナデが施されている。

【時期】

須恵器坏蓋（5 ～ 7）は，坏Gに分類され，第4号墳石室内から出土した坏蓋とほぼ同じ大きさであることからも飛鳥Ⅱ（640 ～ 650年代）に並行する時期が考えられる。坏身14（坏G）と坏身10・11（坏H）も飛鳥Ⅱに並行する時期と考えられる。坏蓋8 ・ 9は頂部が欠損し，つまみ部の有無が不明であるが，口径が坏Gより大きいため，少し新しい時期と考えられる。

4．門田敦盛第4号古墳

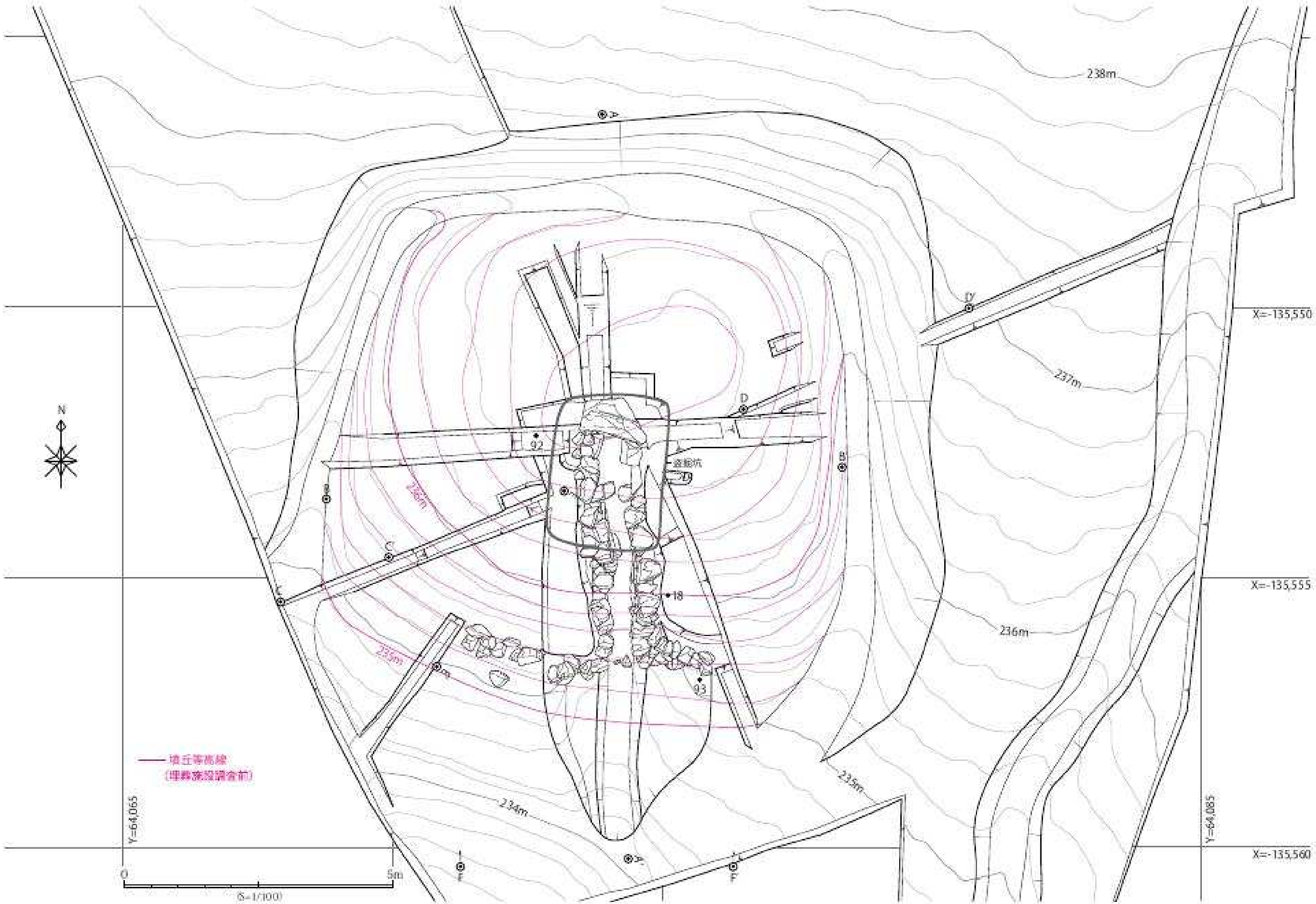
調査区の南西に位置する方墳である。標高236.9mに位置しており，調査前から周溝と墳丘が確認されていた。墳頂部の表土掘削後，南北3m，東西2mの隅丸方形の掘方を検出し，埋土を50 ～ 60㎝掘り下げたところで，石室の天井石を検出した。側壁の石材が抜かれ，天井石が大きく傾いている点，石室内から崩れた側壁石材が出土しなかったことから，この穴は盗掘坑であると判断した。天井石が傾き，不安定な状態であったが，木の根が多くの石材を抱え込んでいたため，崩壊することなく残ったと考えられる。

【遺構】（巻頭図版2 ・図版10 ～ 25）

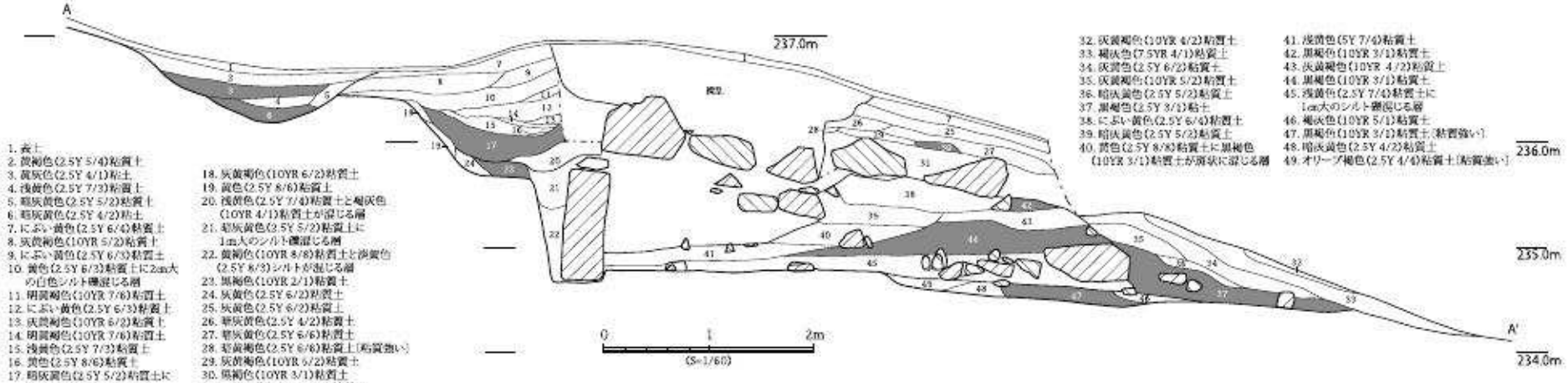
墳丘・周溝・外護列石（第14 ～ 19図）

墳丘は，北から南へ下る斜面（傾斜角度13°）に築かれており，やや東側が高く，西側に向かって緩やかに下っている。墳頂部は緩やかな平坦面を呈している。墳丘の規模は，墳丘裾で東西9.5m，南北9.5mで，墳丘の南西側がやや西側に開いているが，墳形はほぼ正方形の方墳を呈している。高さは，北側の周溝底からは75㎝，東側の周溝底からは80㎝，西側の周溝底からは1.3m，石室開口部からは2.4mである。

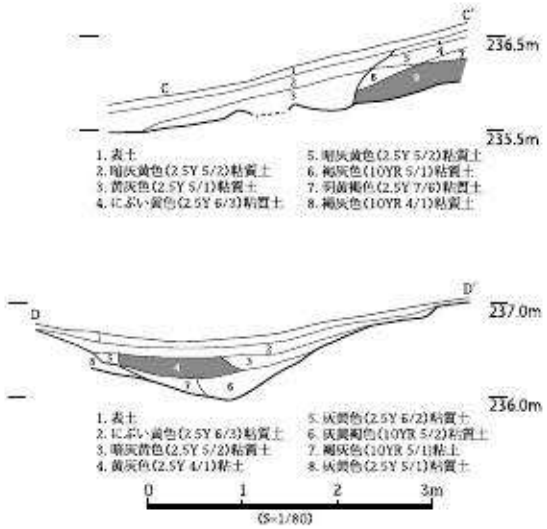
盛土は，石室の側壁構築後から天井石設置，天井石設置以降と段階を経て盛られており，盛土には地山土の灰黄色や淡黄色系の粘質土と黒味が強い褐灰色系の粘質土が4 ～ 10cm単位で版築状に密に積まれている。石室構築時の裏込め（第15図第20 ～ 23層，第19図44 ～ 68層）が盛られた後は，墳丘の外側（第19図第18 ～ 21層（墳丘西側），第33 ～ 35・40・42層（墳丘東側））



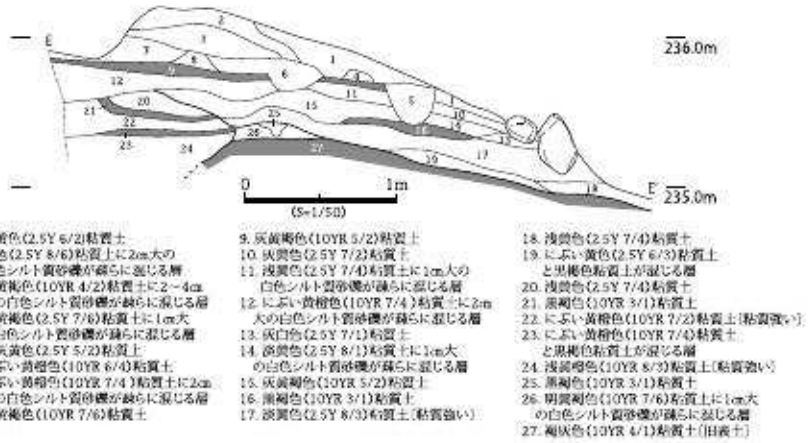
第 14 図　第 4 号古墳平面図（1：100）



第15図　第４号古墳墳丘主軸土層断面図（1：60）



第16図　第４号古墳周溝土層断面図（1：80）

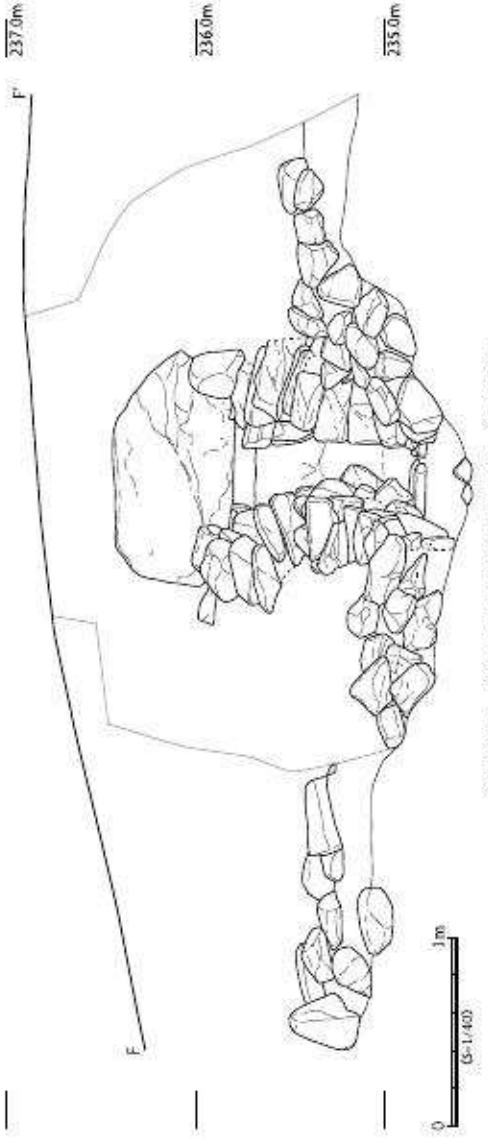


第17図　第４号古墳外護列石土層断面図（1：50）

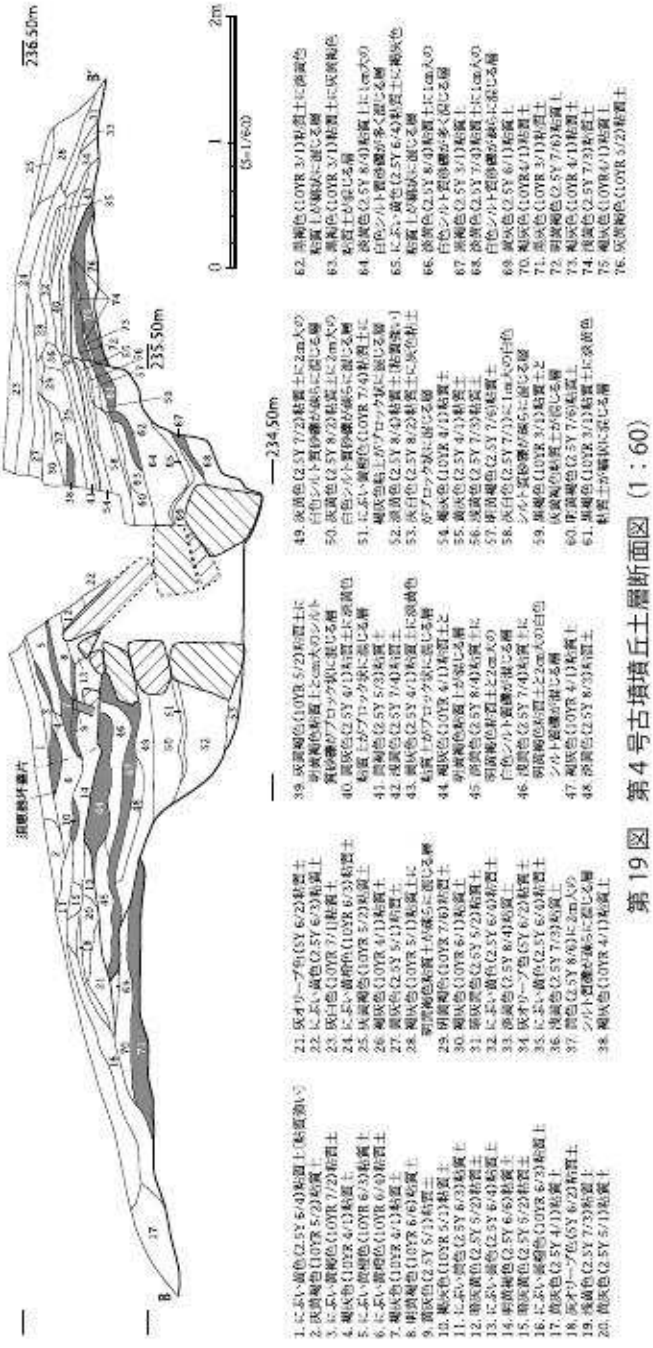
から積み始め，徐々に天井石を覆うように盛土を積んでいる。第４層からは，須恵器坏蓋の破片(第28図92)が出土した。石室東側の裏込めは，石室の側壁が動いたことで，西側へ動いている。

周溝は，墳丘の周囲を北から東西にかけて「コ」の字状に削平した溝で，幅が0.8 ～ 1.6m，深さが0.6 ～ 0.7mである。墳丘の中軸よりやや東側に溝底の最高地点があり，そこから東西へ向かうにつれて溝底が下っている。周溝の北西部からは，須恵器片と石材が出土(第12図)したが，東側からは出土しなかった。遺物は，溝底から10 ～ 20cm上の黄灰色粘質土層から出土しており，周溝が埋没し始めた頃に近い時期と考えられる。

墳丘の南側には，石室の側壁から連なるように外護列石が積まれている。約20 ～ 40cmの流



第18図　第４号古墳石室立面図（1：40）



第19図　第４号古墳墳丘土層断面図（1：60）

紋岩を盛土の上に直接置き，部分的に石材を重ね，２段の石垣のように見せている。列石は，石室側壁の基底石（標高234.7m）から墳丘の標高235.3mの位置まで外側に開くように築かれており，西側の長さが2.7m，東側の長さが1.4mである。

埋葬施設(石室)

石室は，ほぼ南に開口する無袖式の横穴式石室である。石室の主軸は西に５°振れている。石室の規模は，長さが東側壁5.14m，西側壁5.08m，主軸が5.08mである。幅は，奥壁部分が最も広く92cm，棺台部分が78cm，玄室と羨道の境(玄門)が50cm，羨門が60cmである。石室は，無袖式の横穴式石室であるが，側壁の石の積み方から，奥壁から東側壁の３石目，西側壁の４石目の基底石までが玄室で，それ以南が羨道と考えられる。玄室の長さは2.72m(主軸長)，羨道の長さは2.36m(主軸長)である。床面の平面形態は，奥壁側が広く，開口部側に向かって徐々に狭くなっているが，玄室と羨道の境付近の基底石が石室内側へと動いているため，築造時より狭くなっている。羨道部分は60 ～ 70cmの幅があったと考えられる。奥壁及び側壁上には天井石が５石構架した状態で残存していたが，奥壁側の天井石のみが構築当初の位置を保っていた。石室の高さは，奥壁側で1.1m，一番南側の天井石の部分で0.8mであった。

石室に用いられた石材は流紋岩で，調査区の１km南に広がる高所の丘陵に広く分布している石である。調査区の位置する丘陵や近隣には岩脈が露出しているところは見られないため，この場所まで石材を取りにいくか，丘陵の麓まで土石流で流れてきた石材を用いたと考えられる。

石室内には，盗掘及び天井石の移動によって流入した土（第15図38 ～ 41層）・追葬に伴う閉塞土(第15図42 ～ 44層)，追葬に伴う整地土(第15図45層)が堆積していた。

(１)墓坑(第20図)

墓坑（石室掘方）は南北9m，東西3.2mあり，前庭部まで広がっている。墳丘の中軸よりやや東側に位置している。墓坑の北側（標高236.4m）から石室の底部分（標高234.7m）までは，深さが1.7mある。墓坑の北側は傾斜が急なためか標高235.7m付近で平坦面があり，西側にも一部平坦面が認められる。墓坑東側の掘り方が急であるのに対し，西側は比較的傾斜が緩やかで，部分的に平坦面も認められることから，石室構築時は石室の前庭部に加え，墓坑の西側も構築作業の足場になっていたと考えられる。

石室の側壁構築の段階(目地)に合わせて，墓坑内に裏込めの土を入れており，天井石を構架するまで，石積みと裏込めの補填が並行して進められている。

石室の基底石を据えるための据え付け穴は，極めて部分的で，壁面の角度を調整するために地山を掘り下げたと考えられ，石材の自重で形がついたと思われる痕跡が多く認められた。

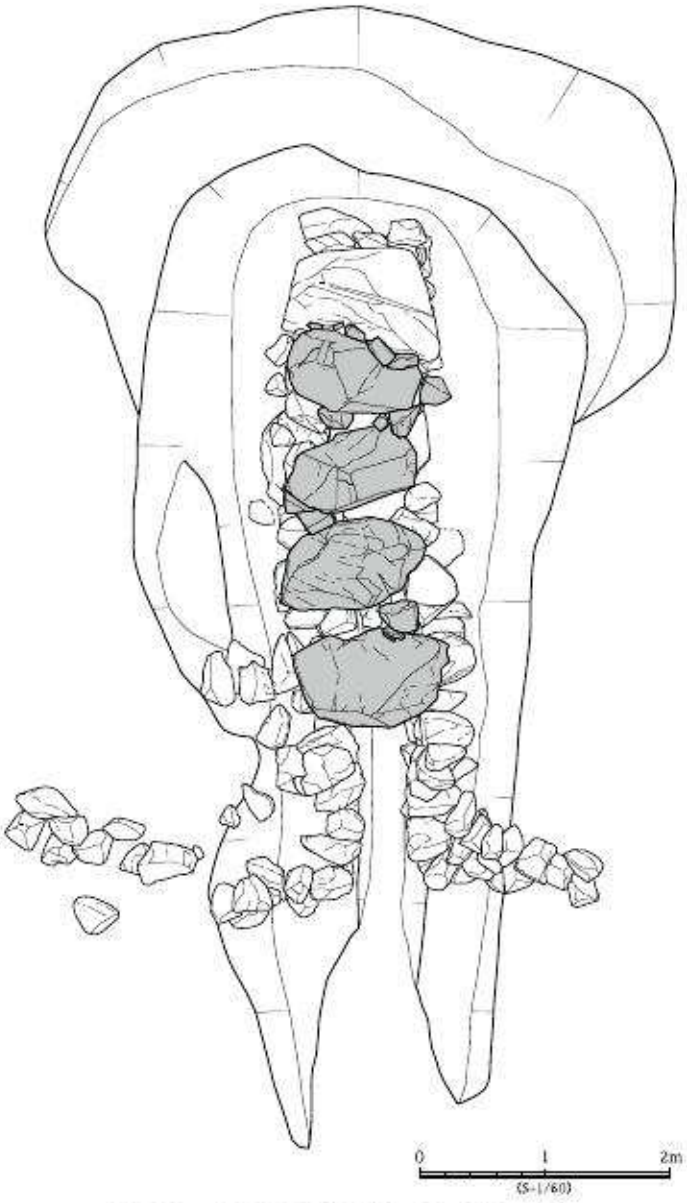
西側壁の裏込めには，２段に積まれた東西方向に並ぶ幅85cmの石列が認められた。石列の上段には，長さ40cm，幅25cmの石材を小口を南側に向けて３石積み，下段には長さ50cmの石材を幅の広い面を南側に向けて置いている。石室の西側壁の石材とのかみ合わせは認められず，側

壁の構築後に積まれたと考えられる。

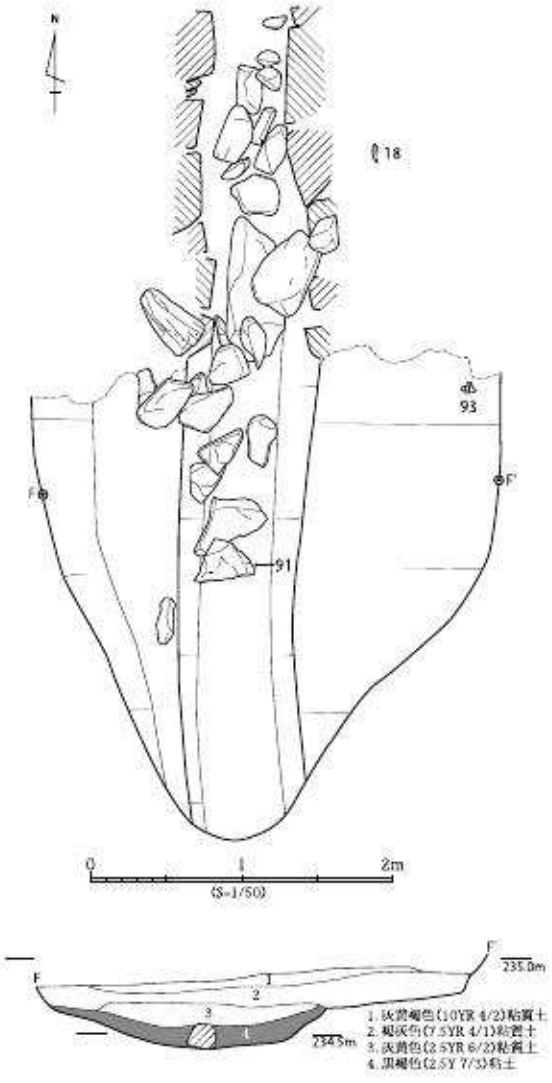
また，東側壁の裏込めからは，須恵器台付長頸壺（第26図18）の台部分の破片が羨道の基底石より２番目の高さの位置（標高235.16m）から出土している。この破片は石室内に副葬された台付長頸壺と同一個体であることから，この土器は東側壁の裏込めが埋まっていない段階で，台部分が打ち欠かれ，台部分が欠けた状態で副葬品として石室に納められたと考えられる。

（２）天井石（第20図）

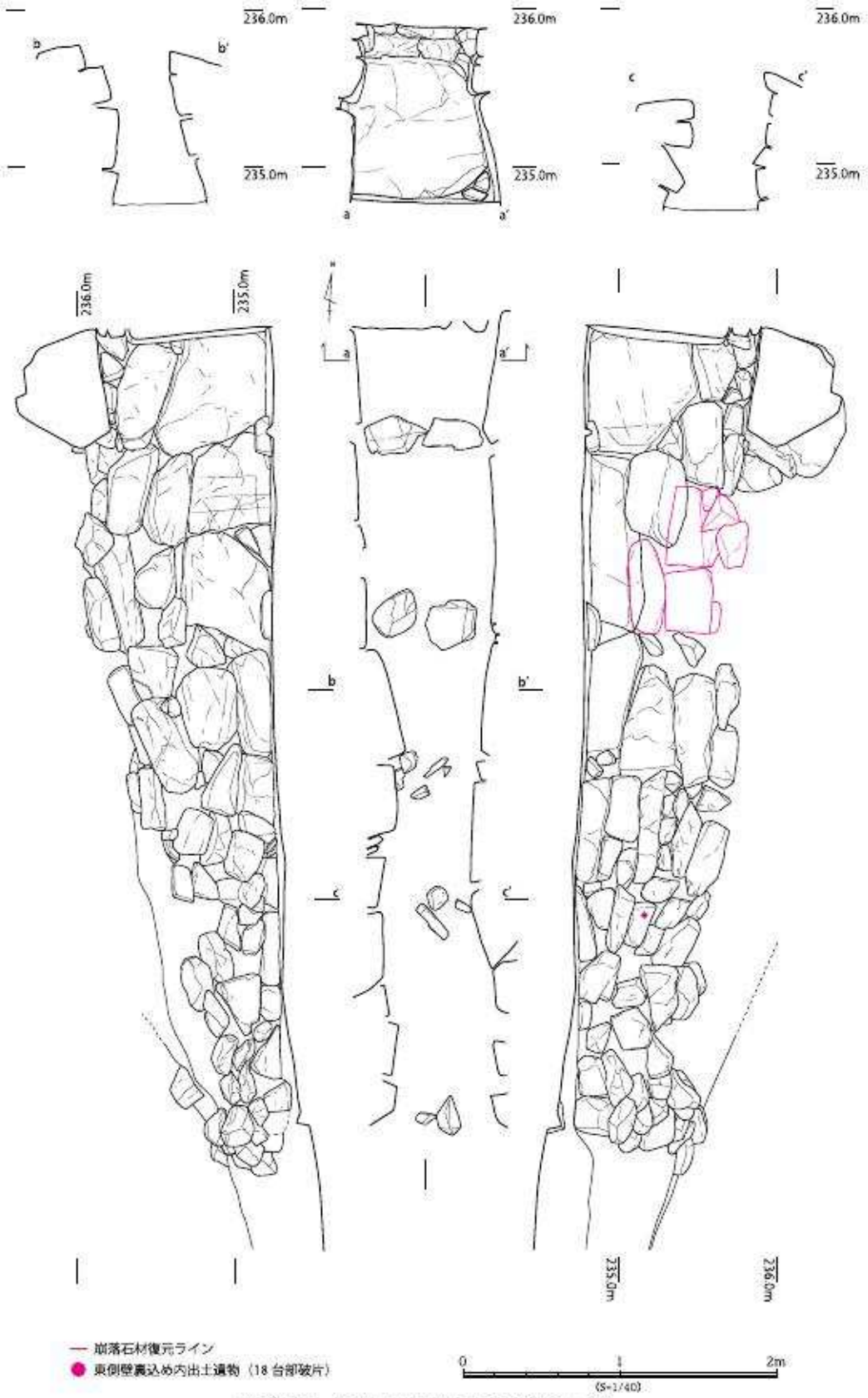
盗掘坑の掘削により検出した天井石は，奥壁側から開口部に向かって５枚（玄室に４枚，羨道に１枚）連続して構架した状態で検出した。天井石は，幅が約1.2m，長さが0.6 ～ 0.8m，厚さ



第 20 図　第４号古墳石室平面図（1：60）



第 21 図　第４号古墳前庭部及び閉塞石平面図・土層断面図（1：50）



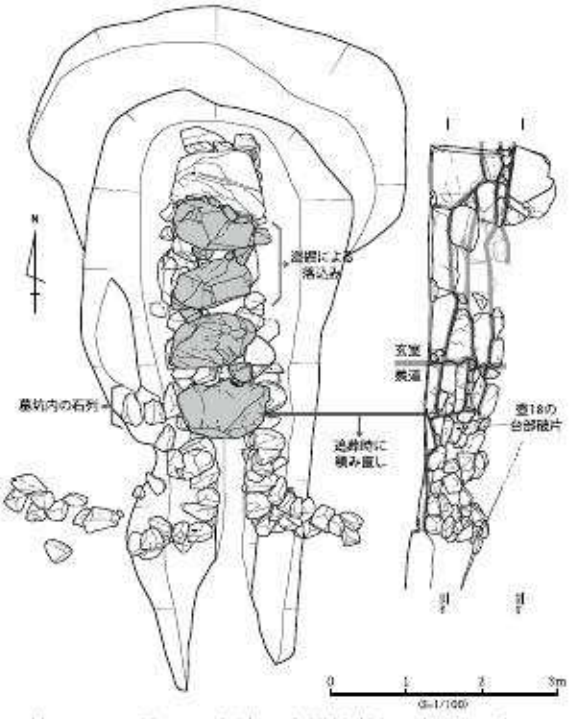
第 22 図　第 4 号古墳石室展開図（1：40）

が0.35 ～ 0.55cmで，奥壁側の石材が最も大きな石材が用いられていた。奥壁側から２番目・３番目の石材は，東側へ大きく傾き（傾斜角度45°）落ち込んだ状態であった（図19）。それに続く４・５番目の石材は，共に側壁上に水平に構架されていたが，天井石の間に15 ～ 20㎝の隙間があり，この隙間を埋めるための石材や粘土などが確認できなかったため，羨道上に位置する天井石は石室構築後に動かされているものと判断した。奥壁側の天井石は，２番目の天井石や奥壁との間に隙間を埋めるための小さな石材が用いられていることから，原位置を保っているものと考えられ，石室図化の段階まで残した。天井石の高さは，石室主軸上で奥壁側が最も高く（標高235.85m），羨道に向かって徐々に低く（標高235.30m）なっている。羨道側が低くなった要因に羨道の西側壁の崩れがあり，東側壁の高さを考慮すると，羨道での天井石の高さは標高235.6m前後となり，石室構築時の天井の傾斜は緩やかであったと考えられる。

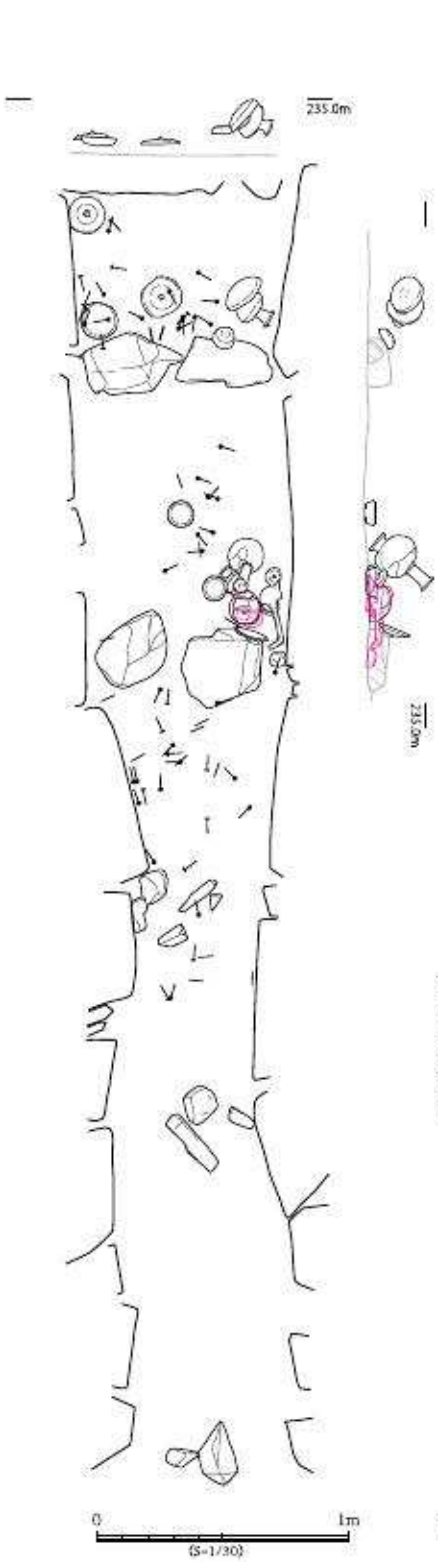
（３）側壁（第22図）

東側壁は，基底石として８個の石材を配置している。玄室には幅が約80 ～ 110cm，高さが約30 ～ 70㎝と大きな石材を用い，羨道には幅約25 ～ 65㎝，高さが約10 ～ 20㎝と小さい石材を用いている。石材は奥壁付近を除くと，横長の面を石室内に向ける平積みで積まれている。玄室中央部分は，盗掘により側壁が石室内に崩れていた箇所であるが，崩れた石材を原位置に復元すると，奥壁側の最初の基底石の高さに合わせて，石積みの目地が通り，その次の段が奥壁の基底石の高さに合わせるように目地が通っている。石積みは奥壁部分のみが３段，それ以外が４段で，傾斜は76 ～ 78°である。羨道は，玄室に近い部分では，平積みと小口積みで整然と積まれているが，閉塞石が置かれていた付近（奥壁から約3.5m）から南側が乱雑になり，目地がきれいに通らない。追葬の際にこの部分を積み直した可能性が高い。壁面の傾斜は93°で，ほぼ垂直に近い。

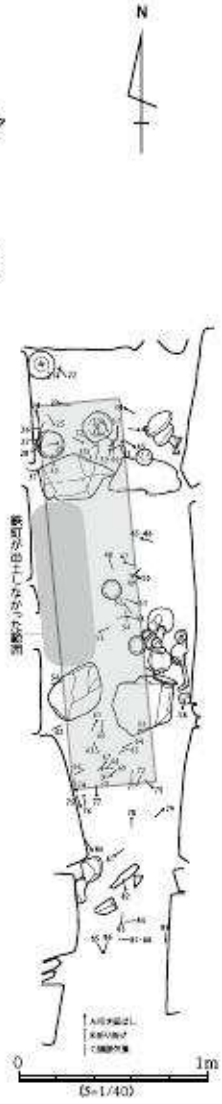
西側壁は，基底石として10個の石材を配置している。玄室には幅が約60 ～ 70㎝，高さが約50 ～ 70㎝と大きな石材を用い，羨道には幅約20 ～ 50cm，高さ約15 ～ 25cmの小さな石材を用いている。石材は基本的に横長の面を石室内に向けた広口積みで，玄室は基底石の２番目の石材の高さに最初の目地が通り，次が奥壁の基底石の高さに合わせた目地が通っており，東側壁と同様である。石積みは奥壁部分のみが３段，それ以外が４段で，傾斜は84°である。羨道は，基底石より上段の石材が石室内に崩れ，迫り出した状況（第18図）であったため石積みの目地を確認するのが困難であった。



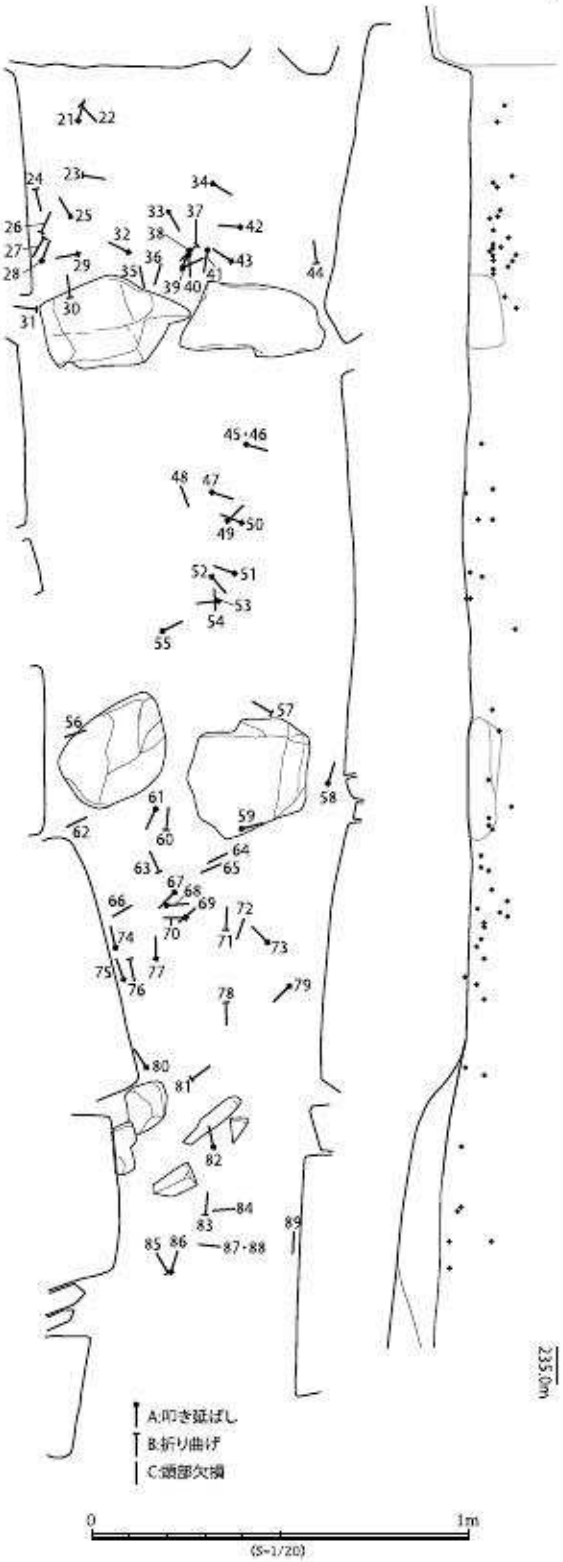
第23図　第４号古墳石室構築状況（1：100）



第 24 図　第 4 号古墳石室内
遺物出土状況（1：30）



第 25 図　第 4 号古墳
石室内木棺推定
位置図（1：40）



第 26 図　第 4 号古墳石室内鉄釘出土状況
（1：20）

（4）奥壁（第22図）

奥壁は，基底石に幅100㎝，高さ90㎝の石材を広口積みにし，その上に2段，30～40㎝の横長の石材を平積みにしている。奥壁の傾斜は84°で，西側壁（玄室部分）と同じ傾斜となっている。また，側壁は奥壁の基底石の高さに合うように積まれているため，石室構築時の高さの基準になっていたと考えられる。奥壁部分の基底石の配置をみると，組合せから東側壁，奥壁，西側壁の順に基底石が配置されている。

（5）床面（第22図）

初葬時の床面は，整地した地山面上（玄室：標高234.77m）で，奥壁から0.66m，1.82mの位置に棺台となる30～40㎝の平らな石材を2個並べて置いている。北側・南側の棺台上面は，ほぼ同じ高さ（標高234.86m）に揃えられており，2個の石材を並べることにより，北側の幅が74㎝，南側の幅が68㎝となっている。北側の棺台は，石室幅ほぼ一杯になるように置かれているのに対して，南側の棺台には東側の側壁との間に10㎝ほど空間がある。

羨道の床面は，玄門から下がり始め，羨門（標高234.54m）に向って緩やかに下がっている。床面には10～30㎝大の礫の集まりが3ヶ所（第22図断面bとcの間・断面c・羨門）認められた。閉塞石の一部とも考えられるが，厚さが1㎝ほどの扁平な石材も含まれていたため，異なる用途で置かれたと考えられる。

追葬時の床面は，初葬時の棺台と閉塞石が埋められ整地された層（第15図45層）の上面となる。

（6）閉塞石（第21図）

閉塞石はほぼ羨道全域に広がっており，検出時は長さ90㎝・幅40㎝・厚さ35㎝の石材が羨門中央に，その北側に20～40㎝大の石材が10数個ある状態であった。いずれの石材も流紋岩である。これらの閉塞石は，検出した面から初葬時のものと考えられる。追葬時，羨門中央の石材は，その大きさのためか移動されることなく，整地土とともに埋められたと考えられる。

（7）前庭部（第21図）

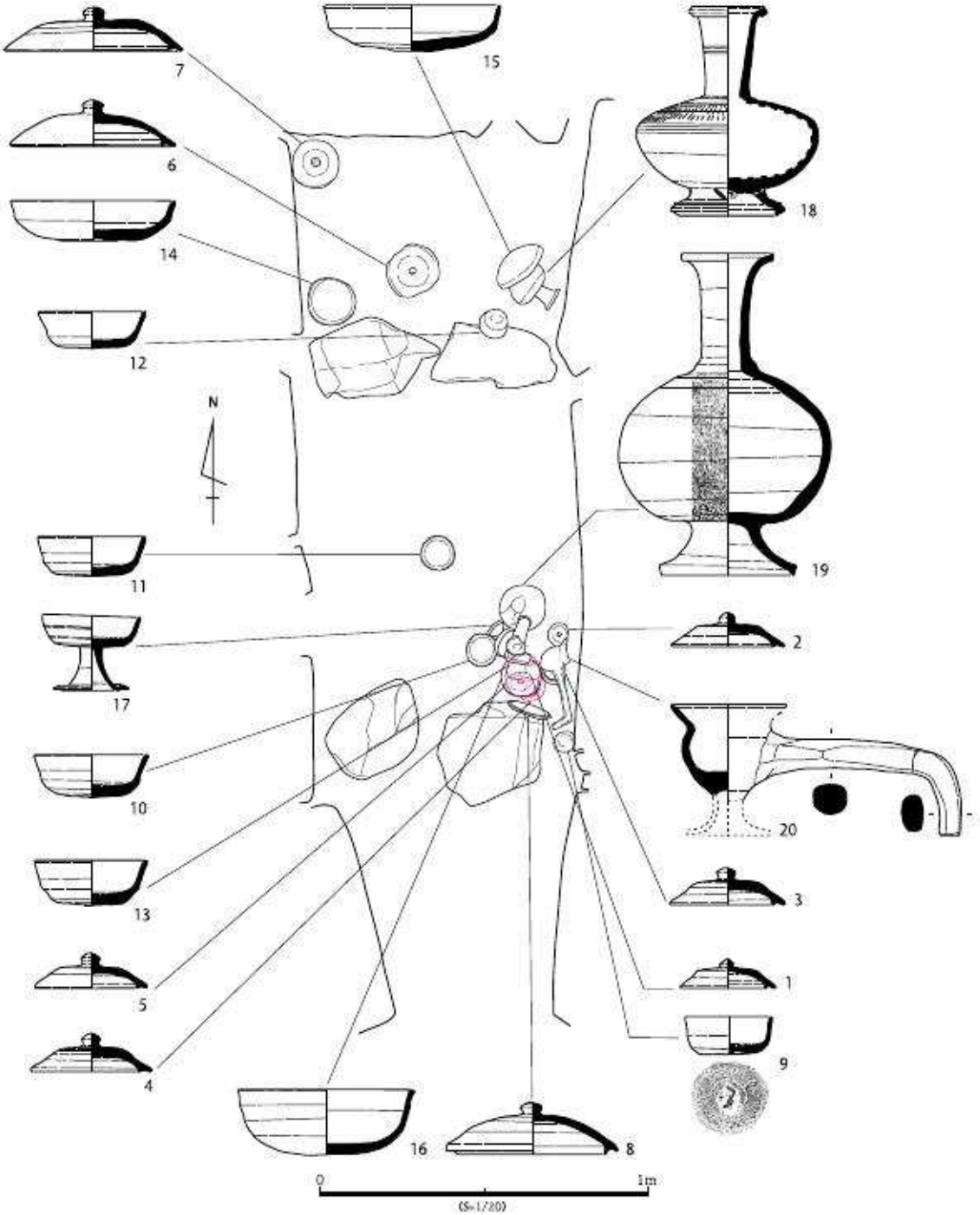
前庭部は東西3.1m，南北3.1mで平面形態が舌状になっている。中央には羨道から続く幅80㎝の墓道がある。前庭部には，石室内より掻き出されたと考えられる閉塞石や，崩落した外護列石の石材が10個出土した。掻き出された閉塞石に混じり，鉄釘が1点出土している。また，東側の外護列石東端（標高235.088m）から須恵器坏蓋（第30図93）が出土した。

石室内遺物出土状況（第24～27図）

石室内からは，副葬品として納められた土器と木棺に使われた鉄釘が出土した。土器は須恵器で，玄室の奥壁周辺と南側の棺台近くの東側壁に沿った位置から出土している。鉄釘は，玄室から羨道まで広範囲で出土した。

土器は，東側壁付近で床面から出土したもの（第27・28図1～5・8～11・13・16・17・19・20）と，奥壁側で床面より3～4cm上層から出土したもの（第27・28図6・7・12・14・15・18）がある。

奥壁側の土器は，坏蓋6・7，坏身14は正位置にあり，台付長頸壺18と坏身15は口縁を東側壁側に向け横位の状態であった。台付長頸壺18の台部分は打ち欠かれた状態で，その部分を



第27図　第4号古墳石室内土器出土状況（1：20）

覆うように坏身15が立位で位置していた。坏身12は北側棺台の東側の石の上に，口縁が棺台石に接した状態で出土した。

側壁側の土器は，坏身11が他の土器と少し離れた玄室中央で正位置にあり，他の土器は側壁側に密集している。棺台側は，北から台付長頸壺19・高坏17・坏身10・坏身16・坏蓋８があり，うつ伏せの坏身16の下に坏身13・坏蓋１・坏蓋５・坏蓋４が位置していた。また坏蓋８は，坏身16と南側棺台の間にあり，つまみ側を棺台に向け立位の状態であった。側壁側には北から坏蓋２・坏蓋３，その上に柄香炉形土製品20・坏身９がある。坏蓋３・坏蓋４はつまみ部を，坏身９は口縁部を床面に向けた状態であった。柄香炉形土製品20は，口縁部を側壁側に向け横位の状態にあり，口縁が側壁に接し部分的に欠損していた。欠損していた台座部の断面が坏身13や坏蓋３とほぼ接している状況を確認したため，石室内に納められる以前に脚部は欠損していたといえる。

側壁周辺から出土した遺物の大半は側壁に隠れ，真上からすべて見ることができない位置にあったことから，盗掘の影響を受けず，埋葬時の位置を保っていると考えられる。坏身11は石室主軸上，南北の棺台石のほぼ中央にあり，木棺の真下に位置していることから，原位置から動いている可能性が高い。

鉄釘は，玄室の奥壁西側から羨道（玄門から南に１石目）までの範囲に分布している。特に北側棺台石の約30cm北付近，南北棺台石の間で石室主軸のやや東側付近，南側棺台石の約30cm南付近に集中しており，その付近が木棺の北小口・東側の側板・南小口の位置に相当すると思われる。多くの鉄釘が同じような箇所に集中して位置するのは，石室の幅の狭さから，木棺を安置する位置が制約されているためで，初葬時も追葬時もほぼ同じ位置に木棺が安置されたと考えられる。

鉄釘は標高234.73～234.90mの高さで出土しており，棺台の上面と同じもしくは高い位置で出土したものが16点で，石室床面上（標高234.77m付近）より高い位置で出土したものが44点ある。さらに羨道側へと動いているものも認められる。

また，木棺西側の側板が位置していたと想定される付近では，鉄釘が出土しておらず，盗掘の影響により，他の位置へ動いている可能性が高いため，明確に初葬と追葬時の木棺を比定するのは困難である。棺台上面より高い位置で出土した鉄釘を元に，追葬で用いられた木棺を復元すると，西側壁に寄せた位置で幅約45cm，長さ約204cmの木棺となる（第25図）。

【遺物】（第28～30図　図版30～33）

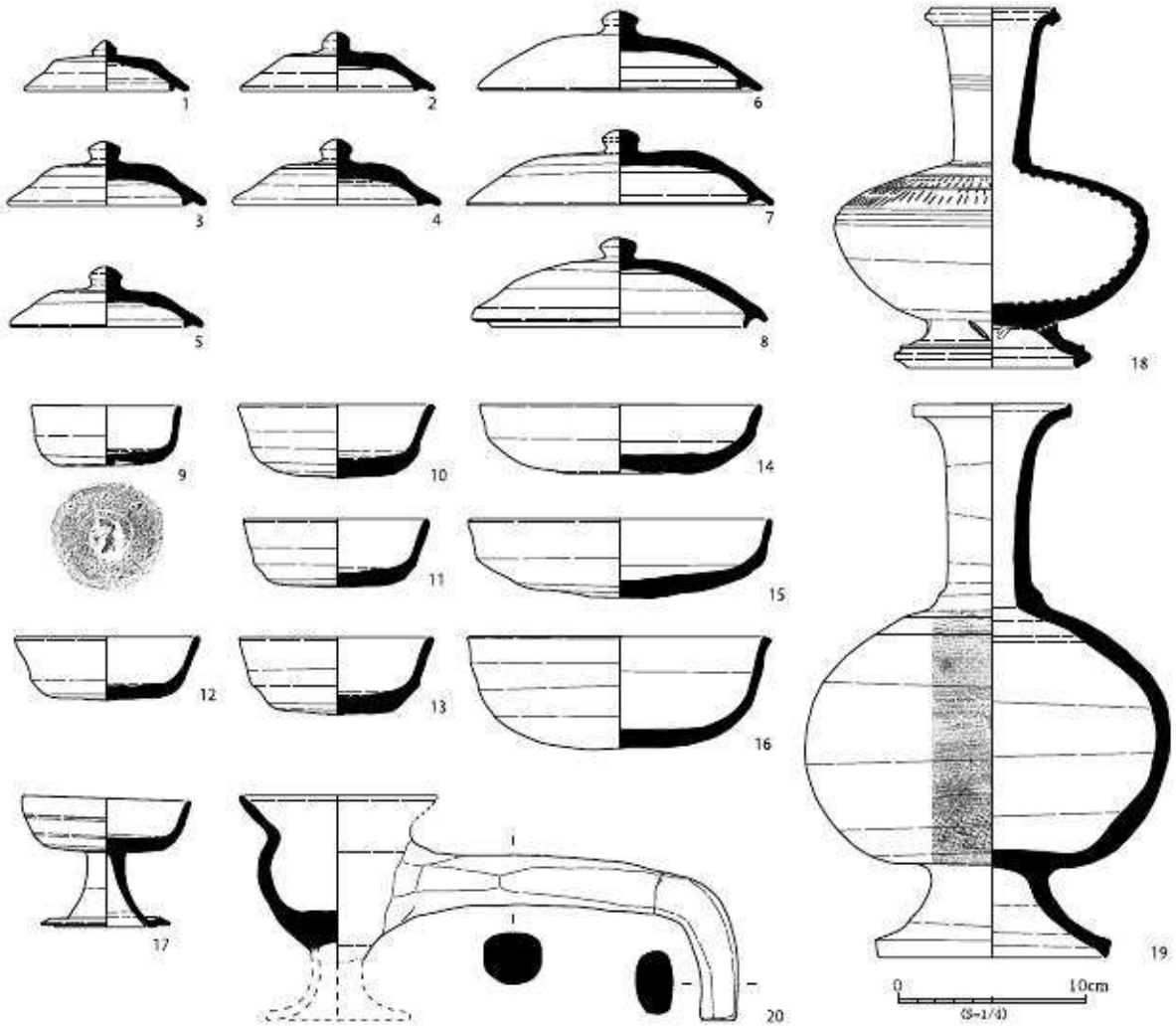
須恵器坏蓋（１～８・92・93）　１～７は頂部が平坦で，宝珠形のつまみが付き，内面にはやや内側へ向く小さなかえりが付く。１はかえり径7.0cm，受け部（最大）径8.8cm，器高2.7cm，２はかえり径8.4cm，受け部（最大）径10.4cm，器高3.2cmである。３はかえり径8.2cm，受け部（最大）径10.6cm，器高3.4cm，４はかえり径8.8cm，受け部（最大）径11.0cm，器高3.55cmである。５はかえり径8.2cm，受け部（最大）径10.3cm，器高3.2cmである。６はかえり径12.6cm，受け部（最大）径15.2cm，器高4.3cmである。７はかえり径13.6cm，受け部（最大）径16.4cm，器高4.0cmであ

る。８は狭い頂部中央に，宝珠形のつまみがつき，内面には下方に向くかえりが付く。かえり径13.6㎝，受け部(最大)径15.8㎝，器高4.85cmである。

調整は，体部は回転ヘラケズリが施されており，つまみの周りと口縁周辺から内面にかけては回転ロクロナデ，２・３・６～８の内面頂部は一定方向のナデが施されている。１の頂部はカキ目状のナデが施されている。１・８は焼成が良好で，２～７は焼成不良で胎土のしまりが悪い。

92は墳丘盛土から出土したもので，かえり径9.2㎝，受け部(最大)径11.0㎝，器高2.1㎝である。頂部が平坦で，内面にはやや内側へ向く小さなかえりが付く。頂部中央が欠損しているため，つまみの有無は不明である。調整は，頂部をヘラ切りの後にナデ，体部には回転ヘラケズリ，口縁端部から内面にかけて回転ロクロナデが施されている。93は，前庭部の外護列石近くから出土したもので，底部のみ残存している。底部外面は回転ヘラケズリ，内面は回転ロクロナデが施されている。焼成は極めて良好で，器表面は黒色を呈し，灰釉も付着している。

須恵器坏身（９～16）　９～13は，平坦な底部からやや外向きに体部が立ち上がり，端部は丸く納められている。底部はヘラ切りが施され，体部下半には強いナデ，内面から体部上半にか



第 28 図　第４号古墳出土遺物①（1：4）

けては回転ロクロナデが施されている。９は，口径8.0㎝，器高3.2㎝である。10～13は，口径が9.9～10.5㎝，器高が3.4～4.15㎝である。14・15は，やや平坦な底部から外向きに体部が立ち上がり，口縁はやや外反する。底部はヘラ切りのままで，内面から体部にかけては回転ロクロナデが施されている。口径は15.1～16.2㎝，器高3.65～4.2㎝である。やや扁平な器形で，土師器の坏C（浅手）に似ている。16は，やや丸底の底部から外上方に口縁が延び，端部がわずかに外反する。口径16.2㎝，器高6.3㎝である。調整は口縁から体部内外面ともに回転ロクロナデが施されており，底部はヘラ切りの後，ヘラ切りの跡を消すように不定方向のナデが施されている。焼成は良好である。形態が土師器の坏C（深手）に似ている。９・16焼成が良好で，10～15は焼成不良で胎土のしまりが悪い。

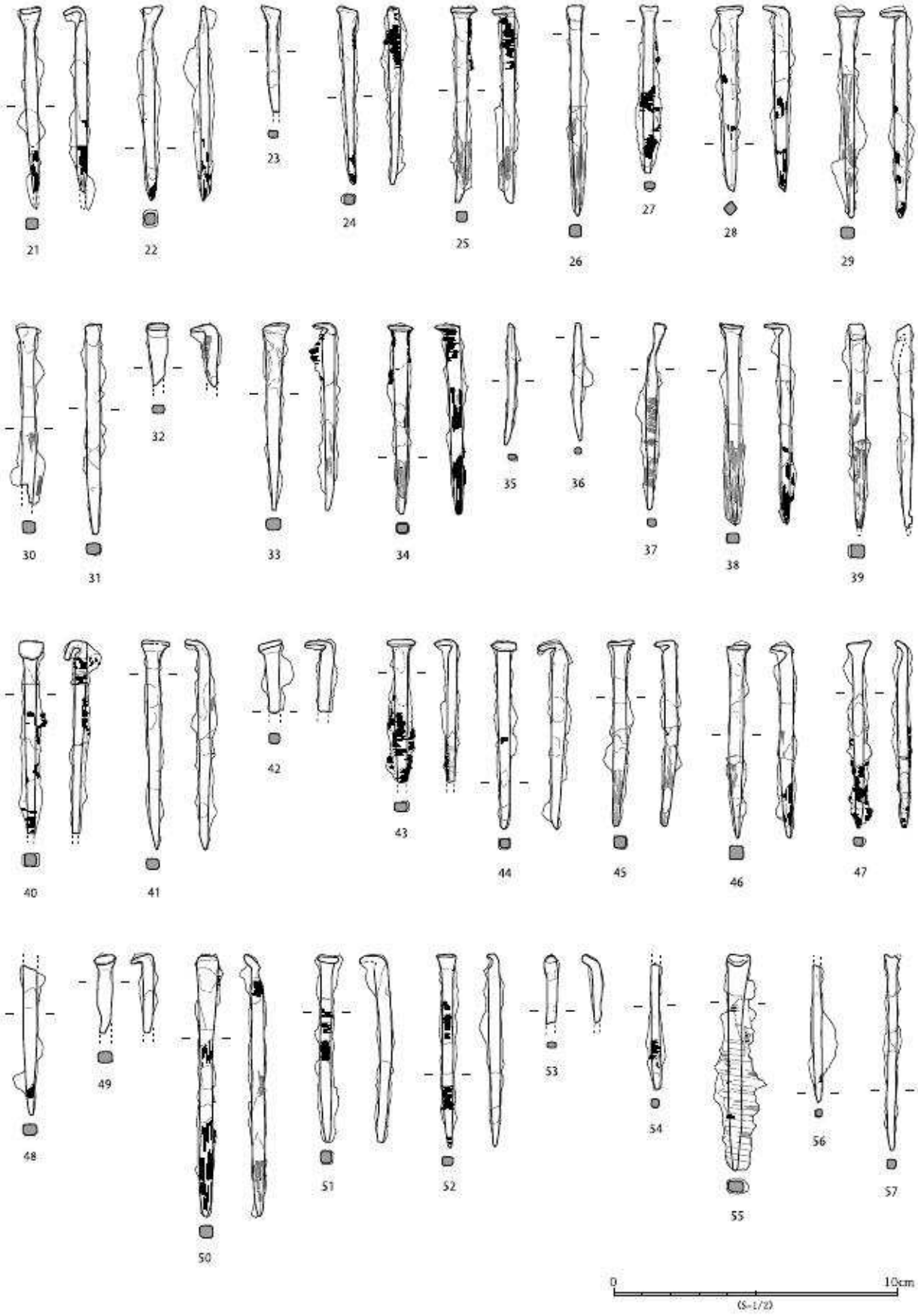
須恵器高坏（17）　平底の坏部に外下方に開く脚が付いており，脚の端部は「く」の字状に折り曲げられており，接地しない。坏部は底部からやや外上方に口縁が延び，端部を丸く納めている。口径9.0㎝，底径6.9㎝，器高7.0㎝である。坏部底面は回転ヘラケズリが施されており，残りの部分は回転ロクロナデが施されている。坏部外面には，回転ナデにより２条の突帯が生じている。焼成は良好である。

須恵器台付長頸壺（18・19）　18は口径7.2㎝，器高19.2㎝，体部幅（最大径）16.7㎝，底径9.0㎝である。やや肩の張った扁球状体部から，やや外側に開く細長い頸が付き，口縁には上部と下部に突帯がついているように加飾されている。頸部と体部の境には段が認められる。台はハの字状に外下方へ延び，端部は「く」の字状に屈曲する。台には４か所（破片部分で２ケ所確認）に外側からヘラ状工具による斜めの刻み目（内面まで未貫通）がある。調整は，回転ロクロナデが施されており，体部の最大径近くで２条，平坦な箇所にも２条の沈線を入れている。その後，この沈線に挟まれた間に，櫛歯状工具を用いて頸部から体部外縁に向かって，刺突列点文を３列配しており，真上から見ると放射状に文様が広がって見える。また，口縁から台部にかけて，部分的に灰オリーブ色の自然釉が付着している。石室内から出土した時は，台部分は壺の体部との接合部分からすべて打ち欠かれた状態であった。

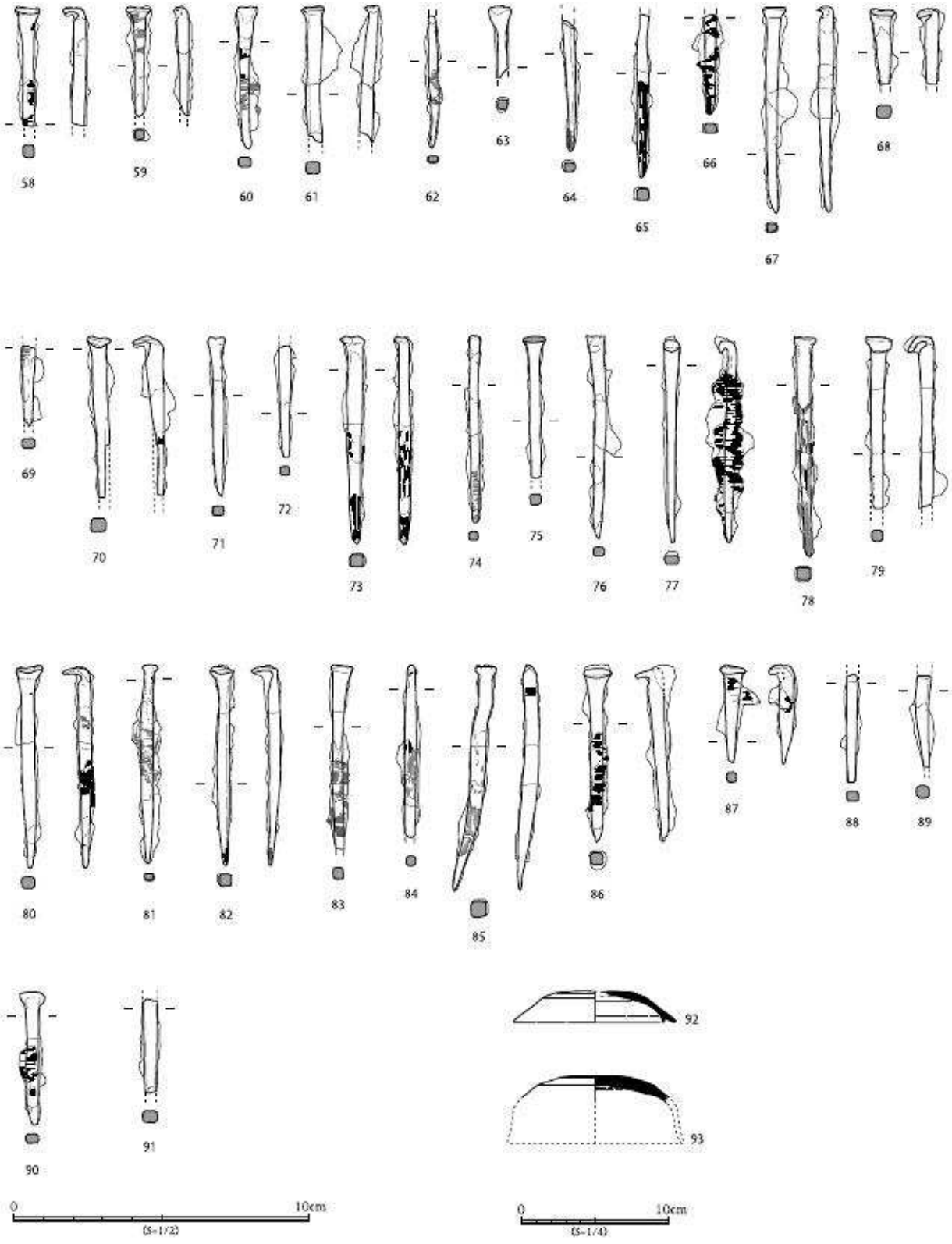
19は台付長頸壺で，口径8.4㎝，器高29.5㎝，体部幅（最大径）19.4㎝，底径12.2㎝，台部高さ5.0㎝である。球状の体部に筒状の頸部が付き，口縁は外反し上方へ曲がる。頸部と体部の境には段が認められる。台はハの字状に外下方へ延びている。調整は，口縁から頸部，台部の内外面には回転ロクロナデを施している。体部には，格子目タタキの後，荒目のカキ目が施されている。焼成は，台部分のみが不良である。

須恵器柄香炉形土製品（20）　柄香炉とは金属製の仏具で，次のように説明されるものである。「手炉（しゅろ）ともいう。口縁が円形外反りの朝顔形した炉・台座・長柄からなる香炉である。」(2)「炉が朝顔形で，口縁は円形外反りで，胴が締まり，下に台座がつき，炉の側面に長柄がつく香炉で，手炉ともいう。これを手に持ち焼香供養するもの。」(3)

20の形態も，以上の説明と同様の形態をしているため，柄香炉形土製品と名付けた。よって各部名称も柄香炉の名称を用い，容器部分を炉，柄を長柄，台を台座と呼ぶ。焼成不良の軟質の



第 29 図　第４号古墳出土遺物②（1：２）



第30図　第４号古墳出土遺物③（1：2，92・93　1：4）

須恵器で，胎土は灰白色を呈している。炉は口縁が外上方に反り，体部は丸く，下に台座が付く。口縁端部内面に，わずかな段を有する。体部中央には断面が隅丸長方形で，下方にL字状に曲がる長柄が貼り付く。台座部分は欠損しており，断面の状況から高坏の脚部と同形の脚台が付いていたと想定できる。さらに体部には台部分が部分的に残存していることから，意図的に台部のみを欠損させたとは考えにくい。

全長は26.5cm，炉の口径10.6cm，体部径8.4cm，器高12.0cm（台座の高さ推定4.2cm，欠損部分は3.6cm）である。調整は炉部分が回転ロクロナデ，長柄の付け根周辺にはナデが施されており，長柄部分は角を削るように面取りをヘラケズリで行い，握りやすくしている。炉の内面には，火を直接受けたような痕跡は認められず，炉内の埋土中にも炭化物等は検出されなかった。

鉄釘　鉄釘は石室内出土70点，石室外1点がある。大きさは，短いもので3.3cm，長いもので9.2cmあり，６～７cm大のものが最も多い。断面形態は方形を呈している。

頭部の形態及び残存状態により大きく３つに分類することができる。頭部を叩いて薄くしたもの（A類＝20点），叩いて薄くしたものをさらに折り曲げたもの（B類＝37点），頭部が欠損しているもの（C類=14点）の３種である。頭部の分類により，初葬時と追葬時とで木棺に使われた鉄釘に違いを見出すことはできなかったため，１つの棺で複数の形態の釘が用いられていたと考えられる。

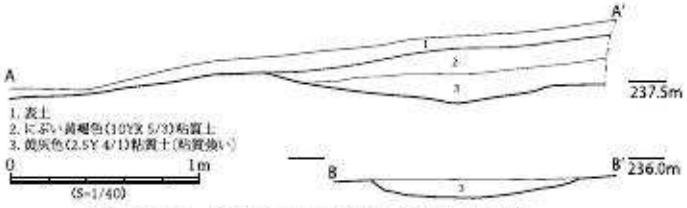
また，鉄釘の表面には棺材の木質が付着しているものがあり，それから棺材の厚さが推測できた。棺材の厚さは，2cm前後が一番多く，最も厚い材で2.7cmである。

【時期】

石室内から出土した土器は，出土位置から初葬に伴うもの（坏身９～11・13・16，坏蓋１～５・８，高坏17，台付長頸壺19），追葬に伴うもの（坏蓋６・７，坏身12・14・15，台付長頸壺）に分けられる。初葬は，坏身・坏蓋の形態（坏G）から飛鳥Ⅱ（７世紀中葉）に，追葬は坏身・坏蓋の形態，高台を持つ坏Bが見られない状況から飛鳥Ⅲ（７世紀後葉）の時期と考えられる。

５．溝（第４・31図　図版26）

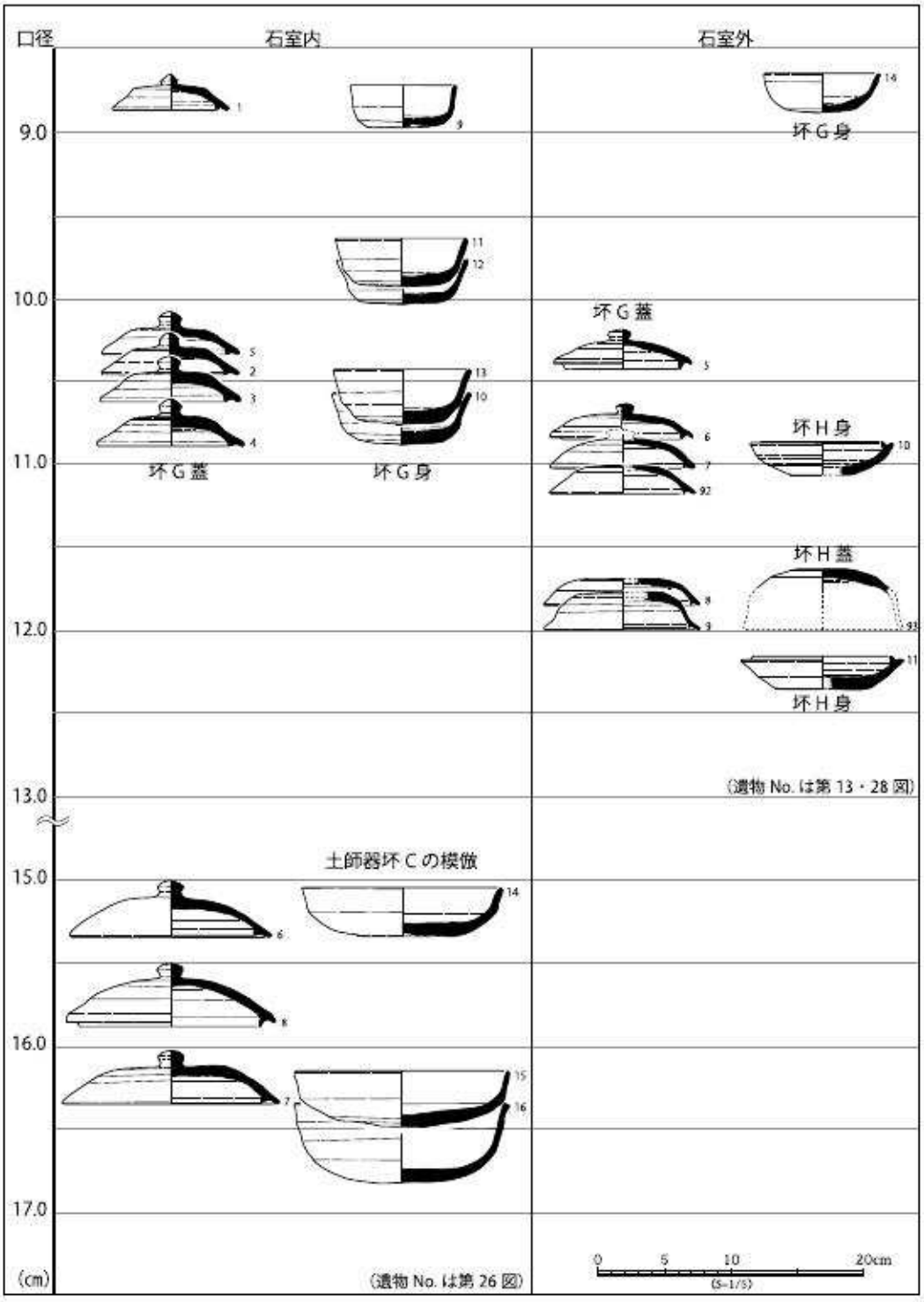
溝SD1は調査区の南東，第２号古墳の南側，第４号古墳の東側に位置している。幅0.6～1.4m，深さ10～30cmで，北東（標高238.2m）から南西（標高234.4m）方向に向かって下り，調査区の南端で消える。北側は調査区外となるため，詳細は不明である。



第31図　溝 SD 1土層断面図（１：40）

埋土から遺物は出土しなかったため，時期は不明である。この溝は調査前の地形でも確認することができず，地籍図の地割に沿うものとも異なる。埋土が第４号古墳の周溝に堆積している埋土に近似しているため，古い時期の遺構と考えられる。この溝を積極的に評価するならば，丘陵

南側の谷底から丘陵の高所へと続いており，第２号古墳の周溝が南側になく，古墳の正面が南側に意識されていると思われる点からも，第２号古墳へと続く墓道であった可能性も考えられる。



第 32 図　第４号古墳土器型式分布図（１：５）

第１表　出土遺物一覧（土器）

図	No.	写真図版	No.	古墳名	土器	器種	口径	最大径	器高	底径	焼成	備考
7	1	27	1	第２号古墳	須恵器	直口壺			(5.8)		良好	波状文
7	2	27	2	第２号古墳	須恵器	壺			(3.9)		良好	
7	3	27	3	第２号古墳	土師器	甕			(4.0)		良	
11	1	28	1	第３号古墳	須恵器	坏身	10.0	12.8	4.9		良好	
11	2	28	2	第３号古墳	須恵器	高坏	10.6	12.6	10.1	9.8	良好	三方透かし　脚部カキ目
13	5	29	5	第３号古墳南	須恵器	坏蓋	8.6	10.4	3.0		不良	轆轤右回り
13	6	29	6	第３号古墳南	須恵器	坏蓋	9.8	10.8	2.7		良好	轆轤右回り
13	7	29	7	第３号古墳南	須恵器	坏蓋	9.1	10.9	(2.3)		良好	つまみ欠損　轆轤右回り
13	8	29	8	第３号古墳南	須恵器	坏蓋	10.4	11.8	(2.0)		良	
13	9	29	9	第３号古墳南	須恵器	坏蓋	10.0	11.8	2.9		良好	
13	10	29	10	第３号古墳南	須恵器	坏身	9.2	10.8	2.5		良好	轆轤左回り
13	11	29	11	第３号古墳南	須恵器	坏身	10.4	12.2	2.5		良	轆轤右回り
13	12	29	12	第３号古墳南	須恵器	坏身			(1.7)	6.0	良好	轆轤右回り
13	13	29	13	第３号古墳南	須恵器	坏身			(1.3)	6.4	良好	
13	14	29	14	第３号古墳南	須恵器	坏身	8.7		3.0		良好	轆轤右回り
13	15	29	15	第３号古墳南	須恵器	壺			(2.2)	4.8	良好	
28	1	30	1	第４号古墳	須恵器	坏蓋	7.0	8.8	2.7		良好	轆轤右回り
28	2	30	2	第４号古墳	須恵器	坏蓋	8.4	10.4	3.2		不良	
28	3	30	3	第４号古墳	須恵器	坏蓋	8.2	10.6	3.4		不良	轆轤右回り
28	4	30	4	第４号古墳	須恵器	坏蓋	8.8	11	3.55		不良	轆轤右回り
28	5	30	5	第４号古墳	須恵器	坏蓋	8.2	10.3	3.2		不良	轆轤右回り
28	6	30	6	第４号古墳	須恵器	坏蓋	12.6	15.2	4.3		不良	
28	7	30	7	第４号古墳	須恵器	坏蓋	13.6	16.4	4.0		不良	
28	8	30	8	第４号古墳	須恵器	坏蓋	13.6	15.8	4.85		良好	轆轤左回り
28	9	30	9	第４号古墳	須恵器	坏身	8.0		3.2		良好	轆轤右回り
28	10	30	10	第４号古墳	須恵器	坏身	10.5		3.9		不良	
28	11	30	11	第４号古墳	須恵器	坏身	9.9		3.65		不良	轆轤右回り
28	12	30	12	第４号古墳	須恵器	坏身	9.9		3.4		不良	
28	13	31	13	第４号古墳	須恵器	坏身	10.4		4.15		不良	轆轤右回り
28	14	31	14	第４号古墳	須恵器	坏身	15.1		3.65		不良	
28	15	31	15	第４号古墳	須恵器	坏身	16.2		4.2		不良	
28	16	31	16	第４号古墳	須恵器	坏身	16.2		6.3		良好	
28	17	31	17	第４号古墳	須恵器	高坏	9.0		7.0	6.9	良好	轆轤左回り
28	18	31	18	第４号古墳	須恵器	台付長頸壺	7.2	16.7	19.2	9.0	良好	台打ち欠き　台破片，石室裏込め
28	19	31	19	第４号古墳	須恵器	台付長頸壺	8.4	19.4	29.5	12.2	良好	
28	20	32	20	第４号古墳	須恵器	柄香炉形土製品	(10.6)	26.5	12.0		不良	台座欠損
30	92	32	92	第４号古墳	須恵器	坏蓋	9.2	11	(2.1)		良	
30	93	32	93	第４号古墳	須恵器	坏蓋			(1.4)		良好	轆轤左回り

第２表　出土遺物一覧（鉄製品①）

図	No.	写真図版	No.	古墳名	種類	全長	幅	厚さ	重さ	備考
7	4	27	4	第２号古墳	鉄鏃	(6.75)	(3.35)	0.3	7 g	透かしを有する
7	5	27	5	第２号古墳	鉄鏃	(3.9)	(2.85)	0.2	5 g	
7	6	27	6	第２号古墳	鉄鏃	(1.9)	(1.4)	0.15	1 g	
7	7	27	7	第２号古墳	鉄鏃	(3.3)	0.75	0.2	2 g	茎部
7	8	27	8	第２号古墳	鉄鏃	(2.55)	0.6	0.2	1 g	茎部
7	9	27	9	第２号古墳	鉄剣	93.2	4.3	0.45	707 g	
11	3	28	3	第３号古墳	刀子	7.4	1.5	0.3	8 g	
11	4	28	4	第３号古墳	素環頭鉄刀	70.3	5.40	1.0	405 g	

◎ 数値のみの単位はcm，（数値）は現存値

第３表　出土遺物一覧（鉄製品②）

図	No.	写真図版	No.	古墳名	種類	全長	幅	厚さ	頭部幅	頭部形態	柄材の厚さ	出土位置（高さ）
27	21	33	21	第４号古墳	鉄釘	(6.45)	0.45	0.4	0.7	B		234.85m
27	22	33	22	第４号古墳	鉄釘	6.8	0.4	0.4	0.7	A		234.87m
27	23	33	23	第４号古墳	鉄釘	3.75	0.35	0.2	0.7	A		234.89m
27	24	33	24	第４号古墳	鉄釘	6.25	0.35	0.35	0.8	A	2.2	234.85m
27	25	33	25	第４号古墳	鉄釘	6.85	0.4	0.35	1.0	B	2.2	234.85m
27	26	33	26	第４号古墳	鉄釘	7.4	0.4	0.4	0.55	A		234.84m
27	27	33	27	第４号古墳	鉄釘	5.9	0.4	0.25	0.6	A		234.88m
27	28	33	28	第４号古墳	鉄釘	6.5	0.4	0.4	0.95	B		234.89m
27	29	33	29	第４号古墳	鉄釘	7.3	0.45	0.4	1.1	B	2.2	234.90m
27	30	33	30	第４号古墳	鉄釘	6.75	0.45	0.4	0.7	A		234.87m
27	31	33	31	第４号古墳	鉄釘	7.45	0.5	0.4	0.55	A		234.90m
27	32	33	32	第４号古墳	鉄釘	(2.2)	0.4	0.3	0.8	B		234.83m
27	33	33	33	第４号古墳	鉄釘	6.1	0.5	0.4	0.95	B	2.3	234.86m
27	34	33	34	第４号古墳	鉄釘	6.6	0.35	0.3	0.9	B	2.0	234.84m
27	35	33	35	第４号古墳	鉄釘	4.3	0.3	0.2		C		234.84m
27	36	33	36	第４号古墳	鉄釘	4.15	0.2	0.2		C		234.85m
27	37	33	37	第４号古墳	鉄釘	6.6	0.3	0.3	0.4	A		234.84m
27	38	33	38	第４号古墳	鉄釘	7.1	0.4	0.35	0.8	B	2.1	234.86m
27	39	33	39	第４号古墳	鉄釘	(7.2)	0.5	0.45	0.55	B		234.88m
27	40	33	40	第４号古墳	鉄釘	6.8	0.4	0.4	0.85	B	1.6	234.84m
27	41	33	41	第４号古墳	鉄釘	7.4	0.5	0.4	1.0	B	2.0	234.84m
27	42	33	42	第４号古墳	鉄釘	(2.6)	0.4	0.4	0.8	B		234.83m
27	43	33	43	第４号古墳	鉄釘	(5.05)	0.45	0.3	1.0	B	2.0	234.84m
27	44	33	44	第４号古墳	鉄釘	6.55	0.35	0.3	0.9	B		——
27	45	33	45	第４号古墳	鉄釘	6.55	0.35	0.35	0.95	B		234.81m
27	46	33	46	第４号古墳	鉄釘	6.80	0.50	0.5	0.85	B		234.81m
27	47	33	47	第４号古墳	鉄釘	6.55	0.35	0.3	0.9	B	1.9	234.84m
27	48	33	48	第４号古墳	鉄釘	(5.3)	0.5	0.4		C		234.77m
27	49	33	49	第４号古墳	鉄釘	(2.8)	0.5	0.4	0.8	B		234.80m
27	50	33	50	第４号古墳	鉄釘	9.2	0.5	0.4	0.8	B	2.7	234.84m
27	51	33	51	第４号古墳	鉄釘	6.5	0.45	0.4	0.75	B		234.78m
27	52	33	52	第４号古墳	鉄釘	6.8	0.4	0.35	0.7	B	1.7	234.81m
27	53	33	53	第４号古墳	鉄釘	(2.5)	0.3	0.2	0.45	B		234.77m
27	54	33	54	第４号古墳	鉄釘	(4.4)	0.3	0.3		C		234.78m
27	55	33	55	第４号古墳	鉄釘	7.6	0.5	0.4	0.8	B		234.90m
27	56	33	56	第４号古墳	鉄釘	(5.0)	0.25	0.3		C		234.86m
27	57	33	57	第４号古墳	鉄釘	6.9	0.3	0.3	0.5	A		234.84m
28	58	33	58	第４号古墳	鉄釘	(4.05)	0.4	0.45	0.85	B		234.83m
28	59	33	59	第４号古墳	鉄釘	(3.7)	0.3	0.35	0.8	B		234.83m
28	60	33	60	第４号古墳	鉄釘	4.8	0.45	0.35	0.7	A		234.84m
28	61	33	61	第４号古墳	鉄釘	(4.6)	0.45	0.4	0.8	B		234.89m
28	62	33	62	第４号古墳	鉄釘	4.65	0.3	0.2		C		234.83m
28	63	33	63	第４号古墳	鉄釘	(2.4)	0.3	0.3	0.8	A		234.83m
28	64	33	64	第４号古墳	鉄釘	(4.45)	0.4	0.3		C		234.81m
28	65	33	65	第４号古墳	鉄釘	(5.5)	0.4	0.4		C		234.81m
28	66	33	66	第４号古墳	鉄釘	(3.4)	0.4	0.3		C		234.80m
28	67	33	67	第４号古墳	鉄釘	7.0	0.35	0.3	0.8	B		234.84m
28	68	33	68	第４号古墳	鉄釘	(2.6)	0.5	0.4	0.85	B		234.88m
28	69	33	69	第４号古墳	鉄釘	(2.75)	0.4	0.35		C		234.86m
28	70	33	70	第４号古墳	鉄釘	5.5	0.5	0.45	0.8	B		234.88m
28	71	33	71	第４号古墳	鉄釘	5.4	0.35	0.3	0.6	A		234.82m
28	72	33	72	第４号古墳	鉄釘	(3.8)	0.4	0.3		C		234.82m
28	73	33	73	第４号古墳	鉄釘	7.05	0.45	0.4	0.85	B		234.81m
28	74	33	74	第４号古墳	鉄釘	6.35	0.3	0.3	0.35	A		234.80m
28	75	33	75	第４号古墳	鉄釘	(5.05)	0.4	0.4	0.8	B		234.77m
28	76	33	76	第４号古墳	鉄釘	6.9	0.4	0.35	0.65	A		234.82m

◎ 単位はcm，（数値）は現存値

第３表続き

図	No.	写真図版	No.	古墳名	種類	全長	幅	厚さ	頭部幅	頭部形態	棺材の厚さ	出土位置（高さ）
28	77	33	77	第４号古墳	鉄釘	6.85	0.5	0.3	0.5	B		234.82m
28	78	33	78	第４号古墳	鉄釘	7.5	0.45	0.4	0.75	A		234.82m
28	79	33	79	第４号古墳	鉄釘	(5.9)	0.4	0.4	0.9	B		234.80m
28	80	33	80	第４号古墳	鉄釘	6.8	0.45	0.4	0.9	B		234.77m
28	81	33	81	第４号古墳	鉄釘	6.7	0.35	0.2	0.55	A	1.9	234.82m
28	82	33	82	第４号古墳	鉄釘	6.7	0.4	0.4	0.8	B		234.76m
28	83	33	83	第４号古墳	鉄釘	(6.3)	0.35	0.4	0.75	A		234.75m
28	84	33	84	第４号古墳	鉄釘	(5.85)	0.3	0.4	0.3	A		234.76m
28	85	33	85	第４号古墳	鉄釘	7.65	0.45	0.45	0.7	A	1.9	234.73m
28	86	33	86	第４号古墳	鉄釘	5.9	0.4	0.4	0.95	B		234.73m
28	87	33	87	第４号古墳	鉄釘	3.25	0.3	0.3	0.9	B		234.73m
28	88	33	88	第４号古墳	鉄釘	(3.7)	0.4	0.3		C		234.73m
28	89	33	89	第４号古墳	鉄釘	(3.1)	0.45	0.4		C		234.84m
28	90	33	90	第４号古墳	鉄釘	4.5	0.5	0.35	0.85	A	1.8	—
28	91	33	91	第４号古墳	鉄釘	(3.2)	0.5	0.4		C		243.43m

◎ 単位はcm，（数値）は現存値

第４表　広島県内出土素環頭大刀計測表

	全長	環頭部			環頭基部	刃部			茎部		
		横幅	縦幅	厚さ	幅	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ
門田敦盛第３号古墳	70.3	5.4	4.0	1.0	1.45	54.1	2.05 ～ 2.65	0.5 ～ 0.6	8.0	1.45	0.2
地蔵堂山第１号古墳	77.5	5.2	4.3	1.0	1.4	58.8	2.5 ～ 3.2	0.5 ～ 0.6	14.5	1.4 ～ 2.1	0.6
白鳥古墳	(85.0)2尺8寸	6.1	4.9	1.0	1.4	詳細不明					

◎ 単位はcm，（数値）は現存値

Ⅴ　まとめ

門田敦盛第２・３・４号古墳の調査で，第２号古墳は５世紀後葉の円墳（直径約10m），第３号古墳は５世紀末から６世紀初頭の円墳(直径７m)，第４号古墳は７世紀中頃の方墳(一辺19m)であることが判明し，各古墳から鉄製品や須恵器などの遺物が出土し，多くの成果を得ることができた。本章では，各古墳出土の遺物についての考察を行う。

１　第２号古墳の鉄剣・鉄鏃について

第２号古墳から出土した鉄剣は，全長が93.2㎝と長大なものである。池淵氏の分類によると，直角関直茎cの長剣に位置づけられる(4)。広島県内の古墳時代中期の古墳から出土した鉄剣の一覧表（第５表）で示したように，中小田第２号古墳出土例（広島市安佐北区口田南３丁目・５世紀中頃)の115㎝に次ぐ，大きさである。三次盆地内では，酒屋高塚古墳出土例(82.5㎝・５世紀後半)を超え，最も長い鉄剣である。

また，透かしのある鉄鏃(第７図４)は，熊本県阿蘇郡西原村のきつね塚古墳から出土した鉄鏃(全長14.7㎝)(5)の長さ・幅共に約半分程度の大きさであるが，ほぼ同形のものである。きつね塚古墳のものは，その非実用的な大きさから儀器として位置づけられている鉄鏃で，当古墳のものも同じ形をしていることから，実用的なものでなく，儀器と考えることができる。

鉄剣・鉄鏃が副葬されている面から見ると，第２号古墳は軍事に関係した被葬者を想定することができるが，実用に不向きな長大な剣と儀器と考えられる鉄鏃と同形の鉄鏃を有しているという要素を加味すると，戦闘で用いる武器というよりも儀式や祭祀など儀礼で用いられた武器が副葬されていたと考えられる。

２　第３号古墳の素環頭大刀について

素環頭大刀は，弥生時代から続く中国由来の素環の把頭を有する鉄刀である。池淵氏の分類ではⅡＢ式に分類され，国産品として位置づけられる(4)。広島県内では，白鳥古墳(東広島市高屋町)(6)・地蔵堂山第１号古墳(広島市安佐北区落合)(7)から出土している。

白鳥古墳は，神社築造時に古墳が破壊され，墳丘や埋葬施設などは不明であるが，円筒埴輪があり，素環頭大刀と共に三角縁神獣鏡・三神三獣鏡・碧玉製勾玉が出土している。地蔵堂山第１号古墳は，墳形は山城築城時に削平されており不明で，埋葬施設は二重土坑である。副葬品には，素環頭鉄刀の他に，鉄剣・鉄刀・鋳造鉄斧・鉄鎌・鋤先・鉄鉾・鉄鏃・有孔円板・針などがある。出土した遺物から，白鳥古墳が４世紀代，地蔵堂山第１号古墳が５世紀後半，門田敦盛第３号古墳が５世紀末から６世紀初頭の時期である。地蔵堂山第１号古墳と門田敦盛第３号古墳は，時期も近いためか環頭部の大きさはほぼ同じで，鉄刀部分の長さのみが異なっている。

門田敦盛第３号古墳より素環頭大刀が出土したことで，これまでの安芸地域の分布圏から備後北部まで分布圏が広がったことになる。時期的にも素環頭大刀が副葬される最終期であり，この後の首長墓には，金銅製の環頭を伴う装飾付大刀が副葬されるようになる(8)。

第５表　広島県内鉄剣出土古墳一覧

古墳名	所在地	全長	墳形・埋葬施設	出典
城ノ下第１号古墳	広島市佐伯区五日市	65.1	円墳(21m)・土壙墓	1
禅昌寺西古墳Ａ主体部	広島市東区戸坂町	51.0 26.7	箱式石棺	2
三王原古墳	広島市安佐南区祇園町	(85.7) (63.6)	墳形不明・竪穴式石室	3
空長第１号古墳	広島市安佐南区祇園町	(86.3) (37.7)	円墳(13m)・竪穴式石室	4
池の内第４号古墳	広島市安佐南区祇園町	53.9	円墳(8m)・箱式石棺	5
寺山第２号古墳	広島市安佐北区可部町	51.5	円墳(9.7m)・土壙墓	6
寺山第５号古墳	広島市安佐北区可部町	66.95	円墳(12m)・土壙墓	7
高陽台遺跡Ｂ地点第４号古墳	広島市安佐北区高陽町	24.1	墳形不明・箱式石棺	8
地蔵堂山第２号古墳	広島市安佐北区高陽町	(69.5)	円墳(14m)・竪穴式石室	9
山手第１号古墳	広島市安佐北区高陽町	(23.5)	墳形不明・礫床土壙墓	
虹山古墳	広島市安佐北区亀山南２丁目	(22.4)	帆立貝式(24.6m)・土壙墓	10
弘住第５号古墳	広島市安佐北区高陽町小田・矢口	47.8	墳形不明・土壙墓	11
上小田古墳	広島市安佐北区口田南２丁目	40.5 45.3	円墳(25m)・箱式石棺	12
中小田第２号古墳	広島市安佐北区口田南３丁目	115.0 42.1	円墳(20m)・竪穴式石室	13
中小田第３号古墳	広島市安佐北区口田南３丁目	78.8	円墳(12m)・竪穴式石室	14
大明池第２号古墳	広島市安佐北区口田１丁目	(38.4)	円墳(８m)・土壙墓	15
石井ヶ原第１号古墳	安芸高田市高宮町来女木	67.8	積石塚(７m)	16
三ツ城古墳第１号古墳	東広島市西条中央７丁目	77.0	前方後円墳(92m)・第３号箱式石棺	17
金口第４号古墳	東広島市福富町大字久芳	40.7	円墳(6.5m)・箱式石棺	18
太郎丸古墳	三次市畠敷町	(18.4) (21.0)	円墳・竪穴式石室	19
宗祐西第１号古墳	三次市南畠敷町	詳細不明	円墳(18m)・箱式石棺	20
上四拾貫第３号古墳	三次市上四拾貫町	(18.4)	円墳(8m)・土壙墓	21
上四拾貫第６号古墳		37.0	円墳(17m)・土壙墓	
四拾貫日南39号墳	三次市四拾貫町	詳細不明	円墳(24m)・土壙墓	20
四拾貫小原第１号古墳	三次市四拾貫町	37.8	円墳(26m)・土壙墓	22
浄楽寺第61号古墳	三次市高杉町	42.0	方墳(14m)・箱式石棺	23
大久保５号古墳	三次市西酒屋町	55.5	円墳(22.5m)・粘土槨	24
酒屋高塚古墳	三次市西酒屋町	82.5	帆立貝式(46m)・竪穴式石室	25
善法寺第１号古墳	三次市西酒屋町	詳細不明	円墳(18.5m)・粘土槨	26
善法寺第８号古墳		詳細不明	帆立貝式(30m)・後円部：竪穴式石室	
		詳細不明	前方部：箱式石棺	
善法寺第９号古墳		詳細不明	前方後円墳(35m)・竪穴式石室	
善法寺第11号古墳		詳細不明	前方後方墳(34m)・後方部：土壙墓	
川西第１号古墳	三次市三若町	詳細不明	円墳(14.5m)・箱式石棺	20
川西第５号古墳		詳細不明	円墳(13.5m)・箱式石棺	
下矢井南第４号古墳	三次市吉舎町下矢井	(21.8)	円墳(18.8m)・粘土槨１	27
		(19.0)	粘土槨２	
		(55.4)	粘土槨３	
発展第１号古墳	庄原市峰田町	(24.6)	円墳(8.2m)・土壙墓	28
大風呂古墳	庄原市板橋町大風呂	82.5	円墳(8m)・土壙墓	29
中央山第２号古墳	庄原市東城町大字川東	60.1	円墳(10m)・箱式石棺	30
寺山第１号古墳	府中市栗柄町	33.4	円墳・竪穴式石室	31
馬場谷第２号古墳	三原市沼田東町納所	(23.0)	円墳(13.9m)・粘土槨	32
宮ノ谷第４号古墳	三原市沼田東町納所	詳細不明	円墳(14m)・箱式石棺	
亀山第１号古墳	福山市神辺町大字道上	76.3	円墳(24m)・粘土槨	33
		65.8		
		66.2		
池下山箱式石棺	福山市赤坂町	詳細不明	箱式石棺	34

※　単位はcm，(　)は残存長

3　柄香炉形土製品について

柄香炉形土製品とは，金属器の柄香炉を模倣して作られたと考えられる土器である。柄香炉とは，香供養の際に用いられる仏具で，「仏菩薩に対して誓いを述べる時や願いを述べる時など，心中の所願を言葉や念をもって仏菩薩に伝えようとする時に手に執ることの多い仏具」[9]とされている。柄香炉形土製品の原型となったであろう金属器も現存しており，法隆寺や正倉院に７世紀代のものとされているものが３例ある。[10]

①法隆寺献物宝物280号　真鍮製鍛造鍍金　全長39.0㎝，高さ10.2㎝，炉口径13.2㎝

柄の裏に「慧慈」の朱書銘。台座裏に「帯方」と読める針書銘。

②法隆寺献物宝物281号　真鍮製鍛造　全長35.5㎝，高さ8.0㎝，炉口径10.8㎝

柄の裏に後世の銘と思われる「山背大兄御持物」の墨書あり。

③正倉院宝物赤銅柄香炉（南倉52号-3）　赤銅製鍛造　全長36㎝，高さ10.5㎝，12.3㎝

いずれも金属製で，７世紀には日本では生産することができなかった仏具である。柄の末端の形状が鵲（かささぎ）の尾に似ていることから鵲尾形柄香炉に分類されている。柄香炉形土製品において，金属製柄香炉の形状が模倣されなかった部分は，柄頭の半球形の飾りと柄末端の形状で，土製品は装飾的要素が一切排除された簡素な作りとなっている。

門田敦盛第４号古墳から出土した柄香炉形土製品と同様に，以上のような金属器の柄香炉を模倣したと考えられる遺物を複数確認することができた。[11]

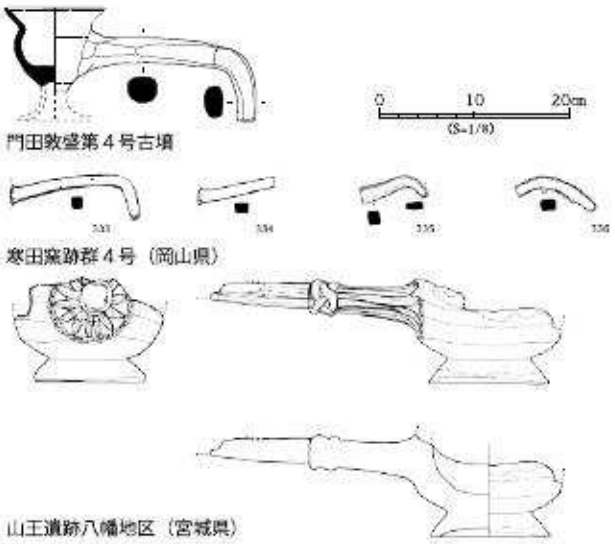
土器では，岡山県倉敷市の寒田窯跡４号窯跡[12]の灰原から出土した須恵器の中に，柄香炉形土製品の長柄部分と形態が類似したものがある。椀につく把手と報告されている４例（No.333～336）で，時期は寒田Ⅲ期（飛鳥Ⅱ並行期）に比定されている。特にNo.333やNo.336はL字形に屈曲している形状が似ており，それぞれ断面が方形（正方形と長方形）で，各面がヘラケズリで仕上げられ，角が面取りされている点も共通している。しかし，大きさが大きく異なり，容器部分も残存していないため，必ずしも柄香炉形土製品の部位とは断定し難い。よって，現時点では門田敦盛第４号古墳から出土した土製品が，柄香炉を模した唯一の土製品の例であるといえる。

土器以外では，宮城県多賀城市の山王遺跡八幡地区[13]の河川跡（SD2050B）から，木製の柄香炉が出土している。ケヤキの一木造りで，表面には黒漆が塗られている。炉部の口縁と長柄の末端部が欠損している。残存している口径は約16㎝，高さが約8㎝で，台座の底径12.8㎝，高さ2.4㎝である。柄部分は約22㎝残存しており，全長は約37.3㎝である。長柄の付け根部分には，外周に撚紐状の装飾を巡らした素弁の蓮華文が浮き彫りされている。金属製の柄香炉には見られない仏教的モチーフを取り入れた装飾が長柄に施されており，形態の模倣以上の独自性が見られる。河川内の遺物から７世紀後半代の時期が考えられている。山王遺跡は弥生時代・古墳時代前期から後期にかけて，ほぼ連続的に営まれたこの地域の拠点集落であるが，周辺に寺院はなく，集落と寺院との関係性が見出せないと報告されている。

以上が柄香炉及びその模倣品であるが，柄香炉がどのように使用されていたかを示す記述を『日本書紀』の中に見ることができる。

皇極天皇元年(642)七月「庚辰，於大寺南庭，嚴佛菩薩像與四天王像，屈請衆僧，讀大雲經等。于時，蘇我大臣，手執香鑪，燒香發願。辛巳，微雨。壬午，不能祈雨。故停讀經。」

天智天皇十年(671)十一月「丙辰，大友皇子在於內裏西殿織佛像前，左大臣蘇我赤兄臣・右大臣中臣金連・蘇我果安臣・巨勢人臣・紀大人臣侍焉。大友皇子，手執香鑪，先起誓盟曰，六人同心奉天皇詔，若有違者必被天罰，云々。於是，左大臣蘇我赤兄臣等，手執香鑪，隨次而起，泣血誓盟曰，臣等五人隨於殿下奉天皇詔，若有違者四天王打，天神地祇亦復誅罰，卅三天證知此事，子孫當絶家門必亡，云々。」



第33図　柄香炉模倣品

いずれも手に香炉を持ち，誓願している場面が記されている。また，前者は寺院(百済大寺)内であるが，後者は内裏で，仏教施設とは異なる場所である。このことから寺院などの仏教施設でなくとも，仏像が安置された場所であれば，柄香炉が用いられていたことがわかる。

このような場面から柄香炉は，寺院のような施設と結び付いているものではなく，誓願の対象となる仏像や誓願を行う個人との関係が強いものとして捉えられる。そして，焼香という仏教儀礼を通して仏像と請願主(個人)を結びつけるのが，柄香炉の役割と位置づけられている[14]。

山王遺跡の柄香炉が集落近くの河川跡から出土し，門田敦盛第４号古墳の柄香炉形土製品が石室に納められている状況は，いずれも仏教施設との直接的な関わりを示してはいない。特に門田敦盛第４号古墳の柄香炉形土製品が墓の中に納められた副葬品であることからも，被葬者との関係性が強いものであることを示している。

金属製の仏具は，『日本書記』持統天皇三年(689)七月の陸奥蝦夷沙門自得が金銅薬師仏をはじめとする仏像や仏具などを中央に請求し，賜っている記述から，地方での金銅製の仏像・仏具の入手ルートとして，中央(都)から入手していることが分かる。地方においては，入手が困難な金属製の仏具の代替品として，地元で須恵器や山王遺跡のような木製品の模倣品が作られ，７世紀中葉頃には寺院などの仏教施設に先行して，仏具を用いた儀式が地方においても執り行われていたと考えられる。

三次盆地においては，門田敦盛第４号古墳の初葬の時期(７世紀中葉)には，三次盆地で最も古い仏教施設と考えられている寺町廃寺はまだ建立されておらず，同時期の仏教と関係する具体的な遺構は現時点では確認されていない。広島県内では，檜隈寺(奈良県高市郡明日香村)と同笵と考えられる有子葉単弁蓮華文軒丸瓦，若草伽藍・中宮寺・法隆寺東院(奈良県生駒郡斑鳩町)と同笵と考えられる忍冬葉単弁蓮華文軒丸瓦が出土している安芸国の横見廃寺（三原市本郷町）[15]が７世紀中葉頃に造営されたと考えられているが，第４号古墳との直接的な接点は見当たらない。

『日本書紀』天武天皇十四年（685）三月には「壬申，詔，諸國毎家作佛舎，乃置佛像及經，以禮拝供養」とあり，家毎にお堂を建て，仏像や経典を置き，仏教儀礼を行うよう詔が出されており，国中に広く仏教を広めようとしていたことが分かる。それに先行して，三次盆地という地方においても，仏教儀礼で用いる柄香炉（形土製品）が存在しており，７世紀中頃には一部の階層で仏教が取り入れられたとみなすことができるであろう。

また，山王遺跡八幡地区は多賀城の近く（政庁から650m），門田敦盛第４号古墳は三次評衙跡と考えられている下本谷遺跡の近く（1.5km）と，古代の官衙周辺から模倣品が出土している状況から，このような器物を保有することができたのは，中央との繋がりを持った地方の役人を想定することができる。

4　副葬品の部分打欠き

門田敦盛第４号古墳の石室内に副葬されていた台付長頸壺18は，台部分が欠損した状態で石室奥壁近くで出土し，石室羨道部の東側壁の裏込めから，台部分の破片（全体の４分１）が出土した。

打ち欠かれた台の破片部分が，石室の裏込め内から出土したことで，台の打欠き行為が羨道側壁の東側の裏込めが埋められる前段階で行われていたことが判明した。

追葬の様子を石室や副葬品の出土状況から推測し，順に追ってみる。①羨道の天井石をはずす。②閉塞石及び羨道側壁（外護列石を含む）をはずす。③石室内の片づけ・整地。④副葬品を石室内に納品。⑤石室内に納棺。⑥羨道側壁の積み直し（側壁再構築）。⑦天井石の構架。⑧石室の閉塞。以上のような工程が考えられる。台の打ち欠き行為が行われたのは，④より前の段階で，打ち欠かれた台の破片は埋土と共に⑥の段階で裏込めに混入している。

石室内には，台付長頸壺18の他に同形の壺19が出土している。18が追葬，19が初葬に伴うものだが，台付長頸壺19には台部分への打ち欠き行為は認められず，脚部を伴うような他の遺物にもそのような痕跡が認められないため，土器を打ち欠く行為[16]は追葬時においてのみ行われた限定的な儀礼行為であったと考えられる。

初葬時には，仏具を模倣した柄香炉形土製品が副葬され，他に類例が認められない新しい要素が認められたが，追葬時にはそれを払拭するかのように，古くから見られる土器の打ち欠き行為が行われている。このような点から，世代交代に伴い，仏教の影響をうけた新興の葬送から伝統的な儀礼を交えた葬送へ回帰したと捉えることもできるのではなかろうか。

5　門田敦盛古墳群について

今回の調査で，門田敦盛古墳群は４基の古墳から形成された極めて小規模な古墳群であることが判明した。古墳の立地と遺物の年代[17]から，古墳群の形成過程をみると次の順になる。

５世紀後葉	５世紀末～６世紀初頭	７世紀中葉
第２号古墳 →	第３号古墳----------	→第４号古墳→追葬
	--------（第１号古墳）--------	

丘陵の最頂部で第２号古墳が築かれた後，同一丘陵上に第３号古墳が築かれている。第１号古墳は，第２号古墳とは一連の丘陵であるが，北側に位置する東西方向の丘陵上に位置しており，古墳が築かれた位置も第４号古墳とほぼ同じ標高の低い場所に築かれていることから，第２・３号古墳のグループとは異なるグループと考えられる。第１号古墳に関しては，遺物が出土しておらず，時期が不明なため，位置づけを行うのが困難である。第４号古墳は，第３号古墳が築かれてから約150年後に築かれており，古墳を丘陵の尾根上ではなく，斜面上に古墳を築いている点で違いが認められ，これらを考慮すると第３号古墳とは異なるグループである可能性が高いと思われる。

小規模な古墳群であるが，今回調査を実施した第２～４号古墳は，比較的小規模な墳丘であるものの，それぞれに特徴的な副葬品を有していることから，この地域の有力な一族であったことが想定される。第４号古墳の初葬の被葬者は，近隣の同時期の四拾貫第16号古墳[18]や天狗松第５号古墳と比較すると墳丘・石室規模は大きくないものの，古墳の立地や仏具を模した柄香炉形土製品を伴っている状況から，仏教信仰をいち早く取り入れた役人（有力氏族の枝族または中小氏族）に想定できる。特に第４号古墳の調査では，７世紀代の古墳の被葬者像に新たな視点を加え，三次盆地における仏教受容の一端を明らかにすることができた。

門田敦盛古墳群の周囲には，多くの古墳群が確認されている。今後それらの調査例が増えることで，本古墳群の各古墳の位置づけも，より明確になるであろう。

【註】

（１）伊藤実氏から，環頭部と基部を接合する方法で，基部を環頭に巻き込むように固定し，巻き込んだ上部側（環頭内面側）の基部を切断し，平らにする方法があることを教示していただいたが，第３号古墳の鉄刀では基部の巻き込みを示すような明瞭な鉄板の重なりを見出すことができなかったため，基部と環頭部との接合方法は挟み込みと判断した。

（２）岡崎譲治監修 『仏具大事典』 1982年 鎌倉新書

（３）光森正士編 『正倉院宝物にみる仏具・儀式具』 1993年 紫紅社

（４）池淵俊一 「鉄製武器に関する一考察－古墳時代前半期の刀剣類を中心として－」『古代文化研究』No.1 1993年

（５）広島市教育委員会 『弘住遺跡発掘調査報告』広島市の文化財第25集 1983年

（６）新谷武夫 「広島県出土の環頭柄頭について」『芸備』第３集 1975年 芸備友の会

新谷武夫 「安芸・備後の装飾大刀」『芸備』第41集 2012年 芸備友の会

（７）広島県教育委員会 『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1977年

（８）大阪府近つ飛鳥博物館 『金の大刀と銀の大刀-古墳・飛鳥の貴人と階層-』大阪府立近つ飛鳥博物館図録９ 1996年

（９）小野佳代 「手に柄香炉を持って跪く供養者像」『南都佛教』90号 2007年

(10)加島勝　「柄香炉と水瓶」『日本の美術』第540号　2011年

(11)次の報告書では，柄香炉形土製品として９世紀前半の竪穴住居跡から出土した土師器が報告されている。炉の口縁部分は大きく外に開いているが，胴部は扁平で，台座が取り付けられていない。柄が取りつくと考えられている箇所には穴が空いている。時期が異なり，台座がないことから柄香炉よりも火熨斗に近い形態であることから，本文では取上げなかった。

山形県埋蔵文化財センター　『上敷免遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第159集　2007年

(12)倉敷埋蔵文化財センター　『寒田窯跡群４号』倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第10集　2003年

(13)宮城県教育委員会　『山王遺跡八幡地区の調査２』宮城県文化財調査報告書第186集　2001年

(14)小野佳代　「中国および日本における柄香炉の用法－図像解釈への可能性－」『奈良美術研究』第３号　2005年

(15)山崎信二　『古代瓦と横穴式石室の研究』　2003年

(16)台付長頸壺18と同様に脚台の打欠きが行われている例に，京都府城陽市長池古墳の第３主体部，京都市常盤東ノ町１号墳，京都市大枝山22号墳・23号墳，熊本県城南町塚原古墳群の丸山19号墳などがある。土器の打欠き儀礼は，農耕民族特有の命の再生復活を祈念して執り行われた儀礼行為と考えられている。

浅岡俊夫　「須恵器の口縁部・脚台部の打欠き儀礼-弥生農耕社会からの土俗的祭祀の予察-」『田辺昭三先生古希記念論文集』2002年

(17)門田敦盛第２・３・４号古墳から出土した遺物の年代は，次の研究成果を参考にした。

一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編『古墳時代の考古学』第１巻　古墳時代史の枠組み　同成社　2011年

安間拓巳「古墳出土資料から見た広島県の須恵器の変遷」『広島の考古学と文化財保護』松下正司先生喜寿記念論集　2014年

(18)直径約12ｍ，高さ2.5ｍの円墳。全長約8.5ｍ，幅1.3ｍ，高さ約1.5ｍの無袖形の横穴式石室。

妹尾周三　「四拾貫第十六号古墳」『三次市史Ⅱ』　三次市史編集委員会　2004年

第５表出典

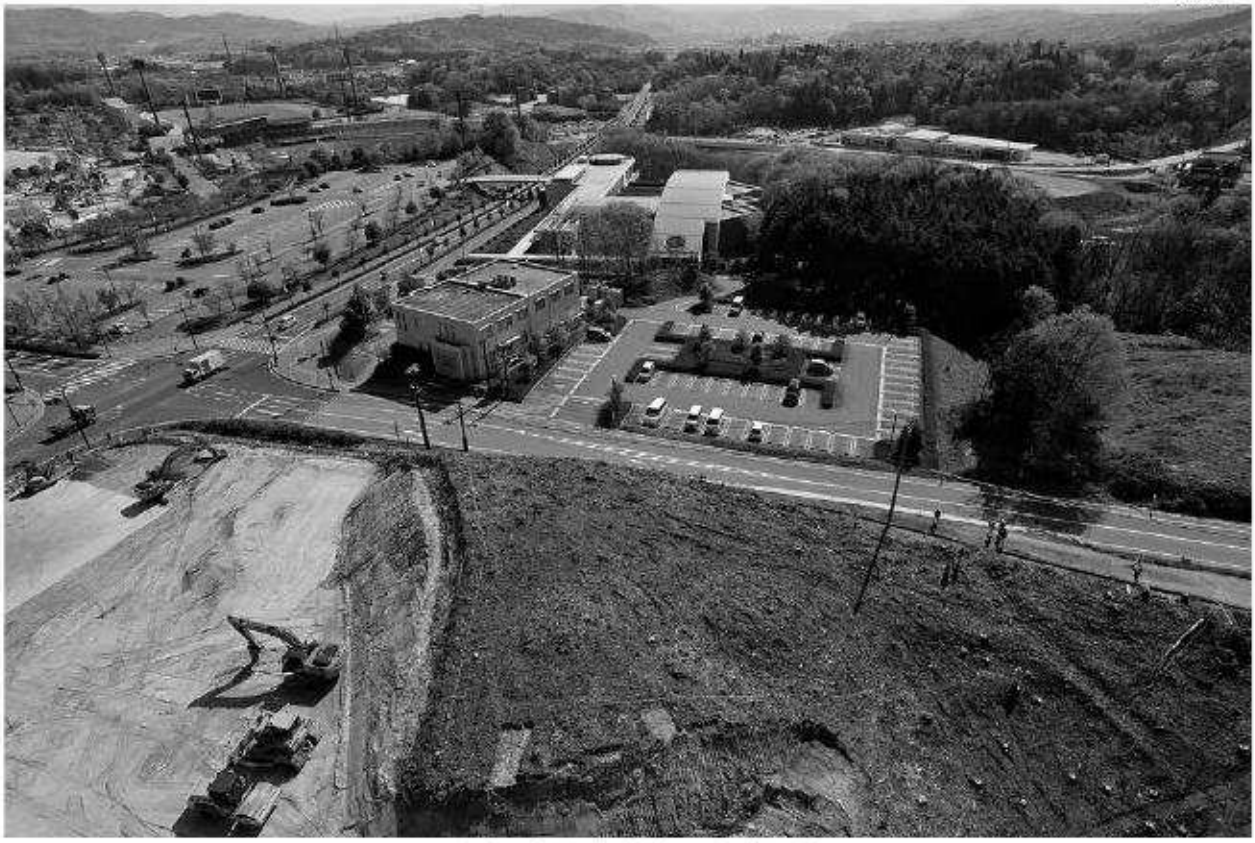
1．㈶広島市歴史科学教育事業団 『城ノ下Ａ地点遺跡発掘調査報告』㈶広島市歴史科学教育事業団調査報告書第２集　1991年
2．禅昌寺西遺跡発掘調査団 『広島市戸坂町禅昌寺西遺跡発掘調査報告』 1980年
3．中田昭 「広島市祇園町三王原古墳について」『芸備』第１集　1973年
4．広島市教育委員会 『空長古墳群発掘調査報告』広島市の文化財第13集　1978年
5．広島市教育委員会 『池の内遺跡発掘調査報告』広島市の文化財第32集　1985年
6．高下洋一他 『可部寺山１号遺跡』財団法人広島市文化財団発掘調査報告書第11集　2004年
7．㈶広島市歴史科学教育事業団 『寺山遺跡発掘調査報告』㈶広島市歴史科学教育事業団調査報告書第19集　1997年
8．広島市教育委員会 『高陽台遺跡群発掘調査報告』広島の文化財第21集　1985年
9．広島県教育委員会 『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1977年
10．虹山古墳発掘調査団 『虹山古墳発掘調査報告』1989年
11．広島市教育委員会 『弘住遺跡発掘調査報告』広島市の文化財第25集　1983年
12．広島市 『新修広島市史』第１巻　1961年
　本村豪章 「広島県安佐郡高陽町上小田古墳調査報告」『広島考古研究』第２号　1960年
13．潮見浩 『中小田古墳群』広島市の文化財第16集　1982年
14．高下洋一 『史跡中小田古墳群遺構状況確認調査報告』財団法人広島市文化財団発掘調査報告書第９集　2004年
15．㈶広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(Ⅳ)　1987年
16．㈶広島県埋蔵文化財調査センター『石井ヶ原遺跡群』 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第89集　1991年
17．東広島市教育文化振興事業団文化財センター 『史跡三ツ城古墳発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第42冊　2004年
18．㈶広島県埋蔵文化財調査センター 『金口古墳群』広島県埋蔵文化財センター調査報告書第145集　1997年
19．本村豪章 「備後三次市太郎丸古墳発掘調査報告」『古代吉備』第４集　1961年
　松崎寿和 『広島県史(考古編)』広島県　1979年
20．広島県双三郡・三次市史料総覧編修委員会 『広島県双三郡・三次市史料総覧』第５篇　1974年
21．広島県教育委員会 『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(１)』 1978年
22．四拾貫小原発掘調査団 『四拾貫小原』 1967年
23．伊藤実 「浄楽寺・七ッ塚古墳群」『三次市史Ⅱ』 三次市史編集委員会　2004年
24．広島県教育委員会・三次市教育委員会 『大久保遺跡発掘調査ニュース 』 1976年
　山県元 「大久保５号古墳の発掘調査」『広島県文化財ニュース』第70号　1976年
25．広島県教育委員会 『酒屋高塚古墳』 1983年
26．松崎寿和 『三次市天狗松・善法寺および宗祐西古墳群発掘調査概報』 1963年
　松崎寿和 『広島県史(考古編)』広島県　1979年
27．公益財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室 『下矢井南第３～５号古墳』中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(34)　2014年
28．広島県教育委員会 『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(１)』 1978年
29．広島県教育委員会 『大風呂古墳発掘調査概報』 1976年
30．河瀬正利編 『広島県比婆郡東城町中央山古墳群の発掘調査』 1978年
31．寺山遺跡発掘調査団 『寺山遺跡発掘調査報告』 1979年
32．三原市役所 『三原市史』第１巻　1977年
33．広島県教育委員会 『亀山遺跡第２次発掘調査概報』 1983年
34．福山市史編纂会 『福山市史』上巻　1963年

図　　版

図版１

1. 調査区全景（調査前・南上空から）

2. 調査区全景（南上空から）



1. 調査区全景（調査前・西上空から）

2. 調査区全景（西上空から）

図版３

１．第２号古墳
（上空東より）

２．第２号古墳
（南西より）

３．第２号古墳周
溝内遺物出土状況
（北から）

１．第２号古墳墓坑
検出状況（西から）

２．第２号古墳墓坑
土層断面（南から）

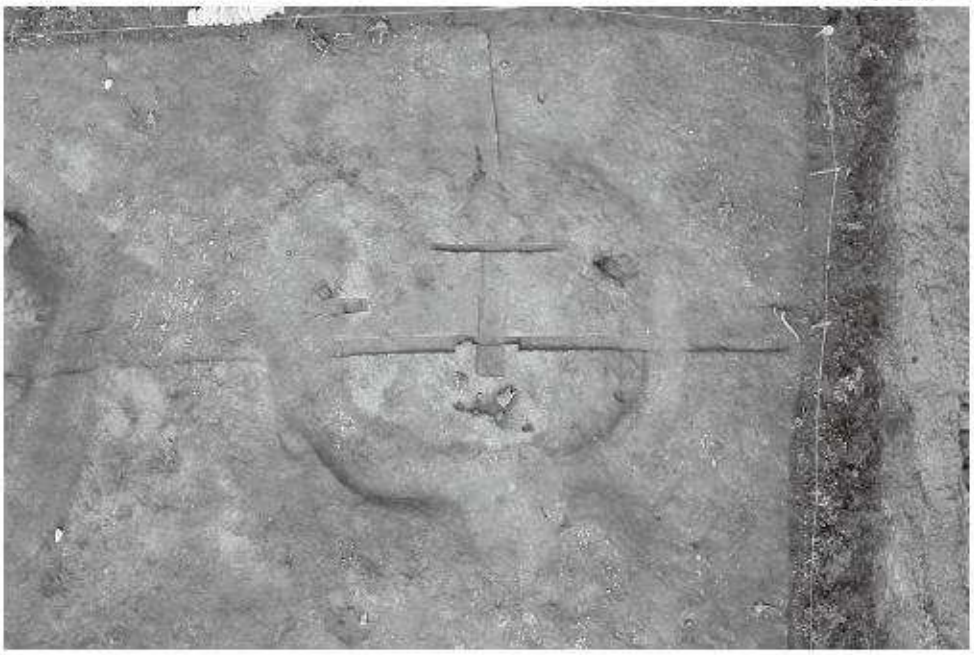
３．第２号古墳墓坑
遺物出土状況
（南から）

図版５

１．第２号古墳墓坑
完堀状況（西から）

２．第２号古墳墳丘
土層断面
（南西から）

３．第２号古墳北側
周溝土層断面
（西から）



１．第３号古墳
（上空東から）

２．第３号古墳
（南から）

３．第３号古墳
周溝土層断面
（北東から）

図版７

１．第３号古墳
（南東から）

２．第３号古墳
（南西から）

３．第３号古墳墳丘
土層断面（東から）

1．第３号古墳素環頭大刀出土状況（北西から）

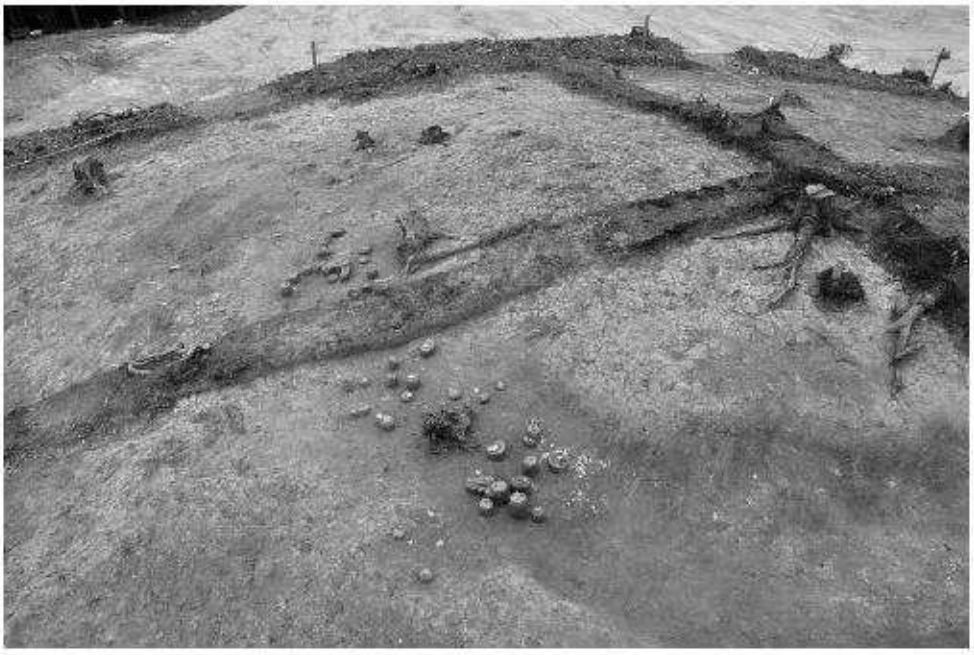
2．第３号古墳棺跡検出状況（南西から）

3．第３号古墳棺跡土層断面（北東から）

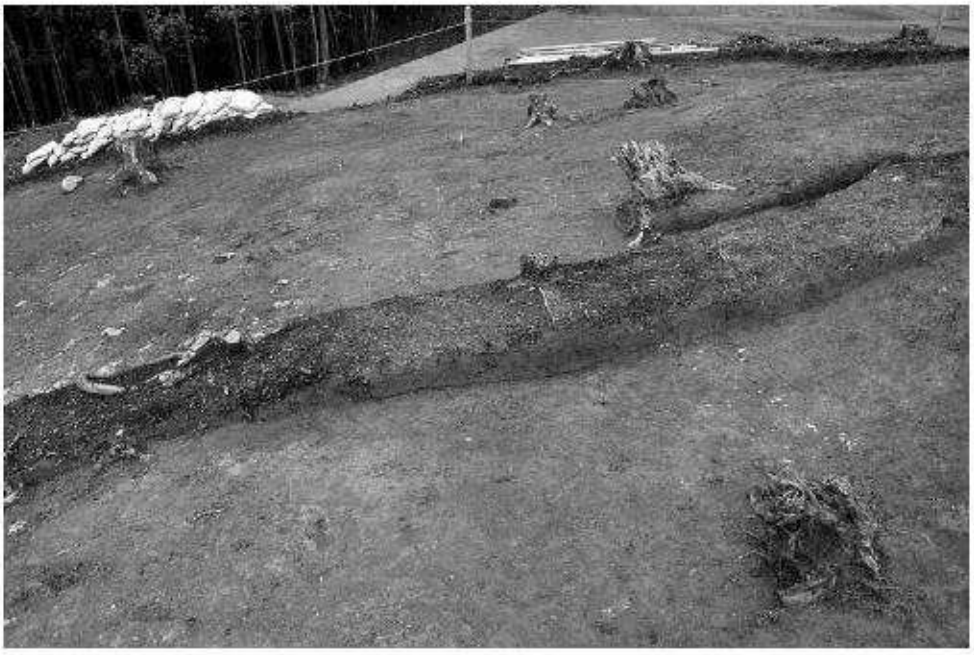
4．第３号古墳棺跡土層断面（北から）

図版９

1．第３号古墳周溝
北側遺物出土状況
（北から）



2．第３号古墳南側
遺物出土状況
（北から）



3．第３号古墳南側
土層断面（北から）

1．第４号古墳
（南から）

2．第４号古墳
周溝北側土層
断面（東から）

3．第４号古墳周溝
遺物出土状況
（東から）

図版 11

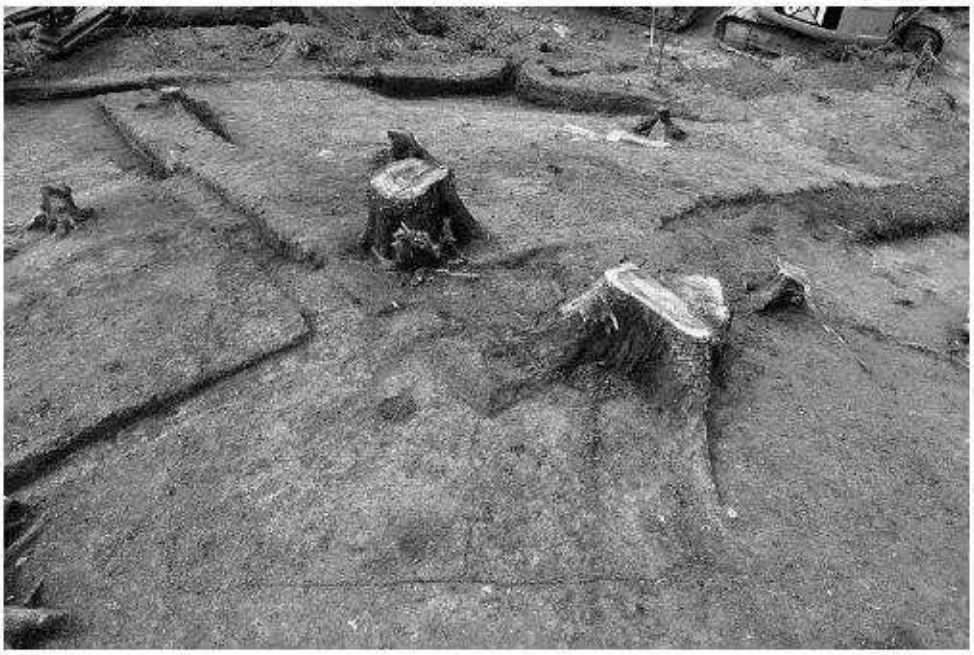
1．第４号古墳墳丘土層断面（南から）

2．第４号古墳墳丘西側土層断面（南から）

3．第４号古墳墳丘東側土層断面（南から）

4．第４号古墳墳丘北側土層断面（西から）

5．第４号古墳墳丘南西側（外護列石部分）土層断面（南から）



1．第４号古墳盗掘坑
検出状況（北東から）

2．第４号古墳盗掘坑
土層断面（南から）

3．第４号古墳盗掘坑
内天井石検出状況
（南から）

図版 13

1．第４号古墳前庭部検出状況（南から）

2．第４号古墳前庭部土層断面（南から）

3．第４号古墳前庭部崩落石検出状況（南から）

4．第４号古墳前庭部完堀状況（南から）

1．第４号古墳
外護列石東側
（南西から）

2．第４号古墳
外護列石西側
（南東から）

3．第４号古墳
前庭部外護列石
南側遺物出土状況
（南から）

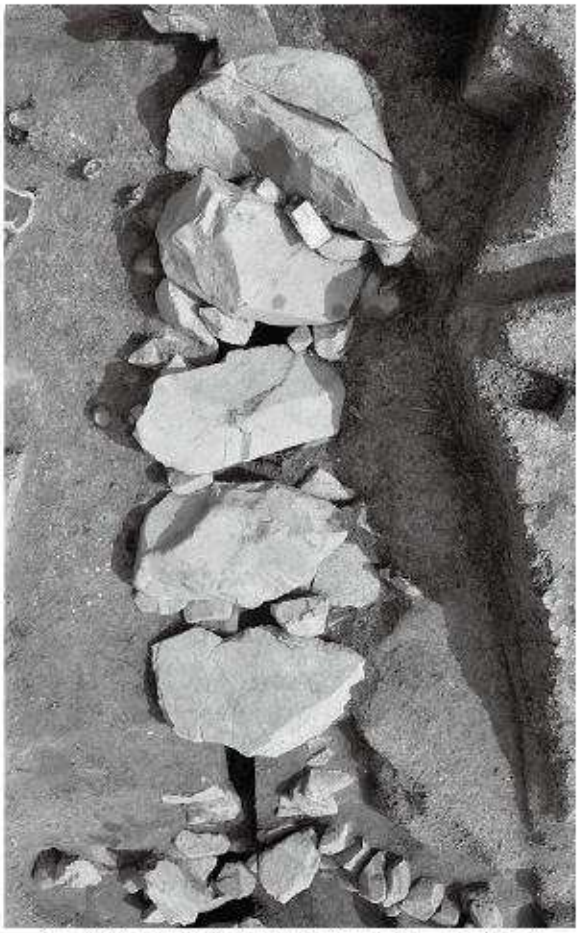
図版 15

1．第４号古墳
石室天井石検出
状況（東から）

2．第４号古墳
石室天井石（北
側）検出状況
（南東から）

3．第４号古墳
石室天井石（南
側）検出状況
（東から）

1．第４号古墳石室天井石検出状況　（西から）



2．第４号古墳石室天井石検出状況　（南から）

3．第４号古墳天井石（南側２石）除去後（南から）

4．第４号古墳天井石（南側から３石目）除去後（南から）

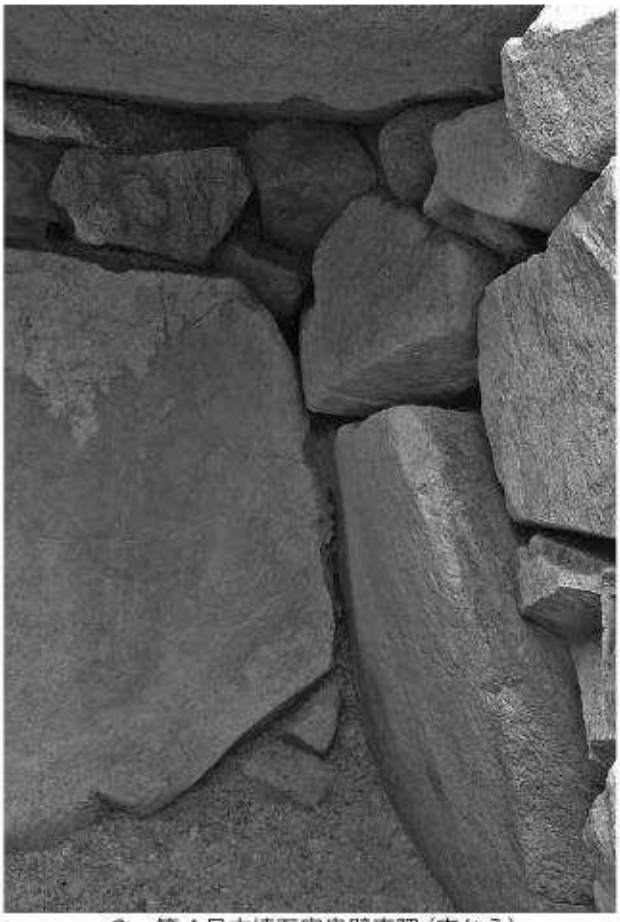
図版 17

1．第４号古墳石室奥壁（南から）

4．第４号古墳石室内見通し（南から）

5．第４号古墳石室内見通し（北から）

2．第４号古墳石室奥壁西隅（南から）



3．第４号古墳石室奥壁東隅（南から）

1．第４号古墳
石室全景（南から）

2．第４号古墳
石室西側壁南側
（南東から）

3．第４号古墳
石室西側壁北側
（南東から）

図版 19

1．第４号古墳
石室東側壁南側
（南西から）

2．第４号古墳
石室東側壁南側
〔積み直し部分〕
（東から）

3．第４号古墳
石室東側壁北側
（南西から）

1．第４号古墳
石室内遺物出土状況
〔奥壁側最上層〕
（南西から）

2．第４号古墳
石室内遺物出土状況
（南から）

図版 21

1．第４号古墳
石室内遺物出土状況
〔奥壁側〕（南から）

2．第４号古墳
石室内遺物出土状況
〔東側壁側〕（西から）

3．第４号古墳
東側壁側遺物出土状況
（西真横から）

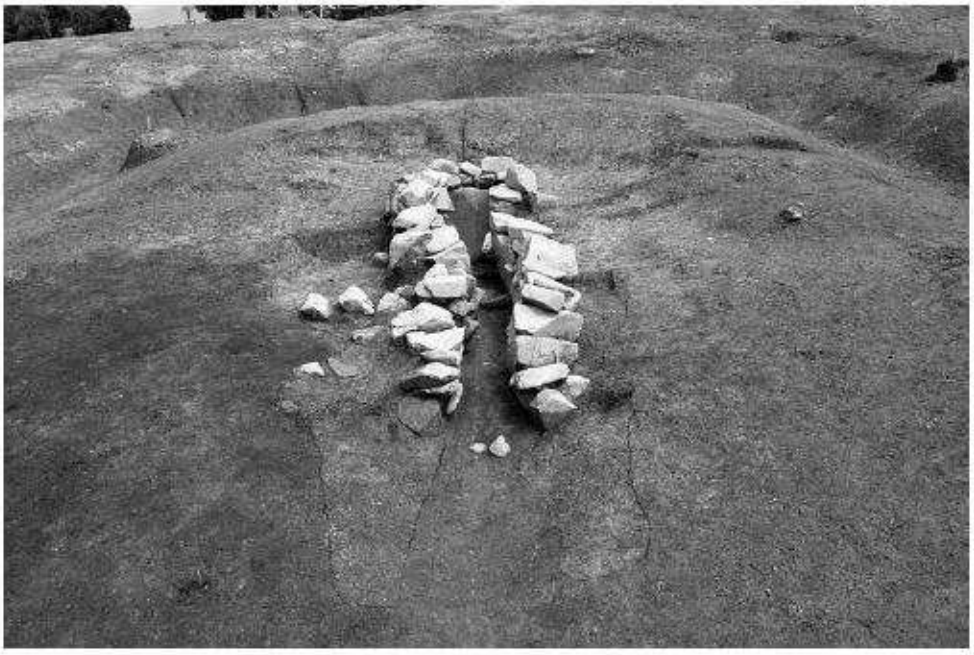
1．第４号古墳
東側壁側遺物出土状況
（南真横から）

2．第４号古墳
東側壁側遺物出土状況
〔坏 16 の下側〕
（西から）

3．第４号古墳
東側壁側遺物出土状況
〔坏 13 の下側〕
（西から）

図版 23

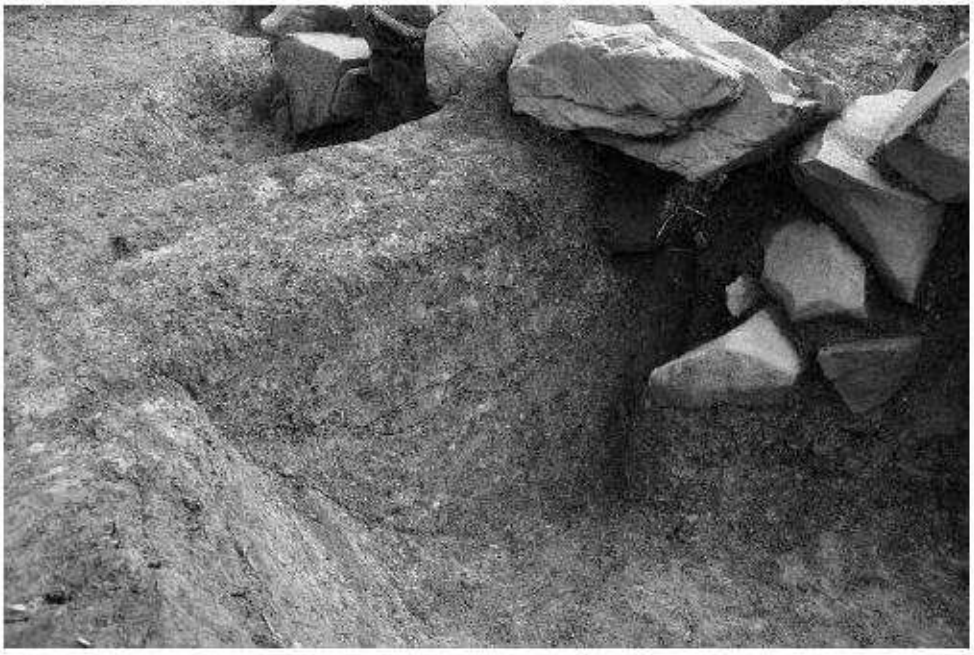
1．第４号古墳
東側壁側遺物出土状況
〔坏蓋１・５の下側〕
（西から）



2．第４号古墳
墓坑検出状況
（南から）

3．第４号古墳
墓坑内壺 18 破片
出土状況（東から）

1．第４号古墳
羨道部側壁の積み替え
部分・崩落石除去後
（南から）



2．第４号古墳
墓坑西側埋土土層断面
（南から）

3．第４号古墳
墓坑東側埋土土層断面
（南から）

図版 25

1．第４号古墳
石室基底石
（南から）

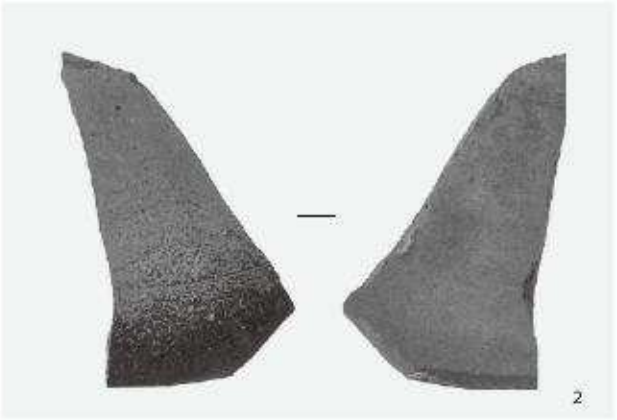
2．第４号古墳
石室基底石
（北から）

3．第４号古墳
墓坑完堀状況
（南から）

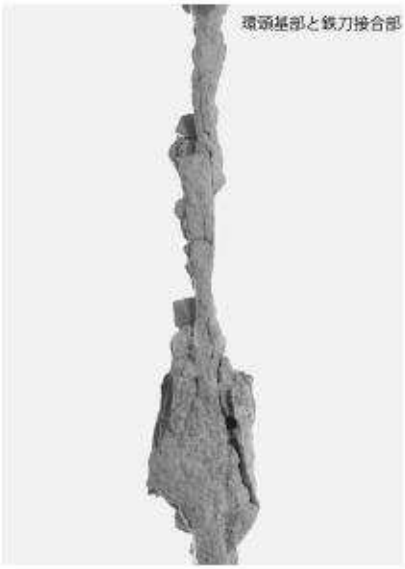
1．溝 SD 1
（上空南から）

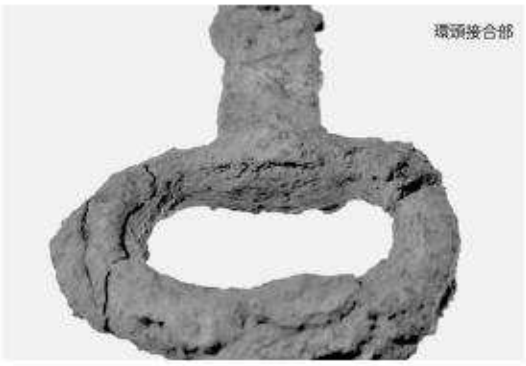
2．溝 SD 1 土層断面
（南から）

3．調査区完堀状況
（南から）



出土遺物 1





出土遺物 2

図版 29

第3号古墳墳丘南側

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

出土遺物 3

第４号古墳

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

出土遺物４

13

14

15

16

18 底部

17

18

19

出土遺物 5

石室内出土土器

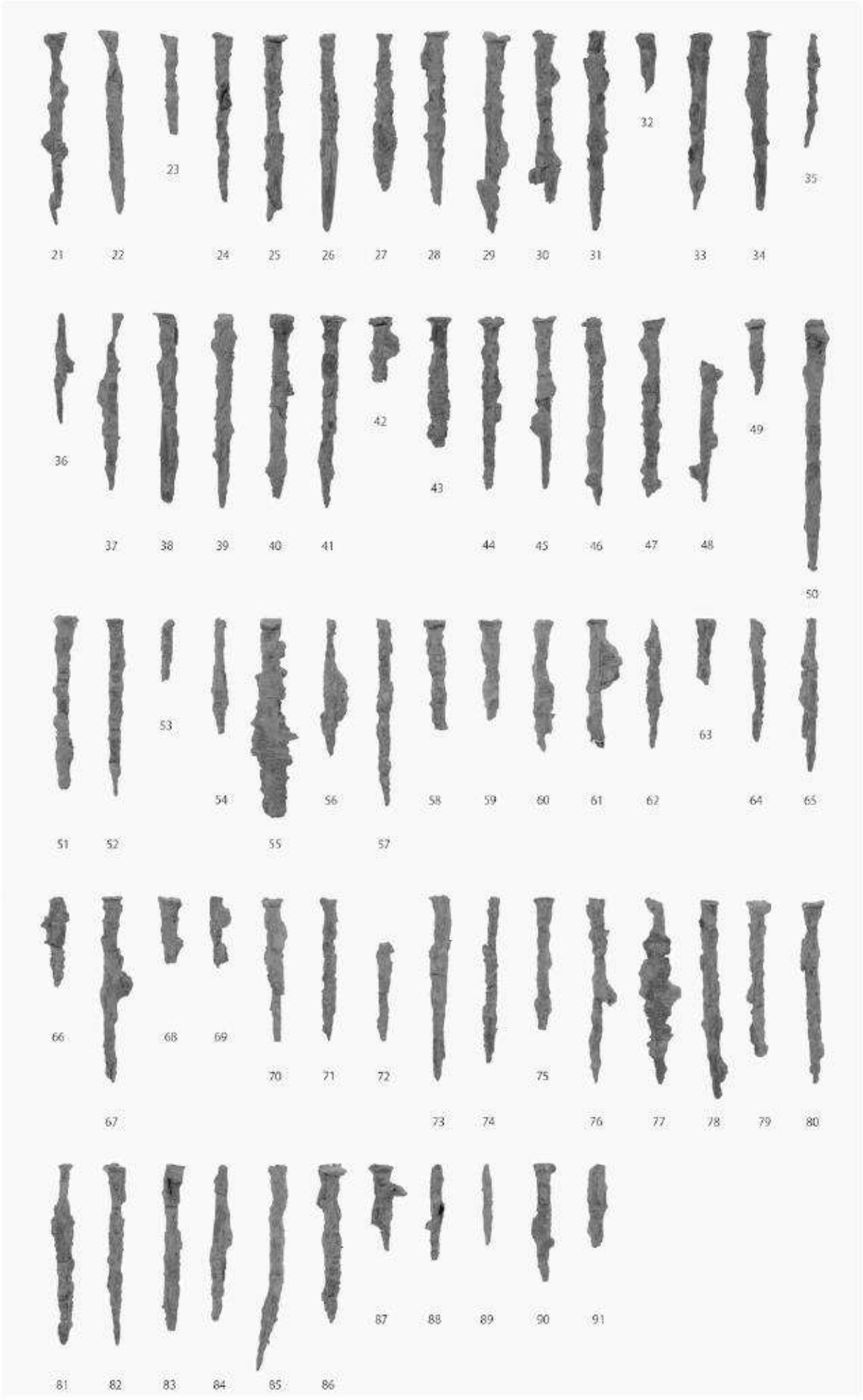
20

20底部

92

93

出土遺物６


21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91

出土遺物 7

報告書抄録

ふりがな	もんであつもりだい２・３・４ごうこふん
書名	門田敦盛第２・３・４号古墳
副書名	
巻次	
シリーズ名	広島県三次市文化財調査報告書
シリーズ番号	第８集
編著者名	濵岡 大輔
編集機関	特定非営利活動法人 広島文化財センター
所在地	〒732-0052　広島県広島市東区光町二丁目９番22丸子ビル601号　℡(082)299-7413
発行機関	三次市教育委員会
所在地	〒738-8501　広島県三次市十日市中二丁目８番１号　℡(0824)62-6191
発行年月日	平成27(2015)年６月30日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
門田敦盛第２号古墳（旧第４号古墳）	広島県三次市東酒屋町敦盛437-1	34209		34°46′35″	132°52′0.7″	20140507～20140912	858㎡	記録保存調査
門田敦盛第３号古墳（旧第５号古墳）	広島県三次市東酒屋町敦盛437-1							
門田敦盛第４号古墳（旧第６号古墳）	広島県三次市東酒屋町敦盛437-1							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
門田敦盛第２号古墳（旧第４号古墳）	古墳	古墳時代中期	古墳	鉄剣・鉄鏃・須恵器	円墳・鉄剣・鉄鏃
門田敦盛第３号古墳（旧第５号古墳）	古墳	古墳時代中期	古墳	素環頭大刀・刀子・須恵器	円墳・素環頭大刀
門田敦盛第４号古墳（第旧６号古墳）	古墳	古墳時代終末期	古墳	須恵器・鉄釘	方墳・横穴式石室・柄香炉形土製品・台部打ち欠き須恵器

要約	門田敦盛古墳群は，三次市街地から南西約３㎞の低丘陵上に位置している古墳群である。第２号古墳は径約10mの円墳で，埋葬施設からは鉄剣・鉄鏃が出土した。第３号古墳は径８mの円墳で，埋葬施設からは素環頭鉄刀と刀子が出土した。第４号古墳は一辺9.5mの方墳で，横穴式石室の開口部から外護列石がつく。石室内から須恵器（坏身・坏蓋・高坏・台付長頸壺・柄香炉形土製品）・鉄釘が出土した。
資料保管先	三次市教育委員会

門田敦盛第２・３・４号古墳発掘調査報告書

発　行　日　平成27(2015)年６月30日
編　　集　特定非営利活動法人 広島文化財センター
　　〒732-0052　広島県広島市東区光町二丁目９番22　丸子ビル601号
発　　行　三次市教育委員会
　　〒728-8501　広島県三次市十日市中二丁目８番１号
印　　刷　株式会社ユニバーサルポスト